
西涼の鉄ちゃん

坂本 康弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西涼の鉄ちゃん

【Nコード】

N9370S

【作者名】

坂本 康弘

【あらすじ】

『外史』は望まれた。

なーんて、かつこいいことは言う気はないね。

俺は翠達と楽しく暮らせばいいんだから。

旅？する気はないね。翠という時間が減ってしまうじゃないか！

あ、戦い？はっ、蒲公英にも一騎打ちで勝てないさ（血涙）

御使い？俺の嫁はやらんからな！

大好きな翡翠さん、翠、蒲公英、碧玉のために毎日大奮闘！

書類仕事はかかってこい！内政も！謀略も！戦略もな！

武人ばかりの西涼で、その中にある一つの職業。
俺は・・・『文官』として頑張る！

「戦目」「西涼の問題児」（前書き）

どもつす。

ここでは作者が煩惱を思い出して書いたものです。

変なところも、おかしいところも、怪しいところもあるかもしれないが

よろしくお願いしますm（――）m

「戦目」「西涼の問題児」

「あ・い・し・て・る〜!」

「いきなりなんだ!？」

「へぶっ!」

また

「だ・い・す・き・だ〜!!」

「ひ、人前でやめろ〜!!」

「あべしっ!!」

新たな『外史』が望まれた。

「愛してるぜ・・・」

「なっ。・・・・・・・・・・って訓練中にいきなり出てきてんだよ
く！」

「ぽかぶっ！」

史』を作り出す。

望まれた『外史』はうねり出し、『外

「あらあら、今日何回目かしら」

「えーと、27回目だよ、もうお姉様ったら、恥ずかしがっちゃって、お兄様も積極的♪」

「大丈夫です。翡翠さんも蒲公英も愛してます」

「人の母親と従妹に手をだすなあー！」

「なにを！血は繋がってなくとも家族だ！」

「いや、まあ、確かにそうなんだが・・・って違う！家族なら尚更だろ！」

「あ、嫉妬？翠は可愛いな」

「可愛い言っない！てか嫉妬じゃない！」

この『外史』には『管理者』は介入しない。

やっほー。

初めての人ははじめまして。

またの人は久しぶり。

みんな会ったことないと思うけどね（笑）

俺？

俺は馬鉄っていうんだ！

おうよ！鉄ちゃんって呼んでくれ！

あ、ちなみに馬超こと翠とは姉弟じゃないよ？

うん、あれだ。

養子ってやつだな。

なんかさー小さいころの記憶覚えて無くてさー。

気がついたら馬に囲まれててー馬と一緒に走り回ってたんだよねえ。

とまあ、でも今は麗しい馬騰さんこと翡翠さん。

初々しいところが愛らしくてたまらない翠。

悪戯好きではあるが、小悪魔なところが可愛い蒲公英がいるから幸せだよ。

あ、ちなみに俺の真名^{まな}って玉。

タマって呼ぶなよ？

某家族構成図が意外と難しい家族の猫じゃないからな！

そんな感じで・・・

「今は蒲公英成分補給中」

「もうお兄様つたら」

可愛いよ、可愛いよ。蒲公英。

その小柄な体が俺の懷に納まって可愛いよ。ムフフ・・・

「こ、こらお前たちなにやってんだよ！」

「あ、お姉様つたら嫉妬〜」

「ななななな何言っただよ！蒲公英！これから鍛錬だぞ！相手をしろ！」

「ええ〜！？」

頑張って蒲公英〜」

「玉！お前もだよ！」
ぎょく

「ええ〜！？」

まあ・・・仕方ない、俺の実力見せてやるぜ！

「行くよ！お兄様！」

「おう！かかってこい！」

「えいつ！」

「あぶつ！」

あ、あるえ？

「・・・玉たまふざけてるのか？」

「いやいやいや！ふざけてないから！」

お、おかしい！

俺、蒲公英がやりを振り上げたから剣で防御したはずなのに！」

「・・・なんで蒲公英なんか力負けしてんだよ・・・」

冷めた目で見てくる翠。

俺……なんだか泣けてくる。

「仕方ないだろ！俺は……俺はあくまで……【文官】なんだからよ！」

それでも、女の子に負けるのは悔しいんだけどね……。

俺ってさ。

武の才能が無なの。

無といつても”皆無”なんだけどね（苦笑）

ちなみに、弓でも一般兵に勝てない。

というか全てにおいて一般兵に勝てない。

つーか、ラーメン屋のおじちゃんにも勝てない。

よくお世話になつてゐる給仕のおおばちゃんにも勝てない。

あえて言えば町の子供達の方が体力あると思う。

つーか街を支配するボス猫にも勝てない（涙）

・・・そ、俺は主人公体質じゃないってこと。

だからね、主人公補正がかかってそうな翠のために頑張りたいな！
って思つててね。

だつて、あんな元気な子いないよ？

翠には多分、手も足も使わなくても俺に勝てると思うよ。

覇気とか。・・・怖い怖い。

武で勝てないなら智では負けない！って奴だな。

幸い、翡翠さんのところには名高い文官が少ないそうなので俺の出番が増える！

俺は・・・俺は翠も翡翠さんも蒲公英も幸せにする！」

「なななななななななななななななな」

「どうした翠。顔を真っ赤にさせやがって・・・あ、俺に惚れた？」

「兵士の訓練中になにを叫んでるんだよおおおおおおお！？」

「ぎゃばおおおおおおおおおお！？」

嗚呼・・・西涼兵のみんながクスクス笑ってるよ・・・。

だが・・・

だが俺は・・・

「こんなところで負けるわけにはいかない！！！」

「なんかかつこいい台詞の無駄使いだな！」

「ふっ翠よ・・・」

「な、なんだ」

もはや、西涼兵のことは忘れていいのか・・・そこが可愛いんだけどね

俺の普通じゃない雰囲気気圧される翠。

「俺はな・・・まだ本気を見せていない」

「なんだ・・・と・・・？」

・・・乗ってるのかな、天然なのかな。・・・翠は後者だろうけど。

「くられ！必殺！！」

「くっ！」

翠が愛槍の銀閃を構える。

だが・・・甘い！！

「戦略的『撤退』……！」

「んなっ……！？って、こらー！玉待てー！」

翠の鍛錬後の服は……拝借させてもらっぜ！

「なに考えているか知らねえけどやめろー……！」

ふふふ・・・至福。

「全く・・・翠はまだ純情すぎるんだからそんなにからかわないで頂戴」

俺、今翡翠さんに膝枕してもらってます・・・。

西涼の人って、乗馬する機会が多いから細くて綺麗なんだよ？

もうサイコー！

「何言ってますか。からかっていませんよ。俺はいつも一直線です！」

俺の眼前には翠以上に大きい双丘。

最強、軽く死ねる。

「ふふ・・・まあ、私も貴方を頼りにしているんだから」

「翡翠さんよく政務抜け出しますもんね！」

「玉」

「ひい」

なんか尋常じゃない殺気が出てきたけど撫でられたのでよしとする。

馬騰さんこと翡翠さんは羌族の混血だから髪の色が茶色くなって眉

毛も太くなる。

違いはそこなのかな？

俺はむしろ、そこが特徴的で好きなんだけどね。

漢民族の偉い人にはわからんです。

結構、差別されるんだよね。

何度殺そうと思っちゃったか・・・（どちらかというと翠の方が手出しするの早いから俺が抑え役になるんだけどさ）

あ、一昨日は匈奴討伐行ってきました。

あ、俺、軍師です。

翠や翡翠さん蒲公英のためにがんばりますよ！

さて

「翡翠さん」

「なにかしら？」

「胸揉ませてください」

「いいわよ？」

「やったぶおおおおおおおおおおおおお！？」

・・・あの水色っぽい下着は。

「翠、玉をいきなり蹴っちゃだめでしょ」

「な、母上もなに簡単に胸触らせようとしてるんだよ!」

「いいじゃない。私の胸よ?」

「な!破廉恥だ!」

「私の玉だもの」

「母上のじゃない!私のものだ!」

・・・え?」

「あるえ〜?お姉様?」

「あああ、あ、あああ」

「翠・・・俺のこと・・・」

そんな翠・・・

「「俺（お兄様）の前で告白なんて・・・」」

翡翠さんにもこやかに笑っていらっしやる。

「ば・・・」

「ば？」

「馬鹿あああああああああああああああ！！！！」

「みきやあああああああああああああああ！！！！」

俺と翠の愛のはな「ちげーよ！」し・・・

始まりました！・・・というか、とっくに始まっていますけど。

「戦目」「西涼の問題児」（後書き）

姓：馬

名：鉄

真名：玉ぎよく

たま、とは呼ばない

姓は馬ではありますが、作中でも書いてあるように血のつながりはありません。

史実の馬鉄と違って、文官よりになります。

というか、一般兵よりも弱いことになってますが・・・。

変態な彼ですが、どうかあたたかい目で見てください。
次回もよろしく願いします。

二戦目「問題児の賊討伐」(前書き)

ネタはあるのに書く時間がない・・・。

「戦目「問題児の賊討伐」

「・・・なあ、玉ぎょく」

「なんだ？翠愛しているぞ」

「っ！・・・もういい」

・・・全く。顔を真っ赤にしちゃって可愛いじゃないか！

「ねえお兄様」

「なんだい？」

「蒲公英のことどう思ってる？」

「もちろん愛しているぞ」

「ほんと？やった」

可愛いので撫でてやる。

もう！翠ったら・・・羨ましいのか」

「翠」

「・・・なんだよ」

ありゃあ、これはご機嫌斜めですね。

「愛していぶ！」

うう・・・顔面にクリーンヒット・・・効いた・・・。

「ふざけてないでしつかり政務やれよ！」

「といってもお姉様のお仕事の量ってお兄様の半分以下なんだけどね」

「な！仕方ないだろ！あたしは武官なんだ！それに玉は文官だろ！？」

「そうだぞ蒲公英！俺は文官なんだから。優しいな蒲公英は」

「えへへ」

撫でてやる。可愛いのう、可愛いのう。ロリコンって言われても構わない。可愛いは正義！

「む・・・」

あ、不機嫌になっちゃった。

「今日の翠はご機嫌斜めか」

「別になんでもねえよ」

「女の子がそんな言葉使っちゃいけません！」

「あたしは女の前に武人だ！」

昨日なんて土まみれだったからな〜

ボーイツシュなのは好きだぞ♪

「武人の前に翠は女の子なんだ！」

「っ！！！！」

そんな顔真っ赤にしちゃって可愛いなもう！

さてさて、ゴホン

今はこーきんとーとかいう宗教の集まった人が東の方で大暴れしてるみたいなんだよね〜

あ、黄巾党だったか。

なんか占い師が流星がどーのこーの言ってたらしいけど、俺達には関係ない。というか俺は関係ない。

翠達と一緒に平和に暮らせればいいんだけどね〜。

・・・まあ、どうせ乱世は来るんだけどさ。

漢王朝がへろんへろんとか。

だから今回のこーきんとーが怒ったというわけだし。

それなのに翡翠さんは「私はあくまで、漢王朝の臣下だ」とか公言してしまっているしねえ。

まあ、どうか攻めてくれれば軍師の俺は考えるだけだしねえ。

名前は鉄、なのに文官だよ？

まあ、いいんだけどさ。

あーあ。さつさと黄巾党の乱が収まらないかな。

噂の天の御使いがどうにかしてくれないかな。

冀州の人達には悪いけどね。

いつでも涼州に来てね、歓迎するよ。

馬たくさんいるよ。

「申し上げます！」

・・・まあ黄巾党がいなくても、どこにでも盗賊とやらはいるんだけどねえ。

「どうしたんだ！？」

「前に匈奴を撃退した地域付近の荒野に盗賊千人ほどが集まっています！」

「よし！蒲公英！いくぜ！」

「えー！？蒲公英もー！？」

「そうだ！母上は今、長安にいつちまったしな！あたしが代理だ！」

あ、そういえば翡翠さん長安に報告書纏めに行っちゃったんだっけ。

「お、お兄様」

助けを求めるように上目遣いをしてくる蒲公英。

「がふう」

「吐血っ！？」

「い、いや、鼻血だ……。さてさて、翠く千五百人ほど用意してくれ」

「ああ！さすが話が分かるぜ！玉！」

話が分かるというか、被害が大きくなる前に潰すだけなんだけどさ

「蒲公英は兵站ね」

「ううゝ御意」

は、鼻血が出そうだが……。我慢我慢……。

え？俺はどうするって？

「なにもしませんけど?」

「玉も来い!」

「あ、一緒に居たいんだね!」

「違う!」

正直言うと、この戦、余裕なの。

数でも勝ってるし、なにより戦慣れした西涼兵だもの。

今回の西涼兵は、匈奴撃退で不完全燃烧の人達ばかりを集めてきました。

さて・・・さつさと終わらせて翠といちゃいちゃしようっ

「…んで、どうするんだ」

「おお、翠がちゃんと策を聞いてくれるとは」

「お姉様模擬戦とか、いつも突撃だもんね」

「あ、あたしだって兵士の命を背負っているんだよ！」

俺と翠、蒲公英と翡翠さんで模擬戦やると翠、いつも俺の策、無視して突撃しちゃうんだもん。

「まあいいや、今回は波状攻撃をかけるから。翠は八百を率いて先陣を駆け抜けてくれ、蒲公英は五百、俺は二百率いるから」

「な、なあ」

「ん？翠どうした」

「玉お前たったの二百で大丈夫なのか？」

「なんだ心配してくれるとは嬉しいぞ」

「べ、別に心配してるわけじゃねえよ！」

見事なツンデレありがとう。

また惚れたよ。

「横陣引いて突撃。約束は絶対に味方の被害を出さないこと。翠は先陣を切ってくれ」

「ああ！任せろ！」

「蒲公英は第二陣ね」

「うん！蒲公英に任せて♪」

「で、俺が片付けるから」

あ、ちなみに俺、武官みたいに積極的に戦わないからね？

言っただじゃん。一般兵にも勝てないって。

まあ、剣を振り回すくらいはするけどさ。

「翠は敵将討っちゃっていいよ。てかガンガン攻めて」

「おう！」

「よし、出陣！」

翠によって率いられた千五百の西涼騎兵が進む。

…ああ、翠の足は健康的で綺麗だなあ。

触りたい。触ったら殴られるけど。

陣は横陣。名前の通りに横に広がってる陣。

掃討戦だし、平原だし、騎兵にはやりやすい。

あー、西涼兵の皆さんはやる気満々だなあ。

馬上槍をブンブン振り回してるし。

騎馬弓兵の訓練をしとくべきかな。

「伝令！十里先に賊の軍勢！数は千！無陣形のままこちらに向かつております！」

「ご苦労、翠」

「ああ」

十里なら目を凝らせば土煙が見える距離だ。準備態勢に入らせて大丈夫だ。

さて、初陣じゃないけど、こうして翠が大将として演説するのは久々だな。

…ああ、勇ましい翠も可愛いなあ。

「西涼の勇者達よ！盗賊達は愚かにも獣に成り下がった奴らだ！奴らはあたしたちの西涼の民を襲うような奴らだ！許すな！西涼の錦马超のあたしに続けえ！！」

『おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』

早速、翠率いる八百の騎兵がわずか千人の盗賊達に駆ける。

騎兵の真骨頂はその突撃力。

近ければ馬の突撃によって踏み潰され、離れていれば騎兵の槍に貫かれる。

騎兵は訓練に時間がかかるが、西涼の兵はみな、幼い頃から馬に乗り慣れている。

一人一人が馬術を極めた騎兵だ。

「錦馬超が従妹！馬岱行くよー！」

『おおおおおおおおおおおおお！！』

第二陣の蒲公英率いる五百の兵が翠を追うように駆ける。

太もがいいねー。初々しい可愛らしさがあるよー。

こらそこ！変態とか言うな！

確かに俺は蒲公英の太ももを突いたり、撫でたり、触ったり、揉んだり、舐めたりしたいが！

俺は変態という名の紳士だあ！

「どうどうと言ってんじゃねえ!!」

「ば、馬超様!?!どうなされたのですか!?!」

「あ、いや、わりい。…なんか玉がふざけたことを言った気がしてな…」

さて、蒲公英もちょうどいい所来たからね。

俺も行くとするか。

「馬鉄こと…俺について来い!!」

『おおおおおおおおおお!!!!』

某暑苦しくてたまらないあの人の真似。乗ってくれる兵士達は【西涼娘連合】の館員だ。

ちなみに盟主は俺だったりする。

説明しよう！

【西涼娘連合】とはその名の通り西涼在住の美しい、または可愛い女性を愛でる連合だ！

人気ナンバーワンはもちろん翠、次に蒲公英、その次に翡翠さん。で、次が今はいないけど？徳。

次にもいろいろいるけど、主なのはこの女性達なのだ。

？徳は鮮卑族討伐の遠征に行っちゃってる。

速く帰ってこないかなあ。クーデレを味わいたちものだ。

さて。

翠が突撃によって盗賊達を混乱させ、すぐさま蒲公英の騎兵が突撃で攻撃をする。

騎兵の力強さに浮き足立っている。

波状攻撃は強いんだよ。

残った数少ない盗賊達が俺の率いた騎兵によってトドメをさされる。

え？俺？

剣は抜いてないよ？だって危ないもん。

なんだかんだで終わった賊討伐。

あつというまだけど仕方ない。

少ないし、西涼兵が強いんだから。

負傷者はいるが、睡をつけておけば治る傷だけだ。

・・・西涼の女性兵はとても豪快だ。・・・男よりも。

さてと、翠といちゃいちゃしてこよつと」

「おー翠お疲れ」

「玉か、お疲れ」

回軍の時には西涼兵の談笑が響く。

必殺技使った？とか、戦利品あったか？とか、……何人殺した？……とか……。

ちなみに最後の話は主に西涼の女性兵だったりする。

「楽勝だったね〜」

「そりゃあ西涼兵だもの。そこらの賊には負けないだろ」

「あんまり天狗になるなっつーの」

「おお、翠が慣用句を使った」

「なんでそんなことで驚くんだよ！」

「うおお！？」

俺の鼻先に翠の拳が掠った！？

ああ、きれいな腕だな。舐めたい。

……あれ？

「翠、お前右手の手甲怪我してるじゃん」

切ったのか、血が出る。

翠の綺麗な手に傷をつけたやつめ……殺してやる！」

「いや、すでに死んでるから。それに、ただの流れ刃だよ。玉が言うには唾つけりゃあ治るんだろ？」

「確かにそうだ。・・・だから」

「え？」

翠の手首を掴んで切った傷口を・・・ぺろり♪

「うひゃあ!？」

「あゝ!お兄様ったら大胆♪」

『ひゅ〜
♪』

おお、西涼兵の男子中学生みたいな声が聞こえる。

「あばばばばばばばばばば」

翠の手甲はおいしいな。ぺろぺろぺろ。・・・てか、れろれろ？

顔を真つ赤にしている翠もみたいが、今は翠を味わおう。

ああ、いいねえ。馬上だから揺れるけど。

というか、馬も呆れたように見てるし。

「な、名、名、名、名、な、な、・・・」

「名?俺、馬鉄」

ん？なんかデジャヴを感じる・・・。

「なにすんだよーーーーー！！？」

「ぐばはあああああああつあああー！！？」

翠の手はおいしくいただきました♪

「誤解されるようなこと言っな！！」

「あでぶっ！？」

・・・ああ、真っ赤になる翠はかわいいなあ・・・。

あれ？どっかの姉者好きな人と似てきている気が・・・。
・・・気
のせいかな。

二戦目「問題児の賊討伐」(後書き)

玉：

やつほー。馬鉄こと玉でーす。

翠は・・・おいしくいただきましたあw

・・・まあ、傷口ペロペロしてただけなんだけどね・・・。

あ、そうそう。顔が非常に痛いです。殴られすぎました。いてえ。

というわけで、今回は賊討伐ですね。短いのはきつと弱いからだと思っ。

だつて普通に考えてみてくださいよ？

戦慣れした騎兵となんの訓練もしてない賊のうえ、数でも勝つているんですから？

負けたり、苦戦したり、死人を出す程度なら俺、近い未来死んでますからね？

さて・・・この痛みを洛陽から帰ってくる翡翠さんに慰めてもらおう・・・。あ、？徳も帰ってくるそうなので、甘えてみようかな。てか甘えてくれ！

さて、今回は普通に翠や蒲公英といちやいちやしてます。

あと、翠や蒲公英達としてみたいことをリクエストしてくれれば俺が代理でしてあげますよ？

もちろん性的なこ「どがあん！」ぐぼはあ！

と、というわけ次回もよろしく・・・バタリ

三戦目「問題児は喜ぶ」(前書き)

…完結が早そうな気が…。

三戦目「問題児は喜ぶ」

最近、劉備ーとか、曹操ーとか孫策ーとかが西涼まで伝わってきたねえ。

はつきり言ってどうでもいい。

だから俺は翠達と一緒にいちゃいちゃしていられればいいって言うてますって。

天の御使いは劉備軍にいるそうですねー。

どうでもいい。

ちよーかくを曹操が討ち取ったみたいですねー。

どうでもいい。

こーきんとうも弱まってきたそうですね。

どうでもいい。

西涼は大方平和です。

匈奴に壊滅的な被害を与えましたし、しばらくは来ないと思いますよー。

鮮卑も討伐を完了したという報告も来ましたしー。

？族とは仲良くやってます。

羊肉おいしいですよー。

臭みはありますけど、お肉柔らかいし。

翠も「うめえー！」とか言っていましたね。

ちゃんとよく火を通してから食べましょう。

さて、翠や蒲公英、翡翠さんの魅力を書くときりがないので、めんどろですが、西涼の情勢でも語りますかー。

西涼名士とはそこそこ仲良くやってますー。

それ以外の地域だといじめられますー。

儒教の懸念って面倒なんだよね。

漢民族じゃないとか、混血はどうだーとか。

めんどろだよねえ。

食料の生産も安定してますよ。鉄製の農具は便利だって農民の方々も言っていました。

最近、工兵の訓練始めましたー。

あと？族の一部の方や異民族の遊牧民のちょっとした団体の人達が仕官してくれましてー。

騎射による騎馬弓兵の訓練も始められるようになりました。

騎馬弓兵の中距離戦って強いんだよ？

すると、俺のいる執務室に誰かが

「？令明、ただいま帰還しました」

「翡翠ー！おかえりー！」

「あうう」

思いつきり抱き締めます。久しぶりだからね！

彼女こそ？徳だ。

彼女は純漢民族だけど仲良くやってるんだよ！

しかも強いんだよー。

黒髪が綺麗なんだよー。

「ぎよ、玉様・・・離れてください」

「だーめ、あと一刻はこうしてるの」

「い、一刻もですか・・・？」

彼女こそ西涼の誇る武将の一人？徳。

闇のように漆黒の髪が美しいんだ。

身長は翠と変わらないけど男の俺がぎゅーってすれば俺の胸に顔を埋めてくれる。

表情に乏しいけど顔に出ないだけで表情豊かなんだよ？

ほらー今も顔を赤く染めているし。

「もー！かわいいー！」

「ぎよ、玉様！お戯れを！」

従順な所が・・・いい！

時々酷いこと言っけどツンデレとして許容範囲だ。

うん、最高。

まじばねえ。

さて・・・こうしていたいのだが俺も軍師として文官としての仕事があるわけで・・・。

「でもやっぱりこのまま一刻いたい!!」

「そ、それはさすがに!!」

む・・・？

この匂いは少し汗をかいてるな？・・・ニヤリ

「クンカクンカ」

「な、なにをなさっているのですか!？」

「甘い匂いがするからねえ」

「や、やめてください!まだ私は戻ったばかりで・・・」

おお、顔が真っ赤だ。

・・・むしろ俺は興奮するけどね!

「大丈夫。最高」

「い、いやあああああああああああああ!!!」

「あぎやあああああああああ!!!」

頭砕けた!

絶対に頭砕けた!!

「ぬおおおおおおお・・・」

「・・・玉様が悪いんです」

あ、頭が砕けそう・・・てか絶対に砕けた・・・!

「では、私は自室に戻りますので」

「お、おう。また後でな」

「はい」

うう・・・仕事モードに入っ たな・・・。

普段は無表情なんだよ？仕事モードはね。

プライベートモードになると顔を赤くしたりする。かーわいいー。

もう最高。

武威最高。

翠も蒲公英も翡翠さんも碧玉も最高。

「・・・さて、仕事か」

翠とかはどうせ調練だし、さすがに邪魔は出来ないなので仕事をする
ことにする。

なになに・・・？「馬超様は俺の嫁！」

「帰れ！！」

s i d e 翡翠

私は馬騰。字は寿成だ。

武威の太守をやっている。

さて、馬鉄こと玉のことを話そうと思う。

彼は昔・・・そうだな、翠が八歳の時だったか。

昔、『名馬の群れが安定付近にいる』という噂があった。

もちろんその噂を聞きつけた金に目を眩んだ者や、単純に名馬が欲しいと思っている者達はその群れを探すわけだが、全員大怪我をして戻ってきた。

何があっただろうと私は翠を連れ、噂の元となっている名馬の群れを探した。

すると、本当に遠目でも分かるほど毛づやの良い名馬の群れがあった。数は百頭ほど。

その時、盗賊であろう三十人ほどの男達が金にしようとしたのかその名馬の群れを襲おうとしていた。

私は助けようと馬を駆けたが目を疑ってしまった。

翠とそう歳の変わらないであろう少年が馬を指揮して盗賊達を返り討ちにしているのだ。

まるで動きを待っていたように、伏兵の如く現れる馬。その数百頭。つまり群れの数は二百頭だったのだ。

兵もなく、馬だけで一人、指揮をする少年は馬だけで盗賊達を討伐した。

馬に何度も踏み潰され、体当たりされという状況。

彼は呆然とする私に近付いてきた。

するといきなり彼は言った。

『俺を拾ってくれ!!』

・・・私は耳を疑ってしまったが、面白そうなので彼を養子にすることにした。

理由が面白そうというのはきつと、かつて楊州で名をはぜていた好敵手の性格が移ってしまったのだろうな。

彼を養子にすることで必然的に名馬二百頭を手に入れることが出来た。

西涼で匈奴討伐で私は名をあげ武威太守となった。

名馬の動きは凄まじい。その馬に乗った騎兵は最強かもしれないといえるほどである。

・・・さて、彼はどうやら自分の名前すら分らないらしい。

というよりも真名もだ。

私は【馬】の姓を与え、【鉄】という名を授けた。

理由としてはもし私にもう一人子供が出来ていたらつけようと思っていた名だったからだ。

真名は玉。^{タマ}・・・彼には輝く何かがあると思ったという理由が大きい。

何よりも彼の統率力。馬だけで賊討伐とありえない。だが、ありえたのだから凄い。

あの歳で。多分、統率力だけなら翠も超える人物になるだろう。

ただ・・・。

ただ、残念なのは武の才能が欠片もなかったことだろう。

しかし、文官としての才能は大きくあった。

とりあえず持ってきた書物を暗記は出来なくても感覚で覚え、慣れてしまっている。

内政、戦術、戦略、陣形などどんどん覚えていく。

？徳こと翡翠は漢王朝から賊討伐の要請があった時に助けた村の娘だった。

私は彼女に真名を与えた。娘同然だしね。私の翡翠と玉をあわせたものだ。

翡翠の救出は玉の軍師としての才能が開花した時とも言える。

あれは見事だった。

気が付けば彼はいなくてはならない存在となっていた。人となりも文官としても。

翠や蒲公英、翡翠にべったりだったけど・・・。

気が付けば幼かった翠も蒲公英も翡翠も玉もすっかりたくましくなっていた。

これが親元を離れる子供達の姿を見る親というべきだろうか。

私も歳を取ったものだ。

それでもそんな私を女性扱いしてくれる玉には少し嬉しかったりする。

…亡くなった旦那を思い出す。

不器用で頼りないけど、優しいところが。

s i d e o u t

s i d e 翠

「う…厠…」

寝る前に水飲み過ぎたかなあ・・・？

う・・・余計なことを考えていたら尿意が・・・。

もらすわけにはいかないぞ・・・！

そんな感じであたしは厠に向かっていると、光が部屋から漏れている。

まだ、誰かおきてるのか？

もう遅い時間だしなあ・・・

まさか・・・

「幽霊・・・？」

前に玉が話していたことがあった。

なんでも死んだ人達が出てくるらしい・・・。

幽霊は触ることもできないという・・・。

「うう・・・」

ど、どうしよう・・・！

廁行かないと！

誰がいても知らないから、あたしはその部屋の前を通り過ぎようとする。

しかし、その部屋の中にいたのは・・・

「・・・玉？」

あいつ、こんな時間になにやってんだ？

というか、あの書簡の山って・・・

「なにしてるんだ翠？」

「うきゃあ!」

・・・はう!!

いきなり話しかけられて・・・によ、尿意が・・・

「・・・腰抜けたのか？」

「あうあうあう・・・」

驚いちゃって下半身に生暖かい感触が・・・。

うう・・・どうしよう・・・あえて玉に見られちゃったよお・・・。

「うええええん・・・」

「なぜ泣く!？」

「だってよお・・・玉に見られちゃったんだしい・・・」

「なーに言ってたんだ。俺は翠の全てが好きなんだ!・・・いや、好きじゃなく大好きだな!たとえ、どんなことをしても俺は翠を愛しているぜ。だからさ、泣き止んで!あわわ・・・あ、やばい・・・じゃなくて、はわわ・・・じゃなくて、な?な?翠、安心しろ、俺はこう見えて口は堅い、言わないからな?むしろ誰にも教えない!眼福、眼福・・・むしろ俺は見れて嬉しいぞ?はう!その上目遣い

はやめてくれ！かわいい！翠かわいい！あー！違う！そうじゃなくて、まあ、うん。人はお漏らししちゃうのも仕方ないさ！・・・じやなくて、えーとどうやって慰めればいいんだ？あー、うん、とりあえずまあ・・・」

あたしに手を差し伸べられる手。

「着替えようぜ。後処理は任せろ」

「・・・うん」

変態だけど。

変な奴だけど。

エロエロ魔王だけど。

やっぱりただの変態だ。

それにしても・・・あの大量の書簡って・・・なんなんだ・・・？

三戦目「問題児は喜ぶ」（後書き）

翠：

よう、あたしだ。

…というか、なんというか、恥ずかしいところ見られたというか…。えーと、なんだ「お見苦しいところをお見せして申し訳ありません」って言えばいいのか？

今回は母上が玉を拾ってきたことだったな。あたしも驚いちまったよ。「今日から新しい家族よ」なんて言って帰ってきたし。だけど、あいつの分からないこといっぱいあるんだよな？
まあ、よく分からないけどよ。

次は黄巾党の乱のあとだったな。確か…董卓が上洛したんだってな。ま、あたしには関係ないけどな。

次回もよろしく頼むな！

四戦目「問題児は悩む」(前書き)

…うう。

もう、こんな展開に…。

一週間一回更新は…遅いなあ。

四戦目「問題児は悩む」

「むむむ…」

唸り続けるのは俺、馬鉄。

…本当なら現実逃避して翠といちゃいちゃしたいものだ。

ただ今は…

「ぎよ、玉様…」

「どうした？」

「なぜ私は…玉様のお膝の上にいるんでしょうか…」

ぶつちゃけると、そこにいたから。

「翡玉は…俺の膝上にいるのが嫌なの？」

「と、とんでもない！…ただ、私のような堅物が玉様のお膝の上によろしいのでしょうか…」

犬耳があつたら、絶対に、垂れてる。

可愛いよお…。

「もう最高」

「ひゃあ！」

抱き締めてやる・・・おお・・・体温が心地良いなあ。

さて、話を戻すか。戻すというか、何に戻るのかわからないけど。

俺が唸る理由を教えてやろう！

えんしょーから来たのだよ！

【董卓マジうぜえゝみんなで倒そうぜ】ってな！

というか、いつの間に進んでいたの？

董卓は会ったことはないけど、悪い噂は聞かなかったからなあ。

なんだろーね、まったく。

面倒だから正直行きたくないさ。それに霊帝だっけ？

いつの間にお亡くなりになられたし。

反董卓れんごーなんて忘れて武威でごろごろしてたいさ。

だけど・・・現実はその上手いかないんだよね。

曹操が肯定の勅命を持ってきた！とか言ってるけどさ、絶対にあれ偽物じゃん。

西涼兵士舐めるなよ？

めっちゃ強いんだからね？

俺なんて片手でやられるさ絶対。

董卓軍は洛陽の皇帝直下の親衛隊だったか、禁軍も入っているし。

それに呂布だよ、呂布。こーきんとー三万潰したって奴。こわいこわい。

・・・まあ、翡翠さんが「漢の臣下」を公言しているからには、連合に参加しないといけないんだけど。

本当ならね？そんなの忘れてさ、さっきも言ったけど、ごろごろしてたいんだよなあ。

連合なんて名ばかりで勢力を伸ばすための集まりだしさー。

あ、でも御遣いには会いたいな。どんな人だろう。俺の嫁達はちゃんと釘を刺さねば。

・・・む、ここは【西涼娘連合】の布教が出来るチャンスか？

ここで名声を上げれば、ただでさえ少ない西涼名士も着てくれるかな。

ま、その筆頭はあくまで俺なんだけどさ。

「なー、翡翠」

「・・・なんでしょうか」

顔を赤く染めていてかわゆーい！

「この連合の誘い・・・どう思う？」

「大方、袁紹の董卓への嫉妬でしょう・・・。袁紹に比べると董卓の方が良い意味で名高いですから。玉様も分かっておられるでしょう？」

「さすが俺の嫁」

「よ、嫁！？」

ああ・・・もう・・・可愛いなあ・・・。

いただきます、したいなあ。

おいしくいただきたいなあ。

すると俺のいる執務室に足音が近付いているのが分かる。

・・・この軽快な足取りは・・・

「お兄様いる？」

やはり蒲公英か。

ちなみにコツコツというのが翡翠。

カツカツというのが翡翠さん。

タツタツタツが翠。

トタトタトタが蒲公英なのだよ。

「いるよー」

「た、蒲公英！？」

「あー！翡翠さんずるーい！お兄様の膝の上にいるなんて！」

「こ、これは誤解です！そ、その・・・玉様が無理矢理・・・」

「なんだかんだで抵抗しなかったけど」

「はうゝ！」

「あ、逃げちゃった」

ああ、もうかわいすぎるって。

あとで抱きついてみよつと。

「・・・で、どうしたの？」

「あ、うつん。兵士の調練が終わったからお兄様に会いに来たの」

なにこの小動物。

「可愛すぎるぞ蒲公英！ほれほれ！俺の膝の上に来い！てか、来てください！」

「いいの？やった〜」

膝の上に座る蒲公英をぎゅ〜と抱き締める。

あー、この抱き心地最高。

「お兄様ったら〜苦しいよ〜」

「嬉しそうなくせに〜」

ぎゅっ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。

最高。

もうこの柔らかさ最高。

「くすぐりたいよ〜」

この太ももの柔らかさマジ最高。

この短パンいいね。スカートもいいけど、この短パンもいいね。

ほっぺも柔らかいなあ〜。

ああ、癒される。

えんしょーなんかの手紙なんて破ってちぎって燃やして灰にして蒔

きたい。

いらないよ、あれ。

連合なんて面倒だよ。

翠といちゃいちゃしてれば最高だよ、ほんと。

いつになったらお胸を揉ませてくれるのだろうか。

・・・いや、触れるものではない。愛でるものだ。

・・・は、今電波を感知した・・・。

む、この足音は・・・

「玉、いるかしら？」

「翡翠さんなんでしょうか？」

「あ、蒲公英もいるの。ちょっと席外してくれないかしら？」

というか、すでに慣れすぎて俺の膝の上にて抱きついてる蒲公英はスルーなんですよね。

あらら、珍しく蒲公英ちゃんが顔をほのか染めていますよ。かわゆーい！

レアだね。

・・・とまあ、それは置いて。

翡翠さんの迫力に押されてますよ。

「う、うん。分かった」

多分、真面目な話なんだろうね。

威圧感とか出てますよ。蒲公英も押されて、逃げるように出ていますよ。

俺も気絶しそうです。こわー。

さて、いるのは俺と翡翠さんのみ。

こんな美女が目の前にして、年頃の俺と二人っきりってうひょーな状況なんですけど。

ま、襲つても返り討ちにされるだろうけどさ。

「・・・で、どんなお話なんでしょうか」

椅子に座る翡翠さんの前にお茶を差し出す。

いつ準備したかって？

紳士に不可能はないさ。
へんたい

翡翠さんはお茶を一度、口に含むと話し出した。

「貴方はこの未来どう見る？」

そりゃあ、もう、いろんな人と語り合ってたから。

「・・・確実に乱世は到来しますね。というか、すでに乱世ですよ。単に乱世の範囲が広まったような感じですね。最初は宮中だったのが、大陸中に広まった感じですよ」

「その乱世の英雄は」

「やはりかかせないのが、【乱世の奸雄】の曹操、まだ勢力は小さいですが【仁君】劉備。今は袁術の支配下ですが、いずれ江東で名をはぜるでしょう【小霸王】孫策」

「・・・その中に翠はいないのね」

「翠は主君としては、あまりいい方ではありませんからね。それに【西からは兵、東からは官】でしたっけ。ま、俺は彼女がいるだけでやる気になります」

「やっぱり西涼名士筆頭はすごいわね」

「といわれても俺だけなんですけど」

ぶっちゃけ西涼は辺境の地なんだよ。

常に異民族と争っているせいで名士の人が集まろうとしないんだよね。

だから、いないんだよ文官。

多少頭良いくらいで、無駄にプライドが高い奴はいるけど本物の名士からは良い評判はないのさ。

文官はいるが、ぶっちゃけ名士には程遠い。せいぜい字が読めるくらいだ。

「…やっぱり連合には参加するつもりですか」

「私が漢の忠臣を公言してるからね・・・迷惑をかけるわ」

「いえ、迷惑なんて。むしろ、今回の勢力を伸ばしましょう」

「策があるのかしら？」

俺はニッコリと笑って

「もちろん、西涼にその人ありと言われた人物の右腕ですから」

「そう、なら・・・」

「っ!？」

おお！翡翠さんの巨大な胸が俺の胸板に・・・！

「褒美くらあげようかしら？」

「な、ななな・・・」

むきゃ ああああああああ!？

むむむむ胸が・・・や、柔らかい！

って冷静に感触を楽しむな俺！確かに柔らかい！うん最高！普段は嬉しいけど、なんというかこの状況って！？あー！うー！興奮はするけど！はわわー！？あわわー！？

「玉は初めてだったわね？・・・私は旦那が亡くなっていらいね」

「はにゃあ！？」

耳たぶを甘噛みされたー！？

うおおお！？なんという破壊力！？翡翠さん最高！大人の女性最高！もちろん翠は愛しているぞ！

おおー！？

うおおお！？

大人の会談のーぼるー♪幸せは、どこにあるんだ？・・・じゃない！

こ、このまま俺は褒美ということとで翡翠さんにあーんなことやこーんなことや、むふふなことが・・・

「ぶほっ！」

俺の意識はそこで途切れた・・・。

side 翡翠

・・・まさか、普段あんなに積極的な玉が鼻血で気絶するとわね・・・。

私は乱れた服を調え、気絶している玉を膝の上に乗せる。

くかーと眠る玉の髪を撫でる。

翠のように柔らかい感触。

・・・亡くなった夫を思い出すわね。

それに・・・

「確実に感づかれてるわね・・・」

私の体調のこと。

玉は何故だか分からないけど、私や翠の体重まで詳しく知っているらしい。・・・なぜかしら。

玉は私に「体重が減ってますよ？女性なんですからもう少し、ふくよかの方が美しいと思いますよ」と。

「はぁ・・・」

思わず溜め息が出る。

医者に見てもらったところ治療が出来ないらしい。

漢中にも赴いたけど・・・不可能らしいわね。

・・・すでに時代は次の世代に移っている。

私も時代から見れば心のこりはない。次の盛大である翠や玉がいるのだから。

ただ・・・ただ、私はまだ、こうして翠や玉達と子供達と一緒にいたい。

こう思うとやっぱりつくづくと歳を取ったとを感じる。

・・・連合は・・・玉や翠に任せましようね。

私は病氣と戦おう。西涼の馬寿成の名にかけて。

四戦目「問題児は悩む」（後書き）

蒲公英：

やつほー♪ガサツな西涼に咲く花こと蒲公英だよー♪

なんかお兄様悩んでるみたいだけど…本当に悩んでるのかなあ？ずつと碧玉ちゃんとイチヤイチヤしてる気がするよー。ずるーい蒲公英もー。

うー反董卓連合に参加するんだってさー。面倒だねー。お兄様もずつとめんどくさーい、めんどくさーいって呟いていたもん。
…あ、やめてお姉様！手をぐーにしないで！や、いやあー！

…うう、痛いよお。お兄様に慰めてもらってく…ご、ごめんなさいお姉様。

とりあえず行つてきまーす！

次も応援よろしくね！

以上西涼の馬超の従妹馬岱こと蒲公英でしたー♪

五戦目「問題児は連合軍を見る」(前書き)

反董卓連合開始。

鉄ちゃんも頑張りますよ。

五戦目「問題児は連合軍を見る」

おはよー！鉄だよー。

これから反董卓連合に参加しに行きまーす。

ちなみに兵士は二万しか連れていきません。

頑張れば二十万くらい動員できるよ？

だーけどー面倒だし、食糧も足りないしー、そんな集めても意味がないしなー。

「それじゃあ行ってきます母上！」

「ええ。私の名代としてしっかりやりなさいよ？」

「ああ！任せてくれ！」

「それじゃあ蒲公英も玉も翡翠^{ヒスイ}も翠を支えてあげてちょうだいね？」

「うん！蒲公英がんばるよ」

「もちろんです」

「はっ。姫の力になれるようにこの令命尽くします」

… かったいなー。

まあいいや、さてさて行きますか。

「あ、翡翠さん」

「どうしたの？」

むふふ・・・先日は不意打ちで大打撃を受けましたが・・・

「ご褒美まっていますからね」

「んな・・・っ！」

おおー、大人っぽい翡翠さんが珍しいー。

さすが親子、翠にそっくりだなー。

いい年し「玉？」はい！すみません！

「とりあえず行ってきますねー。翠ー号令ー」

「あ、ああ。出発だあーっ！ー！」

『おおおおおおおおおおおおおおお！ー！』

行軍を始める二万の西涼兵。

内わけするとー。

歩兵五千、騎兵一万五千ですねー。

やっぱり西涼兵は騎兵が真骨頂なので。

歩兵千人は輜重隊として兵糧運ばせてます。

リアカーもどきも作ったんですよ。・・・まあ、西涼は辺境の地のせいでタイヤというか木製の車輪が壊れやすいですけど・・・。

そこは鉄で補強してあるので、耐えられる・・・はず・・・。

まあ、ともかく大丈夫だと思うよ。

二万の兵一ヶ月くらいは食わせられるように手配したからね。

技術提供してあげた商人の人とも契約してあるし。

兵站も大丈夫。

砥石の使い方を教えてあるから、切れ味が落ちても自分達でどうにか出来る。

あと、兵士の人達は小腹が空いた時用に、貴重なお米を干した糒ほしいという兵糧みたいなを用意した。

もしもようね。まあ、腹いっぱいにならないし、味もしないけど忍者米みたいなもんだな。

・・・なので、あんまり食べないようにと。

行軍中はどうだったって？

うん、揺れる。腰痛いなあ。

え？違う？

翠達はどうしたって？

そりゃあ・・・

『なあ翠・・・』

『な、なんだ？そんな改まって』

『俺・・・本当に翠のこと・・・』

『ゴ、ゴクリ・・・』

『好きだあああああああああああああ！！』

『だからって抱きつくなああああああああ！！』

『ひでぶっ！？』

『いいもんいいもん。碧玉といちやいちやするもん』

『いちやいちやって・・・また姫に怒られたのですか？』

『なんで分かったの？』

『玉様だからです』

『・・・照れるな』

『褒めてません！』

『じゃあお胸を揉ま・・・』

『破廉恥です！』

『あべしっ!？』

『割れた・・・絶対に頭割れた・・・てか力手割れた・・・』

『よし、蒲公英となら一番安全だよなあ』

『もうお兄様ったら積極的なんだから』

『だって蒲公英が可愛いんだもん』

『そう？やったー』あ、そうだあのねお兄様』

『どうしたの？』

『蒲公英ね・・・最近、少し胸が大きくなったと思うの』

『なんだ・・・と・・・！？』

『だからね・・・お兄様に確認してほしいの』

『ああ！任せ．．．』

『ぎょーくーう？』『玉さまぁー？』

『ひい！般若！』

『あたしというものがあひながら．．．』『私がいますのに．．．』

『え？いいの？好きなことしていいの？』

『調子に．．．』

『え？ちよ、翠なんで銀閃構えるの？碧玉もなんで？その斧なに！』

『『天誅！！』』

『ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！』

何事もないよ？

え？頭から出血してるって？

こ、これは汗だ。

俺は汗血馬ならぬ汗血人間だからな。

さてさて、着いたどー！

おお、【公孫】【袁】【曹】【孫】か。有名所はこんな感じか。

まあ、他からも来てるよ？北海太守孔融さんとか。

十八諸侯だもん。

えー？全員紹介しろってー？

やだやだやだ！俺興味ないもん！

あくまでも軍師として知ってるだけだもん！

「すげーな。たくさんいるなー」

「そうですね。玉様は把握していらっしゃいますか？」

「おいおい。流石の玉も連合軍に参加してる連中を把握してるわけ
…「してるよ」…してんのか」

「どこの人かは省略するけど、表にするとこんな感じ」

「用意周到ですね。流石です」

陶謙

韓馥

孔？

劉岱

王匡

孫策（あくまで袁術の客将）

袁紹

袁術 公孫 馬超 喬瑁 袁遺 張超 張楊 孔融 鮑信 曹操 劉備

おおー。

というかほとんどおじさんだったなあ。

というか陶謙のじいさん、よく来れたな。最近、病にかかったとか聞いたことがあるけど…。

「詳しく知りたかったら来なさい」

「誰に言ってたんだ」

…さてさて、早速軍議に行かないとな。

袁家の兵士が来たし。

「ほら、翠」

「あ、ああ。西涼太守馬騰の名代馬超だ。総大将に取り次ぎを頼む」

「はっ……ですが、まだ総大将が決まっておらず……」

「は？」

ポカンとする翠。可愛いなあ。

なんか、固まってるので進むことにする。

「あーはい、わかりましたあ。陣営を張り次第、軍議行きますので」

「はっ、それでは失礼します」

去っていく兵士。……その背中はいささか小さく見えた。

「じゃあ翡翠」

「じいじ」

「陣営を張つといて、俺は少し連合軍を見回ってくる。終わったら陣営で待ってくれ」

「御意です」

「じゃあ行つてきまーす」

「面倒ごと起こすなよ」

どっかの誰かさんと違つて起こしませんよー。

おおー。兵力は大体十五万程度か。

袁家の二人が一番兵力があるな。

まだきていない諸侯もあるけど、やっぱり十五万程度と考えておこ
うと。

董卓軍の兵士は二十万。

それに天下無双と名高い呂布や神速の將の張遼、良將にして猛將華雄、黄巾の砦を陥落させた数は数知れぬ【陥陣営】高順。

こええー。

死亡フラグ満載だよなあ。

董卓軍の大半は何進のを併合した朝廷直下の禁軍らしいけど、西涼兵がいる。

こええー。

？水関には八万の董卓軍と張遼と華雄がいるらしいなあー。

こええー。

俺死ぬんじゃない？・・・いや、翠達がいる限り俺は死ねないな。

・・・まあ、すでに手は打ってあるし。どうにかなるだろうな。

お、あれって【劉】の旗か。

まあいいや、陣営で翠を拾ってさっさと総大将を決めてもらわないとな。

「翠ーいこー」

さて、他の諸侯はどんな人がいるのかなあー。

まあ、別に俺は翠達にしか興味がないんだけどね。

「袁紹^{あれ}ってなに？」

「・・・何も言っな・・・」

・・・名士の伝で聞いていたのだが・・・ここまでとは・・・。

いや、美人なのは間違いないけどさ。

俺は・・・ちょっとそこまでストライクゾーンは広くないっす。

「なあ玉^{ぎょく}・・・」

「何も言っな・・・」

「いや、袁紹^{あれ}はいいから。・・・さっきからあたしのことを舐めてくる奴がいるんだけど・・・」

「なんだと！？そんな男は俺が成敗してくれる！」

「男じゃないっつーの。・・・その、あたしの向かい側らへんにいる」

「え・・・」

あれって・・・

女好きで有名な・・・

曹操さんじゃないですかorz

実際に会ったことはなかったんですが、これも名士の伝で。

女好きだとか、霸王だとか。

まあ、外聞だけなら知ってますがね。

・・・曹操さんの手から俺は翠を守ってみせる！

さてさて、あらら、あちらに座っているのはしゅーゆさんですね。

名士の伝で噂は聞いてます。

綺麗な人ですねー。

でも、俺は翡翠さんの方がいいな。

袁術ちゃんはどうぞ。。。げふんげふん、子供ですか・・・。

隣にいる警備員みたいなバスガイドみたいな女性は誰でしょうかね？

袁術軍といたら紀霊さんあたりが有名ですね。あの人中々強いらしいです。

さて、なんか「総大将は誰が相応しいでしょうか！」なんていう声が聞こえてくるけど、それはどうでもいい。

とりあえずどんな人がいるのかなー！。

「・・・なあなあ、玉」

「どうした？」

「なんで、袁紹^{あれ}総大将やりたそうなのにやらないんだ？」

「あー、あれだ。責任転嫁したいんだろ」

「・・・よくわかんねえよ。とりあえずこれ、どうにかならないか？」

よしきた。

「袁將軍！よろしいでしょうか！」

「はい？貴方みたいな貧相な男性がこの高貴な私に何のようですか？」

おお、精神的に痛い。

「はっ！西涼太守馬騰の名代馬超の軍師を勤めさせていただいて
る馬鉄と申します。このたびは四世三公で有名な袁家の袁將軍にお
会いでき真に光栄です！」

「そ、そうですか。それで何の御用ですか？」

おお、効いてる。

「総大将の件！この馬鉄が推薦いたしましょう！この連合軍に相応
しい兵力も家柄も兼ね備えている袁將軍が相応しいと思います！他
の方で異論がある方は？」

「なにもないわ」

「構わん」

とりあえず袁術以外はいいな・・・って「妾がなるのじゃあー！」
っていう声も気のせいだな。

「おーほっほっほっ！馬鉄さんは見る目がありますね！ではこの私、
袁・本・初がこの連合軍の総大将を務めさせていただきますわ！」

「さすが袁將軍です」

袁將軍というのは、理由があるよ。

だってこの時期袁紹の官位ってなんとか將軍だもん。

「それでは私を推薦してくれた馬鉄さんの主君である馬超さんにお

願いがあのですが・・・」

「あ、ああ」

「この連合軍の先鋒をお願いしたいのですが！おーほっほっほっ！」

あー、やっぱりか。

先鋒でよつとかしないからなあ。無駄メシだもん。

怖がって誰一人出ようとしない。というか玉砕しろ！だもんなあ。

さて、翠は理解してるかな・・・

「本当か！やったぜ！玉！先鋒だつてよ！」

・・・翠ちゃんはやっぱりアホの子でした。

ほらほら・・・周りの人達も苦笑してますよ・・・。

「で、で受けてくださるのですね！」

「ああ！任せてくれ！」

・・・あらあら、翠ちゃんまだ気が付いていませんか。

まあいいや、大体先鋒やるつもりだったしね。

その時、

「あ、あれえー？もう軍議・・・終わっちゃい・・・ましたか？」

桃色の髪の毛の胸の大きな女の子が現れました。

すげえ。翠よりもでけえ。

というか翡翠さんくらいあるな。

十分すぎる。

「みたいだねえ・・・」

続いてきたのはこの世界では見たことのないような白い服を着るイケメン。

死ね！リア充死ね！イケメン滅亡しろ！

「あら、遅かったですわね！この袁本初が、馬鉄さんの推薦で総大将を務めさせていただきましたわ！」

「ええ！？馬鉄！？」

おお、過剰すぎませんかイケメン君。

とりあえず後で会いに行くからさ。

「じゃあ、いこうぜ翠」

「え？いいのか？」

「何が？」

「こんな状況だって。ほらあの男、お前のこと捜してるぞ」

「・・・大方、美少女だと思ってるんじゃないね。ほらほら先鋒なんだから帰るよ」

「あ、ああ」

先鋒。

翠が大好きなことだね、うん。

まあ、構わないさ。

大変らしいけど。

すでに手はうつてあるぞ。

武が全くない分、智には頑張ったんだ。

さっさと終わらせようかね。

五戦目「問題児は連合軍を見る」（後書き）

玉：

やあ皆。馬鉄だ。

最近暑いよねえ。まあ西涼は寒いくらいなんだけどさあ。

…え？あ、うん連合のことね。

やっぱり手柄は取るさ！

俺弱いから何にもしないけど、手ぐらい打つさ。

さて、種馬だとかそんなのがいるが、俺の嫁には手は出させないかな。俺が生きている限り！

覚えていろよ！御遣いよ！

…ま、次回会いに行くけどさ
次回も楽しみにしてくれ。

六戦目「問題児は劉備軍を見る」(前書き)

久々。

ストックは残り…片手で数えるまでもない…。

ちなみに、話の都合上北郷君の意外さはあまりないです(笑)
嫁はやらん！

六戦目「問題児は劉備軍を見る」

こんちわー鉄です。

今は翡玉と劉備軍陣営に向かつております。

「・・・どんな方なんでしょうか」

「ある意味麻薬中毒者」

「・・・酷いですね、それ」

ある意味間違つてないよ？

宗教的な考えじゃん「みんなが笑顔で暮らせる世界」だって。

どこの新世界だよ。

あ、これも名士の伝とか風評から考えましたが。

まあ、理想とか目標のない人間は生きる意味がないんですから、立派な志ですね。

「なにものだ貴様！」

・・・おお、歩いていたら黒髪の人に怒鳴られました。翡玉にそっくりですね。

「貴様こそ客人に対してその態度はなんだあ！」

・・・おお、黒髪対決。

「客人だと？そんな報告など入っていないぞ！」

「すれ違いになったという考え方はないのか！」

え、ちょ、物騒なもの出さないでくださいよ。

こ、こら碧玉も。

「まあまあ落ち着いて落ち着いて。申し訳ありません。自分は馬鉄と申します」

「む、貴様が袁紹を推薦したという」

「ええ、そうです。・・・で、こちらが護衛の？徳です」

「・・・まあいい、我が名は関羽だ」

「おお、あの【美髪公】関羽ですか！」

「ま、まあな」

その異名を言われて照れているのか、頬をポリポリとかく関羽さん。

でもまあ・・・

「碧玉の髪の方が綺麗ですね」

「なっ――」

「ぎよ、玉様！何を仰るのですか！」

率直な感想ですが、何か？

「ま、まあいい・・・で、なんのようだ」

顔が赤いのは怒りなんだろうね。でも、本当のことを言ったただけだから。

「御使い殿とお会いしたい」

「・・・貴様のような下郎にご主人様を会わせるつもりなどない！」

「貴様あ！先ほどから聞いていれば無礼な！劉備軍は無礼な集まりなのですか！」

「なんだと！？我らを侮辱するのか！」

「本当のことを言ったまでだ！先ほどから身をわきまえろ！馬鉄さまは【西涼賢人】の異名を持つ方だ！貴様らのような猪がお会いできるような方ではない！」

「はっ！武も扱えぬような者がどうした！我らには関係ない！」

・・・嗚呼

やばいやばい。

？徳と関羽という関係からすごくヒートアップしてる気が・・・。

激しい口喧嘩ですね。

周りの兵の方々も怯えてますよ？

「愛紗よ、なにを騒いでいる。客人が見当たらないと探せばなぜお主が騒いでいるのだ」

おお、クール系のお姉さんが来た。

やっと収縮しそうだな。

「星か、なに、こやつらがご主人様いお会いしたいと身を弁えよう
としない奴だったためにな」

「・・・愛紗よ。客人にそれはないだろう。主も確かに【天の御使
い】と名乗っているが、実質的な身分は低いんだ。身を弁えるのは
我らだ」

「だ、だがな星・・・」

「愛紗、一度頭を冷やせ。・・・さて、見苦しいところをお見せし
て申し訳ない」

「いやいや、貴女のような方が着てくれてよかったです」

「おっと、名乗っていませんでしたな我が名は趙雲と申します」

おお、あの常山の。

「馬鉄と申します。こちらが？徳」

「初めまして？令命と申します。常山の趙子龍。お会いできて光栄です」

「ほう、私も有名になったものだな。あとでお相手願いたいのだが？」

「申し訳ありませんが、先鋒を務めさせていただくので」

「では、またの機会に……。さて、我が主と劉備様の元へお連れしよう」

とつつかみにく人だが、まあ話しが分かるようでよかった。

しかも美人だし。

ちょ、碧玉？なんでそんな俺を殺そうとする目で見えるの！？

俺は君のことを愛しているう！

さてさて、天幕につれてこられました。

関羽の視線が怖かったね。

下手すると殺されそうだなあ。

まずは形式的に

「本日はお会いできて光栄でございます」

「あ、そんなかしこまらなくていいですよ!」

おお、彼女が劉備。

なんというか天然にしか見えないなあ。

翠は違うアホの子だな。

「まあ・・・形式的に・・・さて自分は馬鉄と申します」

「あの馬鉄だつて!!?」

・・・なんでそんなに驚くのですかねえ?

「・・・ああ、御使いさんですね。どうせ美少女だと思ってたんでしょ」

「いや、えと・・・まあ・・・うん・・・」

凶星だったな。

「あれ？というかなんで分かるの？」とか聞いていたけどスルー。

「で、今日は何の御用ですか？」

「あー、えと、まあはい。本当は劉備軍の方々にお会いしたいというのがあります。御使い様がどんな方か見てみたいというのもありましたね」

「それで、どうでしたか？」

「そうですね、劉備さんの目指す平和も志としては立派ですからね」

あくまで”志としては”ね。

「いやいや、信用に値します」

「それはよかったです」

「あと、御使いさんに一言申し上げておきたいのですが・・・」

「俺にですか？」

「ええ、御使いさんは男性から見てもイケメンと思いますからね。」

言っておきたいことがあります」

「え？今、イケメンって・・・」

「あ、ちょっとこれは大事なことで、口調砕きますね」

ゲフンゲフン

「絶対に俺の嫁の馬超と馬岱と馬騰さんと？徳は貴様のような優男に！」

俺はハーレムを作る！みたいな奴に
ぜつつつつつつつつつたいにやらねえあああああ
あああああああ！！！！！！」

『ええー！？』

ふう・・・周りの皆さんがあきれてますが、構いませんよ。

おお、碧玉の顔が真っ赤だ。可愛い。

「御使い殿は気が多いことは知っている！だが、俺の嫁は絶対にやらん！」

「確かに主ならやりかねませんからなあ」

「せ、星！」

「ご主人様、どういことですか？」

「あ、愛紗！誤解だ！」

「あれー？ご主人様、どういことかなー？」

「桃香！？なんで靖王伝家抜いてるの！？」

おお、さすが御使い殿。臣下にご主人様と呼ばせるとはとんだ趣味ですねえ・・・」

「俺の趣味じゃないからね！そこは勘違いしないで！？」

まあ、どうでもいいんだけど。

「どうでもいいの！？」

「さて、こちらで【伏龍鳳雛】の二人がいると聞いたのですが・・・」

「はわわ」

「あわわ」

はわわ？あわわ？

聞いたことがあるぞ？

「おお、いたのか」

「はわ！ずっと居ましたよ！？ご主人様の隣にいましたよ！？」

「・・・ごめん。背・・・ゲフンゲフン、気が付きませんでした」

「あわわ・・・相変わらずです馬鉄さん」

「雛里と朱里はこのお兄ちゃんにあったことあるのかー？」

「はい、前に洛陽の本屋さんに雛里ちゃんが行った時に・・・」

「あの時に本とってもらうの手伝ってもらったんだよね・・・あわわ」

「そうだね・・・」

「そうそう、あの時の二人が取ろうとしてた本。なんだっけな・・・やあ「はわわ！」「あわわ！」」

「そ、その後に【西涼賢人】として名高い馬鉄ということを知って」

「天下を論じたり、兵法などを語り合ったりしました・・・」

「へー、馬鉄さんってすごいんだね」

「あれ？馬鉄さんちよつといいですか？」

「なんですか？」

「馬超の弟さんなんですか？それに武よりも智って・・・」

「あ、違うんです。自分は養子みたいなものです。馬休はいませんしね。あと武はダメダメだったんで軍師を目指しました」

「あれ？なんでそれ知ってるの？」とか言ってるけどスルー。

「あ、そういえば馬鉄さん先鋒だつて聞いたのですが、どうするのですか？」

「どうするって？」

「あわわ、馬鉄さんも分かつてるはずですよ。騎兵は攻城戦に向いていません。なので騎兵一万五千しかない状況では勝機はありますか？」

「ああ、大丈夫。もう手柄は取れるように手は打った。あ、そうだと劉備軍にも手柄を取れるようにしましょうか？」

「え？そんなことできるんですか？」

「ええ、敵将華雄さんを差し上げますよ。この軍の武将なら討ち取ることも造作はないはず」

「ああ、我らの武は華雄ごときには負けない」

「では、手を結びましょう」

「はわわ。こちらとしても嬉しいのですけど、大丈夫なですか？」

「何が？」

「あくまでも馬鉄さんは马超さんの配下なんです。軍師といえど勝手にそんなことをしてはいけないと思いますが・・・」

「大丈夫です。すでに伝えておきましたから」

「最初から同盟を組むつもりだったんですか？」

「まあ、表向きは」

「ほう、では裏は？」

「御使い殿に天の衣装を教えていただきたくて」

『え？』

だってゴスロリとかメイド服とか知ってるはずだもん！

着せたい！西涼娘に着せたい！

「ま、まあ俺は構いませんけど・・・」

「それじゃあ諸葛亮と？統と話し合ってからお会いしましょう」

「はい、待ってます」

その後、無事話し合いは進んで、馬超軍と劉備軍、あとなぜか公孫
？軍が共同戦線を組むことに。

さてさて、お楽しみの天の衣装だ・・・。

一刻ほど語り合いました。

「一刀！」

「玉！」

「俺達は同士だ！」

友情が生まれました。

六戦目「問題児は劉備軍を見る」（後書き）

碧玉：

皆様、碧玉でございます。

今回はやけに玉様が注目している勢力の劉備軍を拝見しました。

…少々玉様の理解に困ります。

それに天の御遣いと名乗る男に視線に嫌悪感を感じます。…正直、玉様と似ている感じがしますが玉様の方がマシです。

さて、次は先鋒を務めることになりました姫こと馬超軍と劉備軍、公孫……将軍が関に攻撃します。

玉様は既に手を打つてあるとおっしゃいますが、どういふことでしょうか。…何か嫌な予感がします。

次回もまた、よろしく願います。

七戦目「問題児は実力を出す」(前書き)

あっという間に戦が終わる…。

下手なだけ？

いいえ、策で終わらせるのです。

七戦目「問題児は実力を出す」

ちやおつす。鉄です。

ということやって来ました？水関！

いやあ、でっかいねえ。

【華】と【張】かあ。

怖いなあ。

「ん？玉震ぎみくえてるのか？」

「違うでい！あっしの震えは武者震いですぜえ！」

「・・・なんだその喋り方」

ちなみに陣は張ってある。

・・・といっても前に西涼兵、後ろに劉備軍、その後に公孫？軍なだけなのだが。

まあ、手は打ってある。

今、関羽さんが挑発してる。

うわー武人ならきれるよなこれ。

「もし似たようなこと言われたらどうする？」

「ぶっ飛ばす」

うん、翠らしいなあ。

まだ、出てこないのかあ。

・・・まあ、”まだ”出てほしくないんだけどなあ。

「・・・出てこないなあ」

「まあ張遼が頑張ってるんじゃない？」

「そうかもしれないけど、大丈夫なのか？」

「もち、絶対に華雄を引きずり出す策があるから」

「・・・最初からそれ教えるよ」

「ダメだよ」

「なんでだ？」

「この策やるのに翠と翡玉がいないとダメなんだ」

「わ、私ですか」

「あたし？蒲公英は・・・って、あれ？そういえば蒲公英は？」

「すでに策を実行中」

「・・・っーか、蒲公英だけで大丈夫なのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分」

「今の間はなに！？しかも多分ってかなり不安だぞ！？」

「まあまあ、成公英を副将にしてるから」

「あー・・・って納得できねえよ！？」

「なんで？」

「だってあいつ、玉と似たような感じじゃん！」

「失礼な！俺は軍師だぞ！あの子は俺には忠実だから！」

「・・・・・・・・まあいいけどさ」

成公英。

彼女は実は【西涼娘連合】幹部の一人なのだ。

史実では韓遂の部下なんだけどね、俺の部下になってる。

あ、もちろん女の子だよ？

「出てこないなー」

「そだねー」

「出てきませんねー」

関羽さん怒鳴りすぎて疲れてるみたいだけど・・・。

・・・まあ、あんなだけ怒鳴ってればねえ。

これは策なのかな？・・・まあいいや。

「さて、翠、翡玉、行くぞ」

「え？」

「ど、どういことですか？」

二人を引っ張って関羽さんのところまで。

「む？お主ら・・・なぜここに？」

「華雄を引きずり出そうと思って」

「出来るのか？」

「ええ、一発で」

ささと、俺は促す。

俺を中心に右に翠、左に翡玉を設置。

二人とも抱き締めることができるぐらいね。

「なに考えてるんだ？」

「まあまあ、大丈夫だ」

「・・・すごい嫌な予感がします」

さて！時は満ちた！

俺は思いつきり息を吸って

「華雄の~~~~~!!!!!!」

ひんにゅ~~~~~!!!!!!」

「うひゃあ!!」

「きゃあ!!」

もにゅもにゅ

・・・おお、神よ。

胸ってこんなに素晴らしいものだとは。

もにゅもにゅもにゅもみもみもみもにゅもにゅ

「な・・・はう・・・なにすんだ・・・あう・・・」

「ぎよ、玉様あ・・・あ・・・お戯れが過ぎます・・・！」

なんだかんだで抵抗しない彼女達が可愛くて仕方ない。

お、関羽さんなんて、何が起こったのか分からないような顔してるし。

さて・・・

「翠、あとは関羽さんに任せよ」

「はあはあはあ・・・え？」

「どういう・・・ことですか？」

顔が真っ赤な二人を引っ張るようにして後ろに下がる。

「ほらほら、翠も翡玉も、戦が始まるんだから」

「あ、ああ……」

「は、はい……」

突然、関が騒がしくなったと思うと、城壁が開いた。

「私の胸を侮辱した奴はどこに居る……!!」

「ここにいるぞー!!……は!」

つい癖で言ってしまった!

蒲公英の癖が移ってしまった!

……僕は知りません。言ってもないし、聞いてもいませんし、何
も知りません。

「貴様かあゝ! その弱そうな男〜!」

……まあ、弱いことは間違っていないので無視。

というか、怒りで顔が真っ赤です。般若です。こええ。

とりあえず関羽さんが戦ってくれてますので、待ちましょう。

「翠!」

「あ、ああ! 行くぞ! みんな!」

『おおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』

まだ顔赤いなあ。

「馬超隊！？徳隊！展開！！」

ちなみに俺は翠についていく。

はどめが効かなくなるからな。

西涼軍が展開したことにより、後ろの歩兵中心の劉備軍が当たり、公孫？軍が西涼兵と同じように展開する。

よし、これで包囲網は敷けた。

張遼も虎牢関まで下がってくれてると思う。

順調じゅんちよ

「しねえ！」

「うわっ！」

掠った！前髪数本散った！

・・・まあ、後は関羽さんが倒しますよ。

さてさて、頃合いだなあ。

蒲公英くそろそろ着いているころだから名乗っちゃえ！

？水関の【華】の旗が突然、降ろされた。

代わりに掲げられたのは……【馬】の字。

『なっ！』

敵味方問わず驚いた。

「西涼の錦馬超が従妹馬岱！！？水関を制圧したりく」

？水関から元気よく名乗りあげるのは蒲公英。

ふふ・・・策は成った！

そう！連合に参加する途中に工歩兵五千を蒲公英に預けて、洛陽に南にある「宛」というところを経由して、南から虎牢関と？水関の間にある道から来させたのだ！

あとでいっぱい褒美あげないとなあ。

本来は碧玉に任せるべきなんだけど・・・まあ、さっきのを察して♪

役得♪役得♪

ちようどよかったね。もし張遼と出会っていたらどうなっているかわからないもん。

そしてま、完全に逃げ道を失った華雄隊の士気はガタ落ち。

華雄自身もガタ落ち。

関羽さんが捕縛し、華雄隊は降伏。？水関の戦いは終わった。

関の開城に馬超軍が、華雄捕縛が劉備軍、華雄隊降伏が公孫？軍という手柄を手に入れた。

それよりも俺はあの役得が一番だったけど♪

side 曹操

「へえ…やるわねえ…」

私は面白い物を見せてもらった。

あの策、分からない人には分からないでしょうけど、分かる人から見れば、ほう、という言葉が出てしまう。

彼は見通していたのだ。

先鋒になることも、華雄が飛び出すことも。

「…認めたくありませんが西の出身の名士では最も優秀かと」

「あら、桂花貴女、彼と話したことがあるのかしら？」

「はい、前に名士の伝で気になったものですから、仕方なく招いたことがあります」

「どうかしら？」

「…周りの名士は儒教の觀念に捕われすぎて羌族との混血の馬鉄の評価は最低ですが、天下や兵法を論ずらせれば私も興味を惹かれます」

「へえ…男嫌いな貴女がここまで言わせるなんてね…」

「内政を任せればしょうか簫何、謀略をさせれば張良、戦術をやらせれば韓信かと」

「我が子房（張良の字）と呼ばせた桂花よりも優秀…ねえ…」

「…悔しいですが、あの実力も羌族の混血だったという周りの取り巻きからでしょう」

「なら、ますます欲しいわ」

「私も賛成です。…女だったら良かったのに」

それには私も賛成よ。…可愛ければね。

「馬超も欲しいわ…」

馬騰陣営丸ごと欲しいわ、ほんと、羨ましいわよ。西涼は。

彼女達がいれば私の騎兵も覇道の礎になるほど強力になるはずね…。

「桂花」

「はっ」

「虎牢関に到着次第、馬超陣営に向かうわ」

「御意！」

…さて、馬鉄。私が気に入るか試させていただくわ。

side out

『びくう！！』

「ハ、ハハ。玉、どうした？」

「な、なんのことだ翠？ひ、碧玉はどうしたの？」

「わ、私も知りませんよ？」

（（…今、何か嫌な予感がした））

こええー…。

何だったんだ今の。

さてさて、次は虎牢関なんだよな。

華雄將軍は劉備軍の捕虜になったそうだ。

まあ、俺からして見ればどうでもいいんだけど。

そして俺は…

「〜」

蒲公英を前に乗馬してます〜。

ご褒美聞いたら、こうなった。

うん、まあ、こっちも役得だ。

…翠と碧玉の視線が痛かった。

まあ、嫉妬と思えば可愛いもんよ。

とりあえず今は…

「可愛いなー！蒲公英はー！」

「いゃん♪お兄様ったら♪」

むふふー。

蒲公英成分補給中。

うーん30%しか溜まってないから、まだ少し。

結局、陣営を張って天幕をはるまで蒲公英をお姫様抱っこで運んだ。

だけども……

「腰痛い・・・」

「無理するからですよ」

うつ伏せになってまゝす。

うん、体力のない俺がいくら軽くても人一人をお姫様抱っこを続け
ていれば痛めるさ！

碧玉に腰をマツサージしてもらってまゐす。

・ ・ ・ おお！ 碧玉の柔らかい尻が俺の脚に ・ ・ ・

[illegible]

「……邪なことを考えるからです」

とか言いながらも

「いだだだだだだ！ちよ！やめ！痛いって！まじ痛い！勘弁！」

「・・・・・・・・」

無言！？

せやったら・・・

「えい！」

「きゃっ！？」

不意に思いつきり体を捻って、碧玉を押し倒す形にする。

え？腰はどうしたって？ふふふ・・・変態に不可能はないさのさ。

「・・・ぎよ、玉様、何を・・・」

「何って、何だと思う？」

だんだん瞳が潤んできて・・・おお！なんという扇情的な感じに！

「や、優しくしてください・・・」

「馬鉄様！もうしあげ・・・」

時間が止まった。

「・・・失礼しました。ではごゆ・・・」

「ままままま待ってください！・・・！ご、誤解です！」

「ご、誤解ですか？」

「ええ！そうなんです！そうなんですよ！」

必死に弁解する碧玉。・・・ああ、慌てる碧玉も可愛いなあ。

「では、なぜあんなことに・・・」

「そ、それはですね！えーと・・・」

「・・・ごゆつくり・・・」

「待ってくださいーい！！」

・・・あの兵士絶対笑い堪えてる。

口端がピクピクしてるもん。

「まあちよつと戯れてただけさ。何のよう？」

「あ、はい。曹操という者が来たので馬超様から呼ぶように言われました」

「あ、そうか。んじゃ行こう」

顔を真っ赤にしている碧玉を引つ張るように連れて行く。

兵士の「・・・馬超様には報告しておきます」という声が聞こえた気もするけど、聞かなかったことにする。

・・・それにしても曹操かあ。会いたくないなあ。

俺の予感はやっぱり当たってしまふのであった。

「わ「お断りします」・・・まだ何にも言っていないんだけど」

この金髪幼Ｚ「何かしら？」・・・ゲフンゲフン。

孟徳殿は少々お戯れが過ぎる。

早速と言わんばかりに翠と翡玉に手を出そうとしやがった！

「俺の嫁に手を出すのは許さん！」

「あ、ならこうしましょう。”馬超軍全員”私に仕えない？」

「いやぁー、あたしはあくまでも母上の名代だし……」

「翠……」

そこは、はっきり断りなさいよ。

「まあ、いいわ……で馬鉄」

「あい？」

「本当に私に仕える気はないのね？」

…その話になると翠や碧玉がなんか不安そうな顔をするからやめて欲しいんだよなあ…。

「孟徳殿、それがし某は馬騰様に、その娘の馬超殿に仕えている。そのような勧誘は些か失礼ではありませぬか？」

「貴様…華琳様の誘いを二度も断つたな！」

「え、ちょ」

「春蘭っ！」

孟徳殿の金切り声のような声が聞こえてきたと同時に振り下ろされる剣。

武人の中でも強力な将の彼女から出される一振りは、武に全く心得のない俺には見極められるはずなかった。

「玉ーっ！」「玉様あ！」「お兄様ー！」

元讓殿は将としては素晴らしいのだが、少々…ではなく、非常に孟徳殿に依存し過ぎる。孟徳殿も手綱を握るのに苦労しているだろうなあ。

彼女の剣は俺の貧相な体を易々と切り裂いた。

七戦目「問題児は実力を出す」（後書き）

蒲公英：

みんな大好き蒲公英だよー♪

お兄様が斬られちゃったよ！でも、なぜかいつも斬られちゃうんだよねえ。なんでだろ？それで元気だからお兄様ってすごいよねー。

そんな感じで今回は蒲公英が活躍したよ♪寂しかったんだよ？回り道してーって言われたんだもん。それにお姉様も碧玉ちゃんもずるいー！蒲公英もお兄様に触ってもらいたかったー！

次はお兄様がゴロゴロするらしいよー。次もよろしくね♪

八戦目「問題児は休む」(前書き)

悩んでいます。

詳しいことは後書きで。

八戦目「問題児は休む」

side馬超

…あたしだ。

玉が夏侯惇に斬られるということがあった。

あたしも翡玉も槍を振るおうとしたけど玉は「手を出すな」と言う。

曹操も本当に申し訳なさそうだった。夏侯惇も半分涙目だった。

なぜ、あのまま斬ったのかと聞くと「身の構え方が武人だった」からだという。あとは勢いをつけすぎて止まらなかったらしいけど…。

幸い命には別状はないらしい。本当によかった…。

曹操は後にお詫びとして金や資源などをくれるらしい。玉はいらないって言ったけどさ。

そして今、あたしは曹操自身が作ったという酒を持って玉の天幕に向かっている。

「玉…大丈夫かな」

蒲公英の奴がどこに行ったかは知らないけど翡玉は今は兵の陣営を張るために指示を出している。

やがて玉の天幕の前に着くと…

な、なんか声がする。

『んっ…ちゅ…ちゅぱ…』

『おお…』

『くちゅ…ぴちゃ…どうお兄様…？』

『すごく…いいよ…』

『ん…ちゅ…くちゅ…えへへ♪じゃあ…もっと…』

『やばい…この纏わり付く感覚が…』

『ぴちゅ…ちゅく…んっ…ちゅ…』

「な、な、な、な、な…」

こ、この水みたいな音って…？

ま、ま、ま、ま、ま、まさか…？

ち、違うよな？

って何が違うんだ？

ち、ち、ち、ち、違うよな！？

「お前ら何やってんだー！？」

s i d e o u t

ヤッホー斬られた傷が痛いけど仕事はしっかりやってる鉄だよー。

…びっくりしたよー。

いきなり翠が顔を真っ赤にして叫んできたんだもん。

え？何があつたんだって？

いやぁー、それがさー。

書簡とか報告書を纏めていたら指切っちゃってさー。

そしたら偶然いた蒲公英が「私が舐めてあげる♪」とか言って、血が出てきた俺の指を舐め始めたんだよ。

…なんというか…エロかった…。

そんな感じで説明したら翠は

「
〒
¢
↑
∂%\$!~!」

翠語を叫びながら顔を真っ赤にして、どっか走って行ったよ。

ちなみに翠語は俺も解読できない。

ああ…そんな翠も可愛いなあ…。

きつとエロエロな事だと思ってたんだな♪

可愛い奴め♪

女の子はちょっとエッチな方が可愛いぞ♪

ふふん」

さてさて・・・次のこと考えないとなあ。

「虎牢関戦は明日だしなあ。本初（袁紹の字）あたりが攻めるかな？」

公孫將軍も玄德も手柄を手に入れたしな。

・・・おお、やっぱり真名を知らない人物は字とか將軍つけた方がしつくり来るなあ。

蒼。航路は俺も好きっすw

まあいいや」

後ろからの奇襲だと時間がかかると思うからないな」

いっそ、もう考えるのやめようかな？

出番、無さそうだし。

碧玉といちゃいちゃしてようかな？

どうせ、孟徳殿と伯府殿あたりが制圧したり手柄をあげるだろうし。

というか陶謙じいさんは大丈夫なのか？

そのほかの諸侯もやる気なさそうだし。

どっかの諸侯なんて、別の場所から攻めようとしたら高順にやられたーとか、徐栄にやられたーとか報告があつたな。

ざまあww

まあ、とりあえず注意とか警戒しておくべきの諸侯はそんな「ざまあww」なんてことはしてないからね。

「盟主」

「ん？成公英か、どうした？」

この声は成公英か。いろんなことをやってくれるから意外と頼りになる・・・時もある。

天幕の外から声が聞こえてくる。

「曹操殿がお目通り願いたいと」

「孟徳殿が？失礼かもしれないが、このままの格好で良ければ入ってきてくれ」

ちよちよいと身だしなみを整えると、さっきぶりの孟徳殿がいらっしやった。

元議殿もいるなあ。

「孟徳殿、このような格好で失礼します」

「いえ、そんなことは気にしないわ。それよりも、さっきの件だけ

ど本当に申し訳なかったわ」

「すまない」

頭を下げてくる二人。・・・気にしてないんだけどなあ。

「お二人とも顔をお上げください。気にしてませんから」

「本来なら夏侯惇を斬首・・・そのぐらいの罪を償わせなければいけないんだけど・・・」

「ああ、そこまでやらなくていいですよ。彼女は貴女の部下であり、家族でもあるのですから。この件は内密に水に流しましょう」

「・・・そう言ってもらえるなら本当に嬉しいわ。代わりと受け取って欲しいんだけど・・・金や資源を」

「ありがたく頂戴します」

たくさんあっても困らないしね。

「兵糧はさすがに勘弁してくれないかしら？」

「ええ、もちろん」

まあ、さすがに民の生活に関係してくる食料を貰うわけにはいかないしねえ。

それに・・・斬られただけで得たものもあるし。

「それじゃあ最後に、本当に申し訳ない。夏侯惇の主君としてこの曹孟徳。お詫び申し上げます」

「この馬鉄。その謝罪お受けしました。顔をお上げください」

「・・・それじゃあ後で資源などは手配するわ」

「ありがとうございます」

「あと最後に」

「ん？」

「私に、仕える気はないかしら？」

「は・・・さすがに苦笑しますね・・・」

「魅力的なお話ですが、自分にはすでに忠誠を誓った主君がいるので」

孟徳殿はフツツと微笑んで

「また会いましょう馬鉄」

「ええ、また会いましょう」

本当は会いたくない。

さてさて、天幕で寝ているにも暇なので散歩しようと。

傷はどうしたって？

痛いんだよチクショー！

でも、ま、気分転換だな。

「あ、玉！」

「お、一刀！どうしたんだ？」

「お前が頼んできた馬超のゴスロリ服の設計図が出来上がったんだ！」

「おお！こんな周りが殺伐として糞忙しい時にそんなことを気にせずにする一刀に痺れる憧れるう！」

「…なんか、全く褒められた感じがしないんだけど…」

気のせい気のせい。

「…まあ、いいや。これを呉服店に見せれば見繕ってくれるはずだ」
おお！とうとう翠に着せられる服が！

「ふむ…これは絹を買つとかないとな…俺の小遣いから出すか…。
まあいいや、ありがとう！」

「何言つてんだ水臭いなあ。俺達親友であり…」

「…同士だ！」

「よし、ならこっちは知り合いの商人にゴスロリとかメイドとかの
素材になる絹を俺と一刀には安くできるようにお願いしてみる」

「ああ、ありがとう助かる」

「じゃ、また新作待ってるぜ！メイド服とゴスロリの設計図をありが
とう！」

「ああ！任せる！」

一刀君さすが。

暑苦しいかもしれないけど、いい奴だよ？

さてさて、武威に帰ったら早速呉服店に見繕ってもらおうと」

むふふ…楽しみだなあ。

「次…どうしようかなあ…」

一刀君と別れて暇。

連合軍の陣営は広さだけは無駄に広いからなあ。

どっかの総大将とは反対だなあ。

とりあえずどこに行こうか？

1：曹操

2：劉備

3：孫策

4：その他

5：天幕に帰って寝る。

ん…五番目の案が魅力的ですね。

…あれ？今、何か電波を受信したよ？

まあいいや。

孟徳殿のところに言って何すればいいんだよ。荀家の人物とは、あまり会いたくないしなあ。

玄徳のところ行ってもしょうがないし、孫策殿は面識がないし、やべえ、やることねえ。

「・・・とりあえず次の策でも練るか」

結局は帰って寝ることにした。

こんばんは、夜だよ。

さっきまで寝てました。兵達は炊き出しをやっています。

・・・翠があまりにも食うので一日分か半日分に。

さらに翼徳ちゃんもなぜか参戦、一日分が一食分になってしまいました。

玄徳んところは兵糧がないからなあ。

馬達はみな、草をもつさもつさと食べております。

さて、次の行動だ。

さっき天文を見たところ夜襲の兆候があるから、教えないとなあ。

玄徳のところは孔明がいるから大丈夫だろう。彼女天文俺よりも理解してるし。ずるいね、天才って。

陣営も連合軍のはじっこにさせていただし、兵糧も安全なところに移動させた。

・・・さあ、かかってこい。

来るのは張遼と高順あたりだろう。虎牢関からは呂布が出るはずだ。

・・・会いたくないなあ。誰か一人とあつたら斬られかねない。

碧玉あたりに俺の護衛を頼むことにしよう。

八戦目「問題児は休む」（後書き）

反董卓連合の後、どうしようかな。
群雄割拠の時代ですからね…

一、曹操に攻められ、馬鉄が…
完結が早くなりますね。

二、曹操に攻められ、蜀に落ち延びる。
一刀との絡みが期待できますねえ。

三、曹操を降し、華北を統一。
…これも、なんだかんだで完結早そうですね。あ、でも蜀呉と戦
わせるのもありですね。

四、曹操を撃退し、西涼国を興す。
うーん、似た作品があった気がするんで怖いですねえ。

五、いっそ全部やっちゃえ。
無理っす。

…正直、現時点の西涼軍は将が少ないですからねえ。
…西涼だから董卓軍吸収するの忘れてました。今更じゃ、遅いです
ね。

選択、お願いします。
では次回もよろしくお願いします。

休話「錦馬超は病む」(前書き)

注意警報！

翠好きは注意してください！

危険です！危険です！

翠が恐ろしいことになってます！

翠ちゃんが・・・なんてならない内に引き返してください！

休話「錦馬超は病む」

side馬超

姓を馬、名を超。字は孟起。

いきなりだが、あたしには好きな人がいる。

「玉^{ぎよく}・・・」

もう何回目なのだろうか。

数えることすら面倒になるほど愛しい人の名を呼ぶ。

変態でエロエロ魔王だけど、やっぱりあたしはあいつが好きなんだ。

あいつもあたしのことを【好き】と言ってくれている。

だけど、それは母上や蒲公英、翡玉にも【同じ】ことを言っているんだ。

なんでだ？

あたしは所詮、その程度なのだろうか？

小さいころからあいつはあたしのことを【好き】と言ってきてくれている。

なのに、なんで？

なんで？

どうして？

なぜ？

あたしだけじゃないのか？

あたしだけに【好き】と言ってくれるんじゃないの？

本当にあたしのことが大好きなのか？

玉がどう思うと、あたしはあいつが好きだ。

好きだ。

大好きだ。

愛している。

なのに、なぜ？

なぜ玉はあたしに言う言葉が他と同じなの？

「ひ、姫？どうなされたのですか？」

「碧玉か。今、空いてる？」

「え、あ、はい。ちょうど政務が終わりましたが・・・」

ずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　と
ずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　と
ずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　と
ずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　とずっ　と

そっだ、いい方法があるじゃないか。

玉をずつとあたしの物に出来る方法が。

s i d e o u t

「・・・・・・・・」

やあ、俺だ。馬鉄だ。

え？なんでこんなにテンションが低いかって？

いやー・・・なんというか・・・。

最近の翠の様子がおかしいんだよねえ。

何か最近一人でブツブツ言ってるらしいし・・・。

ストレスが溜まってきてるのか？

・・・いや、彼女のことだ。ストレスなんてないだろう。

時々、鍛錬してるって聞くし。

ストレス発散はしているようだ。

じゃあ、何があったんだ？

俺の服も消えて行くし・・・最近はなんなんだ？厄日か？

「お兄様いる？」

「おお、蒲公英どうした」

「政務が終わったからお兄様といちゃいちゃしに来たの」

「おお！そうかそうか、ほらおいで」

膝の上に蒲公英を呼び寄せて、蒲公英成分補給。

いい匂いだなあ。

癒されるなあ。

「そついえばお兄様」

「ん？」

「最近お姉様の様子がおかしいってこと知ってる？」

「ああ、なんか翠の様子がおかしいらしいなあ」

「そうなんだよ、なんか一人でブツブツ言ったり目が尋常じゃないくらい怖かったり・・・」

「病気かな？」

「うーん、どうだろ。お医者さんに見せたら普通だって言ってたし・・・」

「本当にどうしたんだ？」

その時、扉がキィと音を立てて開けられる。

現れたのは話の話題になっていた翠だった。

「す、翠か。どうしたんだ？」

「蒲公英」

「な、なに？」

俺の声を無視して翠が蒲公英を呼ぶ。

今の翠は……すごい怖い。

腰が抜けそうな……そんな雰囲気をしていた。

「玉を借りるぞ」

「え、え、いいよ？」

「よし」

「ちょ、ま」

翠は俺の袖を掴み、引きずるように連れて行く。

思えばここで抵抗しておけば、あんなことにならなかったと思う……

「ここだ」

「ここって・・・翠の部屋？」

俺が連れてこられたのは翠の部屋だった。

入ると殴られるので入ったことは無い。というかプライベートは大
事だしねえ。

翠は俺を部屋の中に招き寄せる。

（こ、これはフラグかつ！？）

まさか翠がこんな大胆なことにでるなんて！

翠とむふふなことやあはーんなことやうふーんなことが出来るとは！

そんな楽観的な考えは翠の部屋に入ったことでまるで呂布が弱兵達
に突撃するように全て崩壊した。

「な、なんなんだよこれ・・・」

俺は目を疑ってしまった。

翠の部屋を覆い尽くしていたのは

消えたはずの俺の服だった。

どうして？

なぜ翠の部屋の中に俺の消えたはずの服があるんだ？

「な、なあ翠これ――」

「玉はあたしのことをどう思ってるんだ？」

俺の声を遮るように翠は言った。

急に体の振るえが止まらなくなる。なんでだ？目の前にいるのは俺の大好きな翠のはず。

「そ、そりゃあ俺は……」

翠のことが大好き（……）だ」

これだけは変わらない。

俺は翠のことが大好きなんだ。

俺の言葉を聞いた翠は俺に抱きつく――
わ
けでもなく。

ドスッ

「え・・・？」

胸に突然走る激痛。

見れば心臓に七首（短剣のようなもの）が突き立てられていた。

誰が？

その手は翠だった。

「なあ玉、あたしは玉にとってその程度の女だったのか？」

「そんな・・・ことは・・・」

「母上にも蒲公英にも翡翠玉にも同じことばかり言う」

「それは・・・み・・・んな好きだ・・・から・・・」

「そうなのか、やっぱりあたしじゃないのか。あたしは誰よりもどんな人物よりも玉が好きだ。優しくしてくれる玉が大好きだ。あたしのことを【愛している】と言ってくれた時は幸せだった。策を練るために考える玉の姿も好きだった。時には厳しくしてくれる玉も好きだった。痛そうに倒れる玉も好きだった。あたしに構ってくれる玉が好きだった。たとえ、あたし以外の女が好きだとしてもあたしは一番だ。あたしは玉のもの。玉はあたしのもなんだ。どんなどんな玉も好きだ、一番好きだ！愛している！なのにどうして玉はあたしに言う言葉と同じことを他の女にも言うんだ！たとえ母上でも蒲公英でも！女ということは変わりない！なぜなんだ玉！？玉はあたしのもなんだろう？臣下なんだろう？じゃあ、なぜ【好き】という言葉であたし以外にも使っているんだ！玉はあたしのもなんだ！誰のものでもない！西涼のものでもない！あたしのもものなんだ！あたしのもものなんだから、あたしのことばかり見ていればよかったのに！なのに・・・なのに玉はあたし以外のことを見ていた！だけど・・・玉はこれで一生あたしの物になる」

もう声が出ない。

血を流しすぎたのだろう。

翠が俺のことをそう思ってくれていたのはうれしいけど・・・

だけど、ヤンデレはさすがに勘弁だったなあ・・・。

ごめん、蒲公英、翡翠さん、碧玉。

どうやら俺は一生翠の物みたいだ。

翠しか幸せに出来なくてごめん。

・・・もう駄目だ。意識が薄くなっているのが分かる。

!!
L

最期に、翠の歡喜の聲が聞こえた気がした。

休話「錦馬超は病む」(後書き)

まさかのヤンデレ。

ふと思ったので書いてみました。

最後、もはや翠じゃない・・・

九戦目「問題児は先を読む」（前書き）

ここでの高順は一応、ジャンプの方と同じ設定の沙耶ちゃんなんです。が・・・。

・・・うん、まあ別人にしか思えませんね。匠君と出会わなければこんな娘です。

話の都合上結構、空気ですが。

九戦目「問題児は先を読む」

こんばんは馬鉄です。

連合軍は寝ております。まあ、一部の勢力は夜襲の迎撃用意ですが。

なんというか、やはり目をつけていました勢力はしっかりと夜襲の対策をしてあるそうです。

はじっこに行ったり、予想される進撃の道に入らないように陣営を移動させたり、兵糧を安全なところに運んだり。

まあ、基本ですね。

劉備軍、曹操軍、孫策軍、そして馬超軍。

この四つだけが警戒をしている。

あ、陶謙の爺さんも、軍を安全なところに移動させるように言ってみた。

さすがにご老体に死なれたくない。それに一度世話になったことあるし。

他の勢力はぐーすか寝ていますよ。

愚か者とか小物はね。儒教の塊でしかない融通のきかない孔融もね。

あと、その他もろもろ。

無視無視。

．．．．．あ、あと公孫長史にも情報提供してたんだ。

彼女も迎撃用意してると思う。忘れてた。地味だから。

「はっくしゅん！」

「ど、どうしました？」

「い、いや今誰かが私のことを地味と言った気が．．．」

「は、はあ．．．（いつものことだと思っただけだなあ）」

「…………ぐう」

「寝るな！」

「おおっ！あまりにも翠の体臭が良い匂いなので眠ってしまいました」

「なななななななな何言ってるんだよ！！」

「翠顔真っ赤可愛い」

「か、可愛い言うな！」

「さて、本音は一度おいといて」

「本音だったのかよ！…………え？」

「さて、そろそろだな」

暇な時間を翠をいじって遊ぶ。

こうやって遠征に出ると風呂ってあまり入れないからなあ。せいぜい水で濡らした布で体を拭く程度だ。翠の甘い汗に匂いが俺のテションを上げてくれる。

…………え？この変態野郎がだって？

はっ！変態ですけど何か！？俺は紳士へんたいですけど？

まあ、とりあえず翠いじりは楽しいから。

みんなもやりたいでしょう？

「夜襲だーっ！」

どっかの兵士が分からんが、その言葉が響いた瞬間小刻みに聞こえてきていた馬の蹄の音が一気に大きくなる。

矢が飛ぶ音もするが、連合からなのか董卓軍のものは分からん。

少なくとも連合軍の後方は襲撃を受けたようだ。

「申し上げます！後方からは【張】と【高】の旗が！前方虎牢関からは【呂】【陳】【徐】が向かってきております！」

おお、徐栄も来たか。

「ご苦労、各部隊迎撃用意を伝えてくれ」

「はっ！」

「さて、後方からは張遼、高順。前方からは呂布と陳宮、徐栄か・
」

うは、董卓軍の主な武将揃ってるし。

さつきから前方で「りよ、呂布だー！」という叫び声みたいなのが
聞こえてくる。

時折、途切れて聞こえるのはやられたからであろう。

さてさて

「碧玉」

「ここに」

「俺の護衛を頼む」

「御意！」

「馬玩」

「お傍に！」

彼女も俺の部下であり、【西涼娘連合】幹部の一人。

主な執筆作品は百合系……だったりする。

まあ、愛読者だ。俺もね。

「孟起（馬超の字）に、呂布と戦っている劉備軍の援護を伝えてくれ、馬岱には迎撃を」

「はっ！」

すぐに馬の手綱を掴んで行く。やっぱり馬伝令兵は便利だ。

俺は後方の張遼にボコられている袁紹軍を救援に行くことにする。何事も風評は大事だからね。

s i d e 高順

私は高順という。

今は張遼と共に連合軍の陣営を遅い、名も覚えていないような諸侯を斬りながら中央に位置する無駄に派手な袁紹の陣営に向かっていく。

「高順！気分はどうや！」

「・・・あなたに着いていくだけでも疲れます。なぜ神速に着いて行かねばいけないのですか」

「にひひ」なんやかんやで燃えてるやん」

「・・・燃えているというか退屈です。相手になるような方がいないものですから」

「さすが【陥陣営】高順やな。何個潰した？」

「さあ？名も覚えていないぐらい地味な諸侯の潰した数なんて数えただって仕方ありません」

その時、不意に殺気を感じた方向に戟を向ける。

「名のある将と見受けた」

両手に戦斧を持っている黒髪の女性だ。華雄の猪の戦斧と違い、細身で戟の印象を受ける武器だ。

そして・・・彼女は強いだろう。

近くに弱そうな男がいたが、どうでもいい。

今はこの将を倒すだけだ。

「我が名は高順。お相手願いたい」

「ほう【陥陣営】と名高い高順殿か。我が名は？徳、字を令明。お相手つかまつろう」

馬に跨る太ももに力を込める。

ぶつかる私の戟と彼女の戦斧。彼女の使う二本の戦斧は遠心力を使った威力も兼ね備えながら、速い。手数が多いのだ。

「面白い！面白いぞ！？徳！」

「ふつ、久々に私めも楽しいですよ。姫以外の強者と戦うのはワクワクですね」

横薙ぎに戟を振るうが？徳は状態を後ろに反らして避ける。それと同時に片方の戦斧が私に振るいかかる。私は戟の柄でそれを捌きながら再び反撃に出る。攻撃する、避ける、反撃するの繰り返し。何合打ち合ったかは分からないが、【西涼の暴風】と名高い彼女だけあるか、馬上では彼女の方が優勢だろう。

「だが、私も武人である以上負けないぞ！」

s i d e o u t

s i d e 張遼

あちゃー高順の奴熱くなつとる。やっぱりあいつも武人やなあ。

せやったらウチは・・・

「もう一人の男やたる！」

「え、ちょ」

文官のようやけどウチは関係ない。戦場で立つのが悪いやからな。

「覚悟ーっ！」

偃月刀を振るおうとした時、ウチはすぐさま風を斬る方向に武器を向けた。

金属音が鳴り響く。・・・なんやこの力、腕が痺れてもった。

「ほう、まさか私の剣を止められるとはな」

おおー、黒髪でアホっぽい顔しとるなあ。

「あんた誰や？」

「ふっ、答えてやろう！私は夏侯惇！字を元讓！曹操様こと華琳様の大剣だ！」

ああ、あいつか。ウチもしつとる。剛勇無双と名高い惇將軍か。

「どうだ馬鉄！これで貸しは返したぞ！」

「あーうん、ども」

惇ちゃんか文官の男・・・馬鉄言っつか。あの。馬鉄に剣先を向けて高らかに言っていた。

なんか貸し作ってたんか。

馬鉄は苦笑しながら答えているんやけど。

「さて、張遼！認めたくないが華琳様の部下になれ！」

・・・何言つとるのこの子？

「あー悪いんやけどウチもう主君がいるんやけど」

「そうか、まあいい勝負だ！」

・・・結局勝負すんかい。

まあええや。ウチも戦ってみたし。

武人の血が騒ぐんや。

「おうよ！この神速の張遼を止められるか！」

「はっ！この私的となれ！」

s i d e o u t

…なんか、すっかり武人同士の戦いになっちゃったなあ。

あの子が高順に張遼か。

まあいいや。

とりあえず元讓殿に助けられているので部隊の指揮を取りますか。

騎兵を展開させて半包围で攻め込ませ、残党を騎馬弓兵で駆逐していく。

…さすがに相手も西涼兵だ。騎兵同士の實力は五分五分。だが異民族出身の騎馬弓兵は有効だった。

二人の将は気が付いていないが確実に兵士を減らしている。

強くない俺が戦場で唯一できる戦い方は？

そうだ、用兵だ。

兵を用いると書いてね。

さて、そろそろかな？

後方の迎撃に時間食ってるし、撃退できるはずだ。

s i d e 馬超

あたしは玉の指示に従って【劉】の旗が掲げられている軍に向かう。

その前方にあるのは【呂】と【関】【張】【趙】の旗。

凄まじい数の金属音が鳴ってるから戦ってるのか？

呂布って、すっげー強いて聞いているし戦ってみたいなあ。

「馬超ちゃん？」

「おう劉備殿に御使い殿。加勢に来た」

やっぱりこの二人は戦わないのか・・・。

まあ、どう見ても強そうじゃないしな。

「そ、それでは马超さんは前線に出て、呂布さんと戦っている愛紗さ・・・関羽さんと張飛ちゃんと趙雲さんの援軍をお願いします」

「ああ！分かった！行くぜ！」

『応っ！』

呂布はどういう奴だろうな？

戦ってみたいな！

九戦目「問題児は先を読む」（後書き）

玉：

みんなオッハー！

え？古い？うるせい。

というわけで夜襲があつたんだな。結構、夜襲の兆しって天文で分かるもんなんだ。あとは英雄の命の様子とかね。ま、詳しいことは俺も知らないし、孔明に比べれば全然なただけださ。

あと、ゴメン孔明。

翠にダメって言ったら暴れそうなんだもん。だから単騎で加勢に行かせたけど・・・大丈夫だったよね？

ま、そんな感じで翠をテケトーに呂布と戦わせてあげてよ。

え？心配しないのかって？そりゃあ心配さあ！後で胸揉んでやろうか？って思うほど心配さ！

・・・でも、ま、将の意思も考えてあげないといけないからさ。軍師としても人としてもさ。

というわけで夜襲自体で決着をつけるつもりもなさそうだし、長くなるとは思わないから。

んじゃ次回もまた会おうな！

十戦目「問題児は再戦を待つ」(前書き)

短いけど、勘弁

十戦目「問題児は再戦を待つ」

side馬超

馬を駆け、金属音が鳴り響く方向へ進む。

見えたのは関羽と張飛と趙雲の三人が赤毛の方天画戟を持つ奴と戦っていたところだった。

奴が呂布か。

あの覇気というか強そうな雰囲気がある。

戦っているあの三人は弱くない。むしろ強い。

だが、呂布は軽くあしらっている。

面白い！

「呂布ー！あたしと勝負しやがれー！」

「馬超！？なぜここにいる！」

関羽が何か言ってるけど、無視して馬から飛び降りてそのまま呂布を突きを食らわす。

が

「・・・甘い」

方天画戟で左にずらされる。

あたしはそのまま右に振るうが、やっぱり塞がれた。

銀閃を持ち替えて、振るい、突き、薙ぐ。

・・・やっぱり塞がれるあ。

「お前、強い。だけど、勝てない」

「だったらやってやる！西涼の錦马超を舐めるなあ！」

あらゆる方向に槍を振るうけど、呂布には一撃も当たらない。

むしろ、徐々に反撃されて攻勢に移っているのが分かる。

やっぱり強い・・・！

「ふ、私がいるのも忘れないで欲しいな」

「鈴々もいるのだー！」

「というか、私達が最初に戦っていたのだが・・・」

三人が加勢に来る。

あ、そうだな。

今は倒すことが目標なんだっけ。

呂布はさすがに四人じゃ分が悪いのか、後ろに跳んだ。

「さて、四人だな。呂布。どうだ」

「お前ら、恋より弱い。・・・四人で来い」

「だとよ、馬超よ」

「いや、あたしに振られても困るんだけど・・・」

すると、呂布の後ろから声が聞こえる。

「恋どのおー！一旦退くのです！」

「ん、分かった」

「なっ、待て！」

呂布が撤退しようとするところを、関羽が止められるが、趙雲に止められて呂布は撤退した。

周りを見れば徐栄というやつも撤退していた。孔融とかいう奴の陣営だったけど大丈夫なのか？

とりあえず董卓軍は撤退していった。

あーあ。また呂布と戦ってみたいな。

あいつ強いし。

s i d e o u t

なんとか董卓軍を撃退・・・というかまあ勝手に撤退していっただけださ。

少なくとも俺達馬超軍の被害はほとんどないといっても過言ではない。

あとは俺が目をつけた勢力くらいなだけださ。

袁術軍とかはかなり被害を受けたらしい。というか、連合軍全体から見れば被害は大きい。

俺は今は、連合軍の修復の指示を出している。

騎兵中心の董卓軍だったから馬防柵の効果は大きかったな。

すでに夜は明けている。

・・・まあ、なんというか、「おーほっほっほっ！」って聞こえるんだが、鶏の間違いかな？

というかさ

「翠手伝つてよぉ」

翠ちゃんはずっと鍛錬してます。

まさかの翡玉まで（涙）

あの娘達はとうしたの！？

いくら文官の仕事とはいえ全部俺に任せちゃってるんだよ！？

翠も翡玉も力持ちなんだから手伝つてよ！

・・・まあ、それでもほっとくから俺は甘いんだけどさあ。

そういえば本初が虎牢関攻めるそうだ。

大丈夫なのか？

袁術も一緒らしいけど・・・。

かなり被害があるって顔良さんが涙目で援助をお願いしてたもん。

大変だなあ。

ただでさえ呂布の猛攻で士気がただ下がりなのに、烏合の衆。

袁家の兵士が可哀想だなあ。

まあ、がんばれ。

西涼に引っ越してくれてもいいんだよ？

ちよつと寒いけどさ。

あるえー？

気が付いたら、もう翌日になってる。

…飯以外翠と翡玉は何をやってたかな？

鍛練に夜寝るくらいだな。

疲れたのか、寝巻に着替えずに寝てしまった。

仕方がないので俺が服を脱がして着替えさせた……はずはないので
蒲公英と馬玩と成公英にやつてもらった。

まあ、俺がやるわけにはいかないしね。

覗きはしたが。

…ゴホン

さて、今日は翠と碧玉は出番が無いからと劉備軍と合同鍛練してくると行ってしまった。蒲公英も半ば無理矢理連れていく感じで連れていかれたけど…。

仕方が無いので俺の部下である成公英と馬玩と兵士何人かを連れて本初と公路の虎牢関攻めを見学させてもらう。

というか見学と言うより傍観だが。

学ぶことなんてないもん。

せいぜい「馬鹿正直に数だけ頼りに戦えば勝てる戦も勝てない」くらいだろう。

つーか軍師の役職上当たり前なんだけどさ。

おおー。

始まったみたいだ。

連合一の勢力を持つ本初が攻めることを聞いた多くの諸侯も参戦。

連合の半分以上の勢力が一気に攻め掛かった。

…大丈夫なのか？

将来警戒すべき勢力は見極めているようだ。

聞こえるのは兵士の怒号と悲鳴。…悲鳴はほとんど連合軍なんだけ
どぞ。

董卓軍も数では劣るが勇猛さを活かして連合軍を押している。

頑張れよ連合。

だがやっぱり数の暴力は辛いだろう。

せいぜい被害出し合って。漁夫の利を貰うから。

あ、【呂】の旗出てきた。

すごっ。人が飛んでるよ。

こええ。

あれは【徐】か。

うーん、呂布を見ると徐栄がシヨボく見えるなあ。まあ、名将なのは
違いない。

【高】か。

高順だったな。すごいな。陥落するように連合軍を潰してるよ。

対して連合軍の主な将は誰だ？

あれは…えーと武安国か？

他に誰がいたつけ？

思いだせん。

まあいいか。興味ないし。

その後は特筆することは無かった。

まあ、連合軍も董卓軍もそれなりの被害があつたということだ。

明日は劉備軍、曹操軍、公孫軍、馬超軍、孫策軍。あと何故か本初と公路も出るらしい。兵士は大丈夫なのか？

まあいいや。手柄は手に入れてるし翠の癖をどうにかさせるか。

バトルジャンキー

被害はあまり受けるつもりはない。

俺にとって乱世はもう来ているのだから。

十戦目「問題児は再戦を待つ」（後書き）

蒲公英：

やつほゝみんなゝ！蒲公英だよゝ

いやあ、本当にお姉様つて脳筋だよねえ。蒲公英なら絶対に呂布みたいな化け物と戦いたくないおゝ。

・・・ううゝそのせいで張飛と戦わせられるんだからゝ。お兄様といちゃいちゃしたいのに強制的に鍛錬だよ！？蒲公英嫌だよ！あんな脳筋達みたいな人達に勝てないよ！・・・あ、でも星お姉様は別だよ？いい人なんだ。大人！って感じでさあ。好きな男の人を喜ばせるにはどうすればいい？って聞いたからねえゝいろいろ教えてくれたんだあゝすごいよねえ星お姉様。今まで近寄ってきた男の人は数知れぬ！だつてゝ

あ、お姉様が呼んでるみたいだからじゃあねゝ！

次回もよろしくゝ」

十一戦目「問題児は急ぐ」(前書き)

ジャンプは更新出来なさそうなので、しばらくはこっちを更新

十一戦目「問題児は急ぐ」

おはようございまーす馬鉄です。

ただいま虎牢関攻めの進軍中です。

あー、面倒だ。

今回の目標はどれだけ被害出さずに、怪しまれずに、戦を切り抜けるか。

何か適当な理由言つて、後々面倒なことになるのは困る。

できれば、張遼が呂布辺りを捕縛したいが呂布は無理だな…。

張遼に翠か碧玉を当てて一騎打ちに申し込むのもありだ。…彼女達なら勝てるだろうけど兵の損失が痛くなりそうだ…。

…とりあえず積極的には出ない。

孟徳殿のそこは張遼を捕まえるらしい。

まあ、捕まるだろうな。

俺の予想だと呂布は玄德ん所にぶつかりそうだ。まあ、関羽、張飛、趙雲と軍師から見れば喉から手どころか全身が出るくらい欲しいのだがな。

…まあ、正義正義と五月蠅いけど。

孔明も士元も大変だろうなあ。軍師としては動きにくいだろうなあ。対して孟徳は良いと思う。だけど俺は性に合わない。

霸道だからと卑怯なことはしないとか。才能ある者しか用はないとか。

凡人だってやれば出来るんだ。やれば（・・・）な。

才能ある者は時代が進むに連れ減っていく。平和な世になれば尚更だ。また戦乱の世になれば現れるらしいけどさ。

…うん、やっぱり翠と一緒にいいね。

孫策は…うん、あそこは暑いな。江南だし。

俺、暑いのが苦手なんだよ。

西涼は基本、寒いくらい涼しいぞ。

「お、とうとう始まったみたいだな」

俺の隣にいた翠が前を見て言った。俺も前に見れば戦が始まったことに気がついた。

「【張】の旗が【徐】の旗から先行しています」

「先遣隊かな？」

「違っだろ蒲公英。あれじゃないか。えーと単に突出しちまったんじゃないか？」

「えー？お姉様じゃあるまいし」

「う、うるさい！」

「【夏侯】の旗に囲まれてますね…」

碧玉が戦況を伝えてくれる。翠と蒲公英の漫才を横にね。

やっぱり張遼は突出したか。ある意味、バトルジャンキー戦闘狂だしな。

【徐】の旗であろう徐栄が【夏侯】の包囲を解こうとするが、もう一つの【夏侯】に妨害されているな。

孟徳殿は本気で張遼を捕らえるつもりだな。ちくせう。

「…なあ玉」

「ん？」

「めっちゃくちゃ体が疼くんだけどさ…」

「な、なんだってー！？」

ま、まさか翠ちゃんこんなところで！？

皆が見ている中で！？

羞恥プレイ希望！？

さ、さすがの俺もきついお願いだぜ…。

だが、俺は

「言っておくが変なことじゃないからな」

「変なことって？」

「だ、だから変なことだって」

「だから何が変なの？」

「お姉様何が変なの？」

蒲公英がニヤニヤとして援軍に現れた。翠の顔が（多分）羞恥で赤くなる。かーわいー♪

「…あまり姫をからかわないであげてください」

「あ、もちろん翡翠も可愛いからね♪」

「はう…」

玉は見事、翠と翡翠を陥落させた。【陥陣営】ならぬ【陥翡翠】だな。翡翠さんと被るが、まあ、いいんじゃない？俺は蒲公英も翡翠さんも大好きだからね。

一人選べたって無理さ。皆大好きなんだから。

「さて、本音は置いといて」

「本音なのかよ」

「翠は呂布と戦いたいんだろ？」

「おう、めっちゃくちや強い奴と戦いたいんだ」

「構わないけど場所取りは無理だよなあ」

翠の個人的な理由で兵士を傷つけるわけにはいかないしなあ。どうしようか？

ポク、ポク、ポク、チーン

「よし、翠は単騎で劉備軍に行っていていいよ。多分、雲長辺りが呂布と戦っているからな」

「え？いいのか？」

「うん」

「よっしゃー！行つてく…」

「その代わり一日俺の言うこと聞いてね」

勢いよく行こうとした翠が止まった。

悩んでるな。

うん、あの様子は悩んでいますな。

可愛いな、もう。

「後なんてどうでもいい！」

あ、行っちゃったのか。

さて♪

翠には何をしてもらおうかな♪

むふふw

「んじゃ、とりあえず今回は騎馬弓兵中心の編成で来たから、翡翠は騎馬弓兵五百人を率いて”援護”を中心にしてくれ」

「御意」

翡翠はすぐさま兵を率いて援護に向かう。

目標は被害皆無なんだが戦争する以上、それは無理な話だろう。

まだ指示を出していない兵士がいる。あとでいろいろ言われるのはいやだから”フリ”だけしておこう。

成公英と馬玩に兵士達に指示を回すように伝える。

「んじゃ、蒲公英は頼むぞ」

「うん」任せてお兄様」

・・・とりあえずこんな感じでいいかな。

速く終わらないかなあ。

side馬超

「よお！関羽に趙雲、張飛」

「む？なぜ馬超お前がここに」

「そうなのだ！鉄のお兄ちゃんのところじゃないのだ？」

「まあ、援軍？加勢？助太刀ってやつか？とりあえずあたしも混ぜてくれよ。昨日ぶりだな呂布」

あたしは単騎で呂の旗がある場所へ向かうと、そこには劉備軍の趙雲や関羽、張飛がいた。三人は呂布ほどじゃねえけど、十分強い。あたしと同じくらいな。

あたしが現れると呂布は待ってくれるように話を聞いている。意外と律儀なんだな。

「ん」

「馬超！ここは確かに武人として一騎打ちをしたいだろうが、我ら三人は将として戦っている。それでもいいのか？」

「・・・まあ、仕方ないかもなあ。分かった。四人对一つつーのもあまり気が乗らないけど仕方ないか」

「・・・さすがに恋も疲れる。だから――」

呂布は手にする方天画戟を構えると一気に――

「――本気で行く」

――殺気を曝け出した。

面白え！

こんな殺気、母上よりも強い！

楽しい！たとえ四人だとしてもこんな強い奴と戦えるなんてな！

だけど、それはあたしがまだ呂布には一騎打ちでは勝てないことを認めていると同じ。

なら、あたしは呂布を倒せるくらい強くなつてやる！

「――行く」

速い！

呂布は一瞬であたしや関羽達の目の前に現れ戟を横に薙ぎ払った。

「くう！」

まるで岩を受け止めたかのような衝撃が腕に伝わってくる。

三人もなんとか防御したようだ。だけど痛みに一瞬を顔をしかめている。

「せえい！」

趙雲が痛みに耐えて突きを放つ。あたしも続けるように側面から突きを入れた。

だが、方天画戟で同時に受け止められる。

「やあ！」

関羽が薙ぎ払おうとするが、あたしと趙雲の槍を弾いた呂布がそれを受け止める。

・・・すげえ。

「おりゃあー！」

技術的に無理だと思ったのか、それとも単なる猪なのかは分からないけど張飛が力任せに矛を振るった。体勢を立て直したあたしと趙雲も突きや薙ぎ払うが、呂布はいとも簡単にそれを捌ききる。

次に関羽が威力よりも手数で勝負に出たのか、浅く連続で振るった。趙雲も得意としているらしい連続の速い突きを出す。

・・・さすがの呂布も初撃の数回は掠ったがすぐに捌ききる。あたしの槍も張飛の矛も。

「お前ら弱い。・・・だけど四人いると揃うと面倒」

呂布が大きく振りかぶった。来るのか！

その時、凄まじいと言ってもおかしくないほどの金属音が鳴り響いた。

「くあ・・・う・・・」

あまりの痛さに顔をしかめてしまう。呂布は思いつきり薙ぎ払ったようだ・・・。

三人もなんとか武器は落とさなかったようだが、目で分かるほど手が腫れているのが分かる。

「やっぱりさすが呂布だぜえ・・・」

「ふむ・・・確かに飛將軍なだけあるな」

「強いのだ！」

「だが、我らはご主人様や桃香様のために負けるわけにはいかない！」

その中にあたしは入っていないけどなあ。

ともかくとして、あたし達は四人で一斉に呂布に切りかかる。

・・・切りかかるというより猛迫というべきか？

ほとんど力と速さによる短期決戦。

「うりゃーっ！」

「はいっはいっはいっっ！」

「せやあーっ！」

「おりゃおりゃおりゃーっ！」

腕が痺れてくる。

疲れが一気に出てくる。

足が震える。

目がかすんでくる。

他の三人も同じだろう。

全てを出し切るようにあたし達は猛撃を繰り返す。

防御を考えず攻撃を。

普段連星沈着な趙雲も熱くなっている。

さすがの呂布も捌ききれなくなったのか、顔をしかめて防御に徹している。しかし確実に攻撃は当たっていた。

呂布が薙ぎ払い、後ろに跳んだ。

「・・・ちんきゅ」

「恋殿おー！撤退はできませんぞおー！」

「ん」

「ま、待て呂布！貴様逃げる気か！」

関羽が噛み付くように言う。あたし？疲れて声も出ねえよ…………。

「違う」

「何が違うというのだ！」

「お前ら面白い。だから殺さない」

「なっ！？我らを逃がすというのか！」

「ん」

肯定するように呂布が頷く。あっちゃー……関羽怒ってるな。顔真つ赤だ。

「追撃をしか「今なのです！なっ！火矢だと！？」」

陳宮と呼ばれたたちびっ子の号令の元弓兵から火矢が放たれ地面に引火していく。

関羽や張飛が何か行ってるけど、お構いなしに呂布たちは撤退した。

ううー……あたしももつと戦いたかったな……。

でも絶対に強くなってやる！

そして呂布を倒すんだ！

だけど、その前に……

「腹減った……」

side out

虎牢関は孫策軍が制圧した。

それにより虎牢関の戦いは終結した。

・・・端的に言えば短いけど、本当はものっそい時間がかかった。
半日の半日くらいかかったな。

翠が愛馬の黄鵬に寝ながら来たのはめっちゃくちや驚いた。

矢でも刺さって気絶したんじゃないか？って思うほどびっくりした。

まあ、おろす時ちやつかりお胸を揉ませていただいた。エヘン。

心配させた罰として翠の喘ぎ声が聞こえるくらいな！

・・・うん、でも後で翡翠の視線がすごく怖かったです。殺される
かと思った・・・。

とりあえず今は戦後処理。

さっさと洛陽に行かねばならない。

董卓の存在とその周りを確認しないといけないしなあ。

もし、噂と違う人物ならば取り込む。

それが一番だ。

噂どおりなら、斬る！（翠か碧玉が）

高順や呂布は敗走したらしい。張遼はやっぱり孟徳に捕縛されたな。

徐栄はどうやら洛陽に撤退らしいな・・・。

迎撃されないといいんだけど・・・。

そんな感じで悩んでいると

「ば、馬鉄様！申し上げます！」

斥候に出していた兵士が慌てた様子で現れた。

どうしたんだ？

俺はその報告を聞いた瞬間、気を失いそうになった。

「ら、洛陽が火によって燃やし尽くされてます！」

十一戦目「問題児は急ぐ」（後書き）

碧玉：

皆様、こんにちは。またはこんばんは。碧玉でございます。

虎牢関攻めでしたね。

姫は呂布と戦ったようですね。…羨ましいです。私だって武人なんですよ？

玉様は姫に甘すぎます…。

私の気持ち分かってくださらないなんて…。

ゴ、ゴホン。

どうやら洛陽が炎上しているようです。

なぜでしょうか…。

私にはよく分かりませんが…。

反董卓連合が終わり、玉様が言うには群雄割拠が始まるみたいです
ね。

それでは皆様、また次回会いましょう。

十二戦目「問題児は溜め息をつく」(前書き)

とりあえず反董卓連合編終了。

次回からは西涼✓攻略に玉君が奮闘します。

十二戦目「問題児は溜め息をつく」

洛陽炎上の報告を受けた俺はすぐさま、救援部隊の騎兵一万を編成し、翠と蒲公英と洛陽に向かっている。

歩兵中心のほかの諸侯も遅れながらも追いかけているらしい。

さて、斥候の情報によると洛陽炎上の理由はまだ生き残っていたらしい十常待の片割れや董卓軍の中でも問題視されていた李力ク達の身の不安からの錯乱からに放火を行ったらしい。

詳しいことは分からないが大方、そういうことだ。

洛陽の民は一応、長安に避難しているらしい。天子様もだ。

避難の手際がいいな董卓。

・・・ま、とにかく今は洛陽に急行軍で向かっている。

翠が時折話しかけてくるが、俺にはそんな暇はない。

・・・洛陽救援後のことを考えなければならない。

確実に群雄割拠の時代が来ることが分かりきっている以上、翠を主君とするためどのように涼州から勢力を伸ばすか。

俺の予想だと長安に董卓軍残党は残るだろう。

そつするといかに天子様をお救いになるか。長安まで勢力を伸ばせ

そうだが、文官が足りなさ過ぎる。

俺が直接行くわけにはいかない。首都武威があるわけだし。

・・・やっぱり文武官足りないなあ。

いつそ謀略をやるうかと思ったが翠に反感を買ってしまつかもしれない。

俺、という存在が嫌だが、下手に謀反の濡れ衣を着せられるのも嫌だ。

・・・まあ、どうにかするしかないな。

”俺”が生きている限りは、な。

「玉、見えてきた」

荒い息で翠が俺に言った。

蒲公英も疲れた様子を見せている。兵士達もだが。

視線の先には煙の上がる洛陽。

「・・・酷いな」

城壁を開けて、洛陽に入ると自然とその言葉が漏れてくる。

炎上する洛陽にあるのは燃え盛る家屋や血の湖に倒れる人々。

翠も顔をしかめている。

・・・董卓がやったのか？

いや、そんなはずはない。もしこんな悲惨なことをするならば、あんなに手際のいい避難はしないはずだ。

とにかく商人と合流し、洛水と呼ばれる川から兵士五千を使って洛陽の消火活動に当たらせる。ここでの指示は俺がやる。

蒲公英と翠には崩れた家屋からの民の救出作業だ。ここには三千の兵を。

残った二千の兵には商人から購入した食料や資源などを使って、炊き出しや簡易家屋の製作や宮殿の清掃をやらせる。

消火活動を終えた兵士は他にもやってもらうことがあるので指示を出す。

そういえば十常待の片割れがいたので殺しとく。

宮殿の奥に隠れてやがった。よくあんな火災生きてられたな。

後で火種になるのが分かっているので消しておいた。

・・・一応、消火作業でひと段落した時に連合軍がようやく辿りついた。

馬超軍は強行軍で疲労が溜まっているために休養を取るという名目で連合軍に後は任せた。

玄徳のところの一刀が張飛ちゃんと華雄將軍を連れて洛陽近郊の森に向かったので不思議に思い離れて尾行してみると、なんと董卓がいた。可愛かったなあ。

大方やるであろうことは分かっていたので「董卓は洛陽炎上の際、死んだ」という噂を流しておいた。

「・・・はあ、疲れたなあ」

まだ何かが燃えている匂いや死体が焼かれた匂い、血の匂いが残る洛陽で呟く。

夜空は相変わらず星が輝いて綺麗だった。

「乱世、かあ」

少々自分の考えが浅かったことに溜め息をつく。

もう少し速く気が着いていれば、国を起こせるぐらいの勢力や人材を集められたかもしれない。

「ま、過ぎたことだしなあ・・・」

董卓軍はすでに四方八方に分裂してしまっている。董卓は世間上死んでいるし、呂布は消息不明、張遼は孟徳殿のところ、華雄將軍は玄徳のところ。

俺の負担が増えるかもしれないが諦めるしかない。

俺にどんなに負担が増えたっていいのだ。俺が大好きな人達が笑顔ならば。

「玉、こんなところにいたのか」

夜空を見て、溜め息をついていると翠が現れて俺の隣に座る。

「おお、翠か」

「なに夜空なんて見て感傷に浸ってたんだ」

茶化すように翠が言う。

「まあ翠よりはマシだろうね」

「どういう意味だ？」

「翠が夜空を見て感傷に浸ってたなら笑い話にしかないさ」

「うるせっ」

「いてっ」

ポカッと頭を殴られる。

そしてしばらく二人で夜空を見る。

「・・・なあ翠」

「・・・なんだ？」

俺は夜空の星に向けて指差す。

「あの緑色っぽく大きく輝く星があるじゃん」

「うん」

「あれが翠、馬超の将星なんだ」

「ふーん、そんなのがあるのか」

「上にあるのが翡翠さん、下に小さく黄色っぽく輝いているのが蒲公英ね。隣が碧玉。さらにその下にある薄い碧が俺なんだよ」

「それがどうしたんだ？」

「・・・まあ、翠に言っても仕方ないんだけどさ。とりあえず知っ
ていてもらおうかなーと」

「まあ、星がどうだろうとあたしには関係ないしな」

「翠は戦いと飯があればいいもんなあ」

「うるせっ」

「いたっ」

またポクツと叩かれる。

「・・・なあ、翠」

「ん？」

「俺、疲れた」

「・・・仕方ないな、ほら、あたしの膝なら貸してやるよ」

顔を真つ赤にしながら言う翠。可愛い。

普段ならボケてるけど、俺はつかれたよパト。ッシュ・・・。

「ありがと・・・」

今は翠の健康的な生足の膝枕を楽しもう。

乱世という仕事の前の一眠りとして。

十二戦目「問題児は溜め息をつく」(後書き)

玉：

やあ皆。

皆大好き鉄ちゃんだよ。

いやあー疲れたねえ。

疲れたんだけど西涼に帰らないとね…。

洛陽はもう死体と壊れた家屋しかない。

宮殿もボロボロでさ…。

死体は全部燃やした。

崩れた家屋と一緒にね。

疫病が怖いからねえ…。

うん…疲れた…。

また翠に膝枕してもらおつと。

んじゃ、次回もよろしくな。

十三戦目「問題児は帰還する」(前書き)

タイトルと内容が噛み合っていない…。

十三戦目「問題児は帰還する」

その後、長安を李カク達が占拠。

反董卓連合は董卓が死んだという噂を聞いて、多くの諸侯が自分達の領地に帰っていった。

一部の諸侯は天子様をお救いするのだ！と言ったが、いつまでたっても洛陽復興という名目で行動しない諸侯の中でも大勢力である袁紹軍と袁術軍に呆れ、独断で攻めたが多くの西涼兵を持つ李カク達に返り討ちにされてしまっていた。

ちなみに本物の董卓は一刀のところにいつてしまっている。お付きの軍師もね。

実質的に連合は解散。

俺としてはこのまま長安を攻めて皇帝を救いたい、つれてきている兵が一万五千しかないために十万以上の勢力があるという李カク達を攻めることに断念。

一度、武威に帰還することに決めた。

翡翠さんにそのことを救えば身を徹して皇帝をお救いすると言っただろう。翡翠さんは漢の忠臣と公言しているのだから。

だけど、俺はもう無理だと思っている。なぜなら――

洛陽を出て半月・・・いや、もっと経ったかな？

よく分からんけど、どうも馬鉄っす。

長安を南から迂回するように通って宛、安定を経由しながら武威に向かっていますよ！。

え？その間に何をしたって？

んー、一緒に寝たことかな。別にナニもしてないからな？

俺は無理矢理はいやだ！

・・・いや、まあ、翠達が合意なら構わんけどさ。

さてさて、そろそろ武威に到着するはずだあ。

・・・まあ、ともかくとして、武威に到着。

俺は部隊帰還の処理でやることがいっぱいあるので、翠達はもう翡翠さんに会ってるだろうなあ。

俺としては一秒でも早く会いたいんだけどなあ……。

帰還して即効で執務室入り。

翡翠さんだけだったから溜まりに溜まった書類仕事がある。

それにもうすぐ収穫時期だし、冬も近いし……やることがいっぱいだなあ。

あ、あと提携している商人の人に荊州の余剰食糧を送ってもらわなきゃ。

軍事関連は今回の戦で亡くなった兵士の遺族への代金を送らないと。

……え？悲しくないのかって？

そりゃあもう、嫌だけど慣れちまったよ、ほんと。

ちなみにこの仕事は俺が翡翠さんくらいだ。やるのはね。

なぜかって？

兵士を生かすのも殺すのも、俺が考えているからさ。

俺の策によって翠達が兵士を率いる。

そして死ぬのも俺のせいだ。

被害なしの戦なんてよほど小さい戦だ。少数の盗賊討伐とかな。

だけど、何千、何万の戦となるとよほどの限り被害無しなんてありえない。

・・・まあ、そういうもんだ。

おっと、間諜からの情報も入っているな。

つか、高度な忍びみtainな間諜部隊なんてどうやって作るんだ？
情報操作もお手の物なんていうさ。

ありえないよなあ。

呉の間諜は武将としても有名らしいから羨ましいもんだよ。

なにより商人に扮するならともかく将として、文官として間諜にするのはかなり高度だ。

間諜の実力を持たせながら、扮する職業の能力までつけなければならぬからな。

さてさて、新兵器というか、ま、投石車も発注しておくか。

まずは兵士用の槍や弓、矢の補充。

馬の鎧とかもだなあ。

そんな感じで書類仕事をしていると

「
玉
」
♪

「はうわ！」

突然、背中に巨大な何かの感触が！！

それに耳に息を吹きかけ、甘噛みしてきたぞ！？

「ななななななななななななななななすか翡翠さん」

「ふふっ ♪ いろいろご苦労様玉」

「ま、ま、ま、まあ仕事ですから」

のうおっ！？

背中に巨大な感触があ！形まではつきり伝わってくるぞお！？

「そ、そういえばもう翠達とはいいいんですか？」

「あの娘達ならもうぐい飯食べてるわ」

「あ、もうそんな時間ですか」

「ええ、そうよ。せっかく帰ってきたんだから、翡翠に報告任せな
いで戦後処理なんてしてるんじゃないよ」

「で、ですが・・・はにゃあ!？」

ま、また耳に息を吹きかけてくる!？

「ちよつと外に出ましょう」

「え、ちよ」

俺のような男に翡翠さんの力に勝てるはずがなく、腕を引っ張られつれてかれた。

連れて来られたのとして

も、夜空が綺麗なところだった。

翡翠さんは今、俺に背を向けて先行して歩いている。

そんな姿を見て、俺は口から言葉が漏れる。

「――――――――――逝く、んですね」

俺の言葉に翡翠さんは横顔をチラリと微笑んで見せた。

「やっぱり、玉には気がつかれてたかあ」

「行ってるでしょう？俺は大切な人の全てを知っているんですから」

「病のことも？」

「はい、何の病気かは分かりませんでしたけど、症状を見て、あるとあらゆる情報を調べて周りましたから。・・・書簡がいっぱいでしたかね」

「どつりで予算に穴があると思ってたけど、私のことに使っていたのね」

「ええ、そうです」

チラリと西涼の将星を見れば、英雄馬騰の将星は弱弱い光を放っている。

「俺にとって貴女は大切な人です。翡翠さんから見れば、今は亡き旦那様の方が好きなんだと思っています。だから俺はせめて――」

「――――――――――」

俺が言い切る前に翡翠さんは言った。

「玉、私にとって貴方は一番よ。前の旦那よりも愛してるわ」

「え？」

「確かにあの人はあたしが翠を産んで、蒲公英を引き取ってすぐに亡くなったわ。確かにあの人は私にとって大事な人だった愛しい人だった。だけどね・・・時々思うのよ。貴方は旦那の生まれ変わりなんじゃないかって」

「ですが」

「確かに違うと思うわ。・・・だけどね、そっくりなのよ。だとしても旦那は旦那。貴方は貴方」

まるで夢げな様子の翡翠さんが星を見るために顔を上げた。

泣いている？

「玉」

「はい」

「私はすつごく寂しいわ・・・。正直時代はもう翠のように新たな世代を迎えている。私は何時だって死んでも構わなかった、だけど」

翡翠さんは一泊置いて、言った。

「貴方が来てから死にたくなってしまうたのよ・・・」

「翡翠さん！」

俺は思わず翡翠さんを抱き締めた。・・・俺よりも何千倍も強くて、人生経験のある人だけど、今は儂げな女性に見えた。普段の翡翠さんからはありえない様子だった。とても強い女性。だけど、その体は細々しくて、俺の胸に収まるほど小さかった。

「死にたくないよお・・・死にたくないよお玉う・・・」

「翡翠さん・・・」

俺は翡翠さんの名前しか呼ぶことが出来なかった。

・・・なんでかって？

そりゃあさ・・・いくら探しても無理だった！あらゆる医者に見てもらった！旅をしていたかつこいい感じの暑苦しそうな青年にも見てもらった！五斗米道の本拠地である漢中にも訊ねた！

だけど！だけど・・・医者はみな無理といった！

俺だって翡翠さんを死なせたくない！だって俺の親代わりでもあり！愛している人だし！翠のお母さんだし！西涼のお母さんだし・・・とにかく・・・俺だって・・・俺だってえ・・・。

俺の胸の中で泣く翡翠さんを思いつきり抱き締める。

「翡翠さん・・・」

「玉・・・私は貴方を愛してるわ。本当は・・・翠みたいな若い子の方がいいと思うのだけど・・・」

「いいんです、俺は翡翠さんも翠も碧玉も蒲公英もみんな愛してます。年齢なんてどうでもいいです」

「なら翠には悪いけど、遠慮無く」

「え？一体なにをするおつも——んぐっ!？」

接吻された。

チューされた。

キスされた。

・・・言い方はともかく、俺のファーストキスは翡翠さんの物になった。

別に俺のファーストキスなんてどうでもいい。

今はただ・・・

の時間を大切にすることにする。

残り少ない翡翠さんと

だけど、その光景を見ていた人がいることは俺のような文官には気がつかなかった。

s i d e 馬超

母上と玉がいつまでたっても来ないので、仕方なく呼ぶために探していた。

すると外の方で二人を見かけた。

「あ、母上――」

あたしは声をかけようとしたが、それは次の出来事によって止められた。

玉が、母上を、抱き締めたのだった。

泣いている？

母上が？

それに病気？さっき言ってたのって……。

死にたくない？母上？どういことなんだ。

最初は隠れて盗み聞きするつもりはなかったのだけど、あたしは思わず隠れてみていた。

母上も……玉が好きなのか……。

……うん、気がついてはいたんだ。でもそれは家族だからって。そんな風に思っていた。

だけど、今なら言える。

あたしは玉が大好きなのだ。

家族で好きというのは自分の感情を背けるためだったんだ。

「……そうだよな……あたしみたいなガサツで男みたいな女より……大人っぽくてあたしより強い母上の方がいいもん……」

……口からそんな言葉が漏れてくる。

あたしは小さいころから、馬に乗って兵士の訓練に混ざってきていた。

……思えば、あたしは女っぽいことをしたことなよな。

そして、あたしは見ってしまった。

「っ!？」

母上が、玉に口付けをしたところを。

「~~~~~っ!！」

思わずあたしはその場を走り出したのだった。

十三戦目「問題児は帰還する」（後書き）

翡翠：

やあ皆。

翠の母親の馬寿成だ。

玉達が帰ってきたんだよ。

いやあ、一段と遅しくなってきたね。

私もあと十くらい若かったら行ってたわ。

…まあ、玉といられるし…。

病気の方も難しいわ…もう少しと言わず、ずっと家族で。

翠に蒲公英、翡翠に玉と皆でね。

時代は待ってくれないけど…。

それじゃあ皆、また会いましょう。

十四戦目「問題児は頭を抱える」(前書き)

…ジャンプの方の更新が無理そうなので、しばらくこちらを更新。
あれ？前にも言った気が…。

十四戦目「問題児は頭を抱える」

・・・やあ、みんな。

鉄ちゃーんです・・・。

え・・・？なんでこんなにテンションが低いのかって・・・？

そりゃあ・・・まず一つに・・・翠分不足・・・と・・・なぜか最近、翠が・・・俺のこと避けているんだ・・・。

さすがに変態行動をしすぎて嫌われちゃったのかなって思って・・・俺、泣いちゃったよ・・・。

だけど、仕事関係とかで最低限会話はしてくるんだけどさあ・・・。

「はあ~~~~~~~~~~~~」

あーあ、何かこんな書簡の整理なんてやってられなくなるなあ。

…といっても流石に文官不足で俺しかいないのに、やらないと大変なことになるから、やめることは許されないけど。

本当にどうしたのかなあ？

「なあ、碧玉」

「…入ってきて、いきなり肯定を求められても困るんですが」

おお、どうやら翡翠は俺の味方になってくれないようだ。…新たな書簡が追加された。

「遅れてますね。普段の玉様なら私達の何百倍も早く終わらせるのに…」

「…翠分不足さ」

「姫ですか？喧嘩でもしたのですか」

「いや、喧嘩なんてしたことないさ」

「というか喧嘩なったら必ず暴力振るってくるよね？俺、勝てるはずないじゃん。」

「では、どうして？」

「それが分からないんだよ。仕事以外は無視したり逃げられたり…」

「姫のオヤツを食べたとか？」

「君から見た翠はそういう風なんだね」

「あーい、いえ。そういうわけでは…」

まあ、蒲公英も翡翠さんも、そう言いそうだけどさ。

「…なんでだろ？」

「私には分かりかねます」

「うーん、同じ女の子として」

「そうですね・・・」

翡翠が顎の手を当て、考え始める。

すると・・・

「ボンッ」

「爆発!？」

突然、顔を赤くして湯気をだした!

どうしたんだ!?

「何があつた!？」

「い、い、い、い、いえ!なんでもありません!」

「おい!翡翠!喋り方が壊れているぞ!」

「そんなことはありません!おーほっほっほ!」

「ねえ!?!どうしたの!?!何があつたの!?!ねえ!?!」

カオスだよ?めちゃくちゃカオスだよ?

「わ、私は失礼いたしますー！」

橋って去る翡翠。・・・あ、こけた。

あれ？彼女そんな属性はなかったはずだけど！？

残された俺は、ポリポリと頭を掻き、

「・・・仕事すつか」

泰山ぐらい高く聳える書簡の山と対峙することにするのだった。

side? 徳

「玉様は・・・ずるいです」

私は玉様の執務室から出たあと、自分の部屋に籠っていた。

仕事は終わらせてあるし・・・大丈夫です。

「姫は・・・そうですね、当たり前ですよね」

姫は玉様に好意を持っていることは知っていました。

なぜなら、姫が一番玉様といえるんですから。

・・・あんな正確だというのに玉様は変に鈍感です。

「私も・・・なんですよね」

蒲公英も翡翠様も玉様が好きなんですよね・・・。

姫の様子がおかしいのは・・・きっと何かを見てしまったのでしょう。

翡翠様が最近、機嫌が良かったり、調子が悪そうでしたが・・・。

「私は・・・どうなのでしょう？」

私といえば、ただ斧を手に、馬に跨り、返り血を浴びてくるような武人です。

女らしい・・・ことなんて出来ません。

ただ・・・私が伸ばしている黒髪は玉様に昔、言われてから伸ばしたものです。

ですが・・・

「私のような無骨者に・・・」

私なんかより姫の方が女の子らしいです。

確かに姫は食いしん坊で戦闘狂で無骨者って感じがするかもしれませんが、分かります。

姫の方が可愛いのです。私なんかより・・・よっぽど女の子らしいです。

私の自慢できることは、玉様に言われて伸ばした黒髪。

ですが、徐州の劉備の臣下の美髯公関羽と被っております・・・私は何にも自慢できません。

「玉様・・・私は貴方様をお慕いしております・・・」

私の弦きは誰もいない部屋の中に小さく響きました。

s i d e o u t

「あー今日は風呂だな・・・」

やあみんな玉だ・・・。

今日は久々に風呂だねえ。

この時代風呂はやっぱり高級なのよ。

毎日入れるもんじゃないんだよ。

だから知覚の川で水浴びしたり、水で濡らしたタオルで体を拭いたりしてるのさ。

ふう〜と疲れた体を動かして風呂場に向かいます。

うう〜さむつ。

そろそろ寒くなる時期だしなあ。

といっても西涼は元々寒いところだけど。

着替えを置いて、素っ裸になる。

「うおー風呂だあー!」

「え?玉?」

時間が止まった。

え？え？え？え？え？え？

え？

え？え？

え？なんで？

え？え？え？

なんで翠いんの？

え？

ちょ、え？

「え？つていや、すいやつつつつつつつせんでしたあああああ
あああああ！！！」

「あ、ぎよ、玉！」

更衣室に避難しようとしたら翠に呼び止められたのでストップ。

え？もちろん翠とは反対方向に向いてるよ？

「そ、そのまま入れよ。せっかく脱いだのに、風邪引いちゃうだろう
っ」

「え？」

カポーン。

ということでお風呂入ってます。

翠がいますが。

いやあゝ広くてよかったねえ。

狭かったら、どうなっていたか……。

え？ 翠はどこにいるのって？

俺の隣ですが（爆）

翠の白い肌とか……タオルで隠される双丘とか。

うわっ、胸元やばいって。

「なあ玉……」

「どうしたんだい？」

「なんだよその喋り方……」

仕方ないだろう？

緊張しているんだからさ！

女の子とお風呂入ったの初めてだよ！

そんな機会なかったからね！

「まあいいや・・・その・・・玉・・・お前はさ・・・」

翠が歯切れ悪く離す。頬がわずかに紅潮している気がする。

「あたしのこと・・・どう思ってる？」

・・・おいおい。

翠ちゃんや、俺は何回言っただと思ってるんだ？

「俺の、大切に、大好きな、女の子さ」

「本当なのか・・・？玉は母上の方が・・・」

「何言っただ。俺に上とか下とかないさ。みんな大好きで愛している。その中で優秀なんてない」

「だって・・・玉、母上にその・・・く、口付けを・・・」

・・・ああ、あの時か。見られたのか。

というかよかった蒲公英じゃなくて。

「そんなこと言っただったら翠・・・」

「え？な、何——んっ！？」

翠を抱き寄せ、その唇を塞ぐ。

なんというか翠とのキスの味は・・・甘かった。

というか、やばいっす。下半身やばいっす。

抱き寄せてるから翠の胸が俺の胸板に押し付けられてるんだよな。

しかも翠自身も俺の背中に手を回してるし・・・あれ？これもっR
- 18に進むんじゃない？

翠が蕩けたような目で俺に吸い付いてくる。

「ぎょくう・・・ぎょくう・・・！」

ああ、もう限界やばいっす。

ああ、別に性的興奮で強くはならないけど。

ヒスるとかないけど・・・やばいこれ。

うわぁー風呂場とかもっ・・・。

翠の体は翡翠さんよりも小柄だった。

まるで雪のように白く、絹のようにすべすべな肌・・・。

出るとこはしっかりしているし・・・。

今の翠は・・・すっごく艶っぽい。

「そのーあのー翠や」

「んっ・・・なに・・・？」

「俺の理性がナクナリソウデス」

「・・・優しくしてくれよ」

アウト！アウト！バターアウトオ！

翠ちゃんの顔を紅潮させ蕩けきった目でそんなことを言われてしまった俺は・・・。

この時『だけ』武官になってしまったのであった。

十四戦目「問題児は頭を抱える」（後書き）

玉：

ヤッホー

みんな大好き鉄だょーん

あれ 星が取れない（笑）

というわけで、本当によかったよ。

翠ちゃんに嫌われたら俺自殺するところだったな。

あとは翡玉と蒲公英を攻略するだけだな

え？政治関連？

んー李カクの巫女好き野郎が長安で大暴れしているらしいよ。

巫女好き？

ああ、李カクが何か部下よりも巫女集めてお金だして神様の言葉を聞いてるらしいよ。

そういえば一刀君が巫女服用意してくれたなあ。

楽しみだ

じゃあ次回もよろしくー

十五戦目「問題児は攻める」(前書き)

短い、けど勘弁

十五戦目「問題児は攻める」

・・・性的な意味じゃないからね？

「ふっふん」

「・・・ご機嫌ですね玉様」

「え そうかな？」

「・・・はあ・・・」

大人の階段のーぼるゝ 幸せはここにあるんだゝ

というわけでチェリーボーイから抜け出した鉄です！・・・すでに数週間前に話しのだが。

なに？羨ましいだと？

はっ！

翠は可愛かったぞー！

もう・・・なんというか・・・。

「ぶっ！」

「鼻血ですか玉様！」

「ふがふが・・・あんがと・・・」

「もう、しっかりしてください！これから戦だというのに」

あ、そうそう。今から攻めます。

因みに勢力拡大じゃないからね？

まあ、要するのにな、長安に行くんだよ。

現在、天子様を擁するのは李カクと郭？なのだが、あまりにも酷い扱いらしく密書が来たのだ。

翡翠さんは「私も出る！」と言っていたのだがご遠慮頂いた。

・・・まあ、代わりに「一日だけ好きにしてもいい」という約束を
してしまっただけだが・・・。

率いるのは八万の西涼兵。

あとで確認したのだが、ローマから流れてきたローマ兵の子孫がいるらしく彼らは優秀な歩兵になってもらった。

五万の歩兵を用意した。

投げ槍を得意とするのだが、地上戦はものつそい強い。

試しに盗賊討伐に言ったのだが・・・被害無しで勝った。小規模と
はいえ。

投げ槍で串刺しにしたり弓だったり槍だったり・・・すごかったなあ。

それはおいといて、長安の二人が内紛を起こしたらしく天子様もわずかな臣下を連れて脱出するおつもりらしい。

すごいな献帝様。

そこで、漢の忠臣と公言している翡翠さんに白羽の矢が刺さったそうだ。

まあ、翡翠さんは体調不良のために翠が名代として西涼軍を率いることになる。

俺は補佐だな。

西涼軍の武将は碧玉と蒲公英。…仮として成公英、馬玩、程銀、張横、李堪を将としておく。

考えていると

「お、おう」

「姫、すでに出兵の準備は出来ております」

「わ、悪いな碧玉」

・・・俺と目を合わせるたびに顔を赤くする翠かーわいー！

ここ数週間はこの調子だ！ふはははははははは！

「じゃあ出発進行ー！」

「出発だー！」

ガチャガチャと武具の音を鳴らしながら進軍を開始する。

長安までは二週間くらいかかる。

…さて、やる、か。

目を凝らせば見えるのは長安の城壁。

安定を経由して進軍する馬超軍は長安の前に陣……というのには少々みすばらしいが十万の西涼兵が構えていた。

西涼兵といっても馬超軍とは違い、天水より西部の者や、ならず者、荒くれ者が集まった軍なのだが。

そして我らが馬超こと翠は六万の統制が取れた兵士達の戦闘を立ち、太陽の陽に当てられて彼女の愛槍である銀閃が輝く。

長安を占拠している十万の兵士達の前に立つのは李カクと郭？の二人。後ろには将であろう人物がたっていた。

……みたいな？

おっさんかよ。

我らが翠ちゃんの相手じゃねえ。

というかあの二人は中違いしたんじゃないんだっけ？

・・・あ、そつか。馬超軍が攻めてくることが分かったから、一回仲直りしたのか。

忘れてたな。

・・・ま、どうにかなるだろう。

「んじゃ、翠、手はずどおりに」

翠は単騎、馬を駆けて前に出る。

そして凜々しく槍を李カク・郭？軍に向けていった。

「逆賊共よ！この錦馬超が天子様より勅命を承^つつた！すでに天子様はご避難されている！大人しく降伏しろっ！」

おーかつこいいー翠ー。

二人が何か話し合っているのはきっと天子様が逃げた報告が来たからかな。

董承さんは上手くやったな。さすがだ。

すると何人かの将が用意を始めている。天子様の追跡部隊か？

すると、その中の一人のおっさんが単騎で馬を駆けてきた。

「貴様らこそが逆賊！天子様を誘拐するなど、天がお怒りになるだらう！この牛輔が天罰を下してやる！」

うわwww厨二病乙www

「おりゃあっ！」

「ぐあっ！」

・・・というか弱っ！

翠に腹を一突きにされて終わったよ？

「投げ槍ーっ！撃てーっ！」

翡玉が指示を出す。

すると先頭に立っていた歩兵・・・多くがローマ兵の子孫である。

彼らが槍を李カク・郭？軍に向けて投げ始めた。

うわぁ・・・。

弓矢よりも怖いな、あれ。矢の比じゃないよ。

あの恐ろしさに敵軍は瓦解し始めている。

そこに一万の騎兵と五万の歩兵を連れた翠と翡玉が突撃を始めてい

る。

え？俺は今安全な所に避難してますよ？

もう殲滅戦みたいになっているそこに駄目押しを。

「我こそは錦馬超が従妹馬岱なり〜！」

伏兵隊を担っていた蒲公英が二万の騎兵を連れて突撃させた。

もちろん指示は蒲公英だけにやらせていない。

程銀など部隊長格から出世した彼女らも参加している。

まだ蒲公英に二万の兵士は難しいからねえ。

つか、ローマ兵の子孫の方々強くないですか？

槍の使い方、西涼歩兵より上手なんですけど。

多分、歩兵戦で翠も囲まれたらひとたまりもないだろうな。

ところで李カク・郭？軍は急いで兵士を纏め始めている。長安に戻って籠城するのか？。

間に合わないなあ。

とりあえず天子様が逃げる時間を稼げるか？

・・・いや、洛陽まで勢力を広げるために天子様をお迎えしなければ

ばならないな。

籠城。

・・・そう思っていた頃が私にもありました。

なんという予想外。

長安ごと捨てて、天子様を優先したのか、撤退と同時に追撃に回った。

十万いる兵士の内、ほとんどが騎兵だ。

・・・まずいな、進軍速度が速い。

今回は馬超軍は三万しか騎兵を連れてきていない。

幸い大軍なために、天子様五日ぐらいかかって追いついてしまうだろう。

長安から洛陽への距離は歩くとなると・・・一週間は軽にかかるな。

だから、今頃天子様が洛陽に到着するにはまだ一週間以上かかるだろう。

「玉様！いかかがなさりますか！」

・・・まずは、現状を維持しよう。

「翡玉は兵をまとめてくれ！伝令！馬超と馬岱、各將軍に兵士を纏めて長安に駐留することを伝えよ！」

『御意！』

今更追撃をかけても、歩兵しか討ち取れないんじゃ意味がない。

・・・とりあえず一旦兵士を纏めて、翠と三万の騎兵を連れて強行軍で追撃するか。

天子様に追いつかれる前に追いつかないといけない。

・・・もし何かあったら首が跳ぶからな。

さて、幸い輜重隊は夕方には来る予定だ。

歩兵を使ってあの二人によって荒廃した長安を建て直さないと。

民達に炊き出しは出来る。

よし。方針は決まったことだし、実行せねばな！

十五戦目「問題児は攻める」(後書き)

うん、忙しい。

暑いですよねえ。

鉄ちゃん書いていて思ったのですが

「終盤色気無い…」

十六戦目「問題児は先を越される」(前書き)

物語は収束へ

玉は終わらないよ！

十六戦目「問題児は先を越される」

天子様を先に保護されるとあの二人は確実に勅命を出させて俺達を逆賊に仕立てあげるに違いない。

そして今、三万の騎兵を率いて急行軍で翠と共に追い掛けている。

交戦はする可能性が高いが、あちらは強行軍で進軍しているらしく、道端には彼らの兵だろう死体が落ちている。

疲れや傷、上官により死んだのだろう。

「全くエグいもんだな…」

なんとも言えない臭気を鼻に吸い込み、顔をしかめる。

兵に命じて、死体を溝に入れさせると、あら不思議。死体の道が出来てしまった。

…うれしくない。

この死体の量だと交戦時は十万から八万以下になっているだろう。

いや、もっと少ないはずだ。

目測だが、奴らの歩兵は殆ど出遅れている。

予想だと、奴らは騎兵しかないはずだ。

だが、その馬も強行軍のために乗り潰してしまっただろう。

「玉！あと、どんぐらいだ！？」

「多分：二日だな。休憩も入れなければならぬから実質的に三日になる」

「わかった。皆！陛下をお救いするんだ！西涼魂を見せる！」

『応っ！』

兵士達も翠も馬も息が荒くなっている。

確か北に少し行けば洛水があつたはずだ。

その引流があつたはず。

半日かけて水場を発見し、休憩する。

それぞれ「はあ〜」と息を吐きながら寝転がり、携帯食料にしている糲ほしいをポリポリと食う。

腹の足しにもならないが、何も食べないよりはマシなのだよ。

ポリポリポリ

味、しない。

馬達は水を飲み、草を食う。

おお、翠は一気に食べてしまったようだ。

我慢してくれ翠。

あとで腹いっぱい食わせてあげるから。

一刻ほど休憩。

すぐに出発する。

帰ったら翡玉や蒲公英を堪能するんだ。俺。

ひたすら急行軍で李カク・郭？軍を追う。

進めば進むほど、死んでいる兵士を見かける。

歩兵が多数騎兵もちらほら。

確実にあの二人は兵士を減らしている。

そして――

「伝令！前方二十里ほどに軍勢を発見！李カク・郭？軍かと！」

「ご苦労！翠！！」

的軍を見つけた伝令が入ったことに兵士や翠の顔に生気が戻っている。
く。

おお、今までの鬱憤を晴らすつもりだ。

ああもっ。

頭を抱えなくなった。

・・・はあ、やられた。

まさか孟徳殿にも勅命を送っていたとは・・・いや、当たり前か？
ちくせう。

あの様子だとすでに陛下は保護したに違いないな。

最初から瓦解しかけている李力ク・郭？軍に後ろから翠率いる三万の騎兵がぶつかる。

あちゃー一方的だな。

休憩もなく、メシも与えられなかった兵士はまるでゾンビのように虚ろで一方的にやられている。

急行軍の疲れなどで鬱憤を晴らす西涼兵が槍で貫き、突き、斬り、殴りとそれはそれは凄まじい。

鬼のような西涼兵に蹂躪される後方軍。

前方はというと・・・

【夏侯】の旗・・・元議殿だな。

正面から騎兵を当たらせ、彼女は一瞬で李力クの首を取った。

こええ。

【張】の旗は張遼かな、郭？消し飛んだよ。

前方は曹操軍によって蹂躪されてます。

怖っ。

あの【許】と【典】の旗は・・・ああ、虎痴と悪来か。

怖っ。地面削れてるし！？

何あれ。マジこええ。

決ってるな。うわあ、逆にもう李力ク・・・あ、もういないんだっけ。

賊軍が可哀想だよ。

あ、降伏始めた。まあ、打倒なんだろうけど・・・。

はあ・・・やられたよ。孟徳殿に。

「孟徳殿。此度は陛下をお救いしてありがとうございます」

「気にすることがないわ。貴方達の級行軍からの挟撃が無かったら私達も被害を受けたかもしれないし」

被害はほとんど無いと言っても過言じゃないくせに。

・・・というわけで、使者として翠ちゃんの変わりに挨拶に来てます。

うん、洛陽に向かう前の野営なんだけどね。

「これで、貸しは返したわよ？」

「ええ、確かに返していただきました」

ちくせう。

「そういえば洛陽が荒廃してしまって・・・とても陛下が寝泊りできる状況じゃないの。だから許昌に一度都を移させていただくことになったわ。陛下もそれを望んでいる」

「そうですか孟徳殿。確かに・・・漢の都の長安と洛陽はどちらも荒廃してしまっていますしね。ただいま翠・・・馬超臣下の？徳を中心に各将と復興作業をさせています。陛下がお望みなら仕方がありませんし」

まあ、孟徳殿のことだ。陛下とO H A N A S H Iしたのだから。

穏やかな口調で話しているけど。腸が煮えたっています。

「さすが【西涼賢者】仕事が早いわね」

「まあ、それがとりえですから。あ、長安は我々がやりますので、洛陽はそちらでやっていただいけませんか？」

「ええ、受けましょう」

孟徳殿もお気づきだろうな。うん、はっきり言えば押し付けだけど。

その後、陛下の謁見を終え、西涼の首都武威に向かって帰還する。

はあ・・・結局手に入ったのは名声だけか・・・。

まあ、長安を占領できたし、良しとする。

あと、俺は孟徳殿に言ってやったよ。

「戦場でお会いしましょう」

「ええ、楽しみにしているわ」

俺自体はあんまり戦争に乗り気じゃあないが、孟徳殿のことだ。西涼を攻めてくるのは火を見るより確かだ。

いつそ降伏するのもありかもしれないが・・・孟徳殿は女好きだからなあ・・・。

それもあるが、西涼の兵士が納得しないはずだし。

まあ、もう種まきは始めている。

目を開くのはまだ先だけだね。

工作も準備してある。

もうちょい先かもしれないけど、そう遠くない。

「俺が、皆を支える」

西涼の将星は大きく輝いている。

一つだけ・・・消えかかっているのもあるけど・・・。

速く帰ろう。

西涼^{かぞく}の元に。

十六戦目「問題児は先を越される」(後書き)

玉：

ヤッホー

孟徳殿に出し抜かれた鉄だよー。

頑張って強行軍で行ったのに…

まあ、いいや。

さて、次回はうう……

ぐす、ひぐ、うう……

もう嫌だよお……。

十七戦目「問題児は泣く」(前書き)

久々の更新。

感動ものではないけど・・・。

やっぱり血の繋がりはなくても、自分が好きで愛していいもので、お世話になった人が亡くなったら辛いですね。

十七戦目「問題児は泣く」

玄徳が徐州から追い出されたらしい。

・・・どうでもいいのだが。

「母上え！嫌だ！死んじゃ嫌だ！」

「そつだよ叔母様！諦めないでよ！」

「翡翠様！気持ちを確かに」

俺の前にはすっかりやせ細ってしまった翡翠さんのベッドに縋りつくように涙ながら言っている。

・・・もう・・・翡翠さんは・・・

「ふふっ・・・これも天命・・・仕方が無いことよ・・・」

翡翠さんの顔はすでに陶器のように白い。

元々白かった肌は病的に白くなっている。

呼吸も、とてもゆっくりだ。

俺は、翡翠さんに縋りつく三人娘の後ろで、ただ、無言で見ていた。

「私だって、人間なもの。病気にもなるわ。・・・確かに武人としては戦場で死にたかったかもしれないけど、これはこれでいいわ」

「そんな弱気なこと言わないでよ！」

「翠。私は嬉しいわ。こうやって家族に看取られて死ねるのだから」

「やだよ！死なないで！蒲公英もうイタズラしないからさ！」

「蒲公英。馬家の一人として、翠を支えてあげてね。それから、少しは碧玉を見習いなさい」

「翡翠様・・・私にとって貴女は、恩人でもあり、師でもあり、母でもありました・・・。貴女を失えば私はどうすれば・・・」

「強く生きなさい。武人としても一人の女の子としても。みんな、まだ若いのよ」

翡翠さんは目で三人娘を見ながら語る。

動きは、弱弱い。

「玉・・・いえ、馬鉄」

「ここに」

「貴方には、本当にお世話になったわ。私がこうして家族といわれるのも貴方のおかげ」

「ありがたきお言葉・・・です」

「それから玉。貴方に字を与えて無かったわね・・・そうね、【仲

【誠】と名乗りなさい。馬仲誠

「はい・・・翡翠さん・・・ありがとうございます」

「それから玉・・・ここに」

「はい？」

俺は翡翠さんに腕を引っ張られて顔を近づける。

「翠と蒲公英、翡玉をよろしく頼むわよ。身も心も」

「もちろんです」

「あと・・・」

「へ?」――むぎゅっ

「な、ななななな」

「お、叔母様っ!？」

「ひ、ひ、ひ、ひ、ひひひ、ひ」

塞がれる俺の口。

…あの時の温かみがあっただけど今回は冷たい感じがした。

俺はただ流れに任せて、それを受け入れる。

三人の驚く視線を受けながらも、唇――舌が浸入してくる。

永遠とも感じるたった短い時間。

…幸せだった。

「ふふっありがとう玉。これで心置きなく逝けるわ…」

「……」

「また、貴方と会いたい…」

「ひ、すいさん…」

「翠、蒲公英、碧玉、玉。おやすみなさい」

「ははうえ…」

「やだよお…」

「びずいさまあ…」

「……」

翡翠さんはまるで眠るように亡くなった。

俺以外の三人の泣き声が響く。

…俺は、何も言えなかった。

翡翠さんが亡くなって一ヶ月が経った。

情勢が変わり始めた。

孟徳が西涼に宣戦布告したのだ。

翠も蒲公英も碧玉も、翡翠さんが治めていた土地を奪われたくないと徹底抗戦するつもりだ。

無論俺もだ。

思えば翠の勢力は西涼から長安、南には漢中北部まで伸びてきていた。

「はあ……」

【漢忠臣馬騰之墓】

そう彫られた墓石の前に俺は溜息をついていた。

ここは翡翠さんとキスをした丘だ。

「はあ……」

もう何回目か分からない溜息をつく。

正直、勝てる策が見つからない。

将の質でも数でも負けてるのだ。

兵士なら質も数も騎兵なら勝てる。

しかし、総合的に考えれば兵士は負けてしまっている。

…異民族の支援を受ければどうか…。

「翡翠さん。…この土地に居続けることは難しそうです。だから、せめて翠や蒲公英、翡翠だけは…」

「盟主」

後ろを見れば西涼兵が被る防寒用の動物の毛皮で作った兜というより防止が目に入った。

それが幾人も。

「張横か。…程銀に馬玩、成公英、李甚…」

それは西涼の将でもあり俺の部下でもある將軍。そして西涼娘同盟の会員。

「我らは」

「盟主のためなら」

「たとえ」

「火の中」

「水の中」

「空の上」

「山すら動かします!」

「だから」

「何なりと」

「ご命令ください!」

「我々は」

「馬超様、馬岱様、?徳様のため」

「全身全霊を懸けて」

「西涼娘連合の一員として」

『行動しますっ!』

「みんな…」

やばい…うるって来る。

部下に慕われて…こんなに嬉しいことはない…!

「俺は命を懸けて、曹操と戦う。だから…」

俺は一拍おいて言った。

「皆の命。俺にくれ」

『御意っ！何なりとお申しつけください！』

本当に錬度が高いものだ。

一心同体と言わんばかりの声。

俺は微笑んだ。

S a i d 曹操

私が孫策という英雄に戦う前に一つの不安要素があった。

そう、西涼だ。

劉備を徐州から追い出したことで楊州への足掛かりも増えた。

だから孫策を倒して楊州を手に入れ、荊州を落とす、態勢を整った劉備の蜀になるであろう益州を制圧する。

けれどその計画の前には根本的な問題があったのよねえ…。

馬超率いる涼州…いえ、西涼連合なのよ。

馬鉄のことだ。

私が南下している間に司州を落とし、そのまま河北を手に入れようとするに違いない。

だから憂いを取り除く必要がある。

孫策の前に決戦する必要があつたために私は宣戦布告をしたのだけ
れど…

「まさか近隣の異民族と連合組むとはねえ…」

馬鉄の策略だろう。

元々異民族に人気がある馬騰だったのだ。馬超も馬鉄も人気がある。

西涼軍は三十万にまで膨れ上がった。

まだ増えるらしいけど…。

「華琳様…いかがなさいました？」

のんびりとした声で書簡を抱えた風がやって来る。

「ああ…風…」

「むむっ？その様子だと華琳様は西涼…じゃなくて馬鉄さんのこと
で悩んでいますね？」

「ええ、そうよ。何か策はあるかしら？」

「…ぐう」

「風、今寝たら、夜寝かせないわよ？」

「…おお！馬鉄さんの強さを考えてたら寝てしまいました」

「で、策は？」

「そうですね。西涼連合は最大四十万まで増えると思います。今は三十万ですね。馬超さんは十万、馬鉄さんは現時点で二十万率にいてると思うてください」

「ええ、私達は十五万しか出せないわよ」

「今回の策は謀略というべきですが、ちょっと耳を貸してください」

「いいわよ」

「……と……でするんです」

「さすが私の軍師ね」

「いえいえ、凛ちゃんとも後で話し合ってみます」

さすが私の軍師。

将の数では私達の方が優れてる。

兵の数では負けてるかもしれないけど…。

さて、私もさっさと済ませて遠征準備しなきゃ！

ふふふ…馬鉄に馬超はどこまで私を楽しませてくれるのかしら。

十七戦目「問題児は泣く」（後書き）

勝ち目無い戦いだから、期待できない。

そんな感想を貰いましたが、まあ、仕方ないでしょう。

勝つ負けるは読者のみなさんが楽しみにしていてください。

この作品の次回作の布石になりますからね、この作品は。

だから、最後まで馬鉄君を暖かい目で見てやってください。

十八戦目「問題児は仕掛けられる」(前書き)

質が悪いけど・・・次回作でどうにかする！

十八戦目「問題児は仕掛けられる」

ヤッホー馬鉄だよー。

ん？今何してるって？

「俺、何してるんだろう…」

「あら、どうかしたのかしら馬鉄？」

うん、前には乗馬する孟徳殿。

後ろには数人の護衛だろう兵士。

俺の後ろにも護衛として連れて来た兵士。

何で俺、孟徳殿とお話してるんだ？

思えばさあ…

「孟徳殿から書簡？」

「は、はい…来ていますが…」

「後で読むよ」

「ええ！？いいんですか！？」

「そりゃあさあ……」

ぎゅう

うん、翡翠とイチヤイチヤ。

「はう……」

翠や蒲公英もこうして抱きしめて、自分自身の士気を上げるためだ。

恥ずかしがるくせに、意外と嫌がらないんだよね。

まあ、俺としても嬉しいんだけどね！

鍛練後の彼女らが狙い時だ。

変態？はっ俺は紳士へんたいですけどね。

まあ、隠れてムツツリ言われるより、堂々とするのが一番だ。

「どれどれ？」

翡翠さんが亡くなってからは一時的に無政府状態になってしまい、かなりの政務が溜まっていた。

だけど、どこかで翡翠さんに殴られた感じがしてさ……。

翠も蒲公英も碧玉も同じようなことがあったらしい。

…それからは反省して、頑張ったよ俺。

今では内政も軍事は安定している。

孟徳殿が宣戦布告してからは親しい異民族にお願いして、翠を長と
した西涼連合を作った。

兵数は元より錬度もそこそこ。

蜀や呉に書簡を送って魏を牽制してもらっている。

だから兵や将を裂かせてもらったよ。

兵を分断させるのは基本だよねえ。

ただ、こちらにも懸念がある。

「兵は多いんだけど、将が足りないんだよなあ」

「確かにそうですね。…臨時で増やしますか？」

「んー、翠や碧玉は万単位で動かせる蒲公英は千単位で動かせる。
程銀達は…ギリギリ千かなあ」

最悪、将を纏めて兵士を統率するしかないなあ。

はあ…。

孟徳が羨ましいよ。

人材に関してはね。

「次に攻める道なんだけど…」

「ひゃあっ！」

翡玉の柔らかいお尻にタッチして、机の上の地図を取る俺。

え？セクハラ？

違うよ？スキンシップだ。

「この地図を見て俺の太ももの皮がちぎれるううううう！！」

「……ふんっ」

うう…。

いくらセクハラしたからって太ももを抓ることないじゃないか。

皮がちぎれかけたよ…。

「気を取り直して、地図見て」

「…こついつのは軍議でやるべきでは？」

「まあ、そうなんだけどさ。前もって翡玉に教えておいた方が後々楽だから」

翠に今言っても仕方ないしね。」

「まず、今回、孟徳殿の本拠地は二カ所から攻められます。一つは洛陽經由。関がいくつかあるけど、真つすぐだし、制圧しながら進める」

正直、こっちがオススメかなあ。

「もう一つが南下して、荊州北部を通る道。こっちは行軍が大変だけど、戦は少ないと思う」

ある意味遠回りで、補給路がきつくなるけど野原が主になるから騎兵の力を出しやすいんだよ。

一長一短かなあ。

「どっちがいいかな？」

「うーん、私の意見だと長安から洛陽の道がいいと思います」

「やっぱり？俺もそう思ってる」

短期決戦。

今回はこれが重要だ。

兵数では圧倒的に勝っていても、残念ながら西涼にはそれを維持できるとは食料はない。

「とりあえず食料は辺り一帯を買い占めるか……」

「あの、木牛？ 流馬でしたっけ？ あれも今回使うんですか？」

「もちのロン。あれ使えば輸送部隊の人員も多少減らして、護衛や迎撃部隊に回せる」

俺はさらさらと、適当な竹管にメモして、とうとう魏からの書簡を手にする。

……あらあら

「何て書いてあるのですか？」

「要約すると【戦始まったら話せないし、少し世間話しない？】って感じ？」

「わ、畏に決まっています！」

「ですよー」。

俺もそう思っけど、孟徳殿がそんな卑怯なことするはずはない。

さすがに呼び出して殺すはないだろう。

……つか本音が分からんな。

何を考えているんだ孟徳殿は。

戦前に世間話をしよう？

意味が分からん。

何か策があるんだろうけど……。

「……まあ、行ってもいいか。腹の中を探って来ればいいし」

「な、なら私を護衛に」

「いや、程銀と張横と兵士数人護衛に連れていく。翡翠は兵士の調練とかやって欲しいことがある」

なんせ兵数が多いからね。少しでも錬度を上げておいてほしいのだよ。

「とりあえず簡単に軍議終わらせたくするかなあ」

うん、俺の意思で来たわけで。

「久しぶりね馬鉄」

「どもです孟徳殿、ちなみに自分は仲誠という字がありまして」

「なら仲誠とよばせてもらうわ」

「ええ、そうしてもらえれば。それで何の御用ですか？」

「いえ、これから戦が始まるじゃない？ だからその前に貴方と話そうと思っただけよ」

「ふーん、それだけで？ もしかしたら自分が貴女の首を取るように策を用いるかもしれせんよ」

だって元讓殿も、あのでっかい鉄球持ったちっちゃい子もいないんだもん。

「貴方がそんなことしないくらいわかるわ」

「そう言ってもらえれば幸いです。で、それだけですか？」

「そうね、ならば降伏勧告ぐらい出しておきましょう」

「お断りします」

「なぜ？ これでも私は貴方達西涼軍を評価しているのよ？」

「お分かりだと思いますが、軍師としての自分は納得しますが、西涼男児としては否定しますから。それに、上が納得しても下は納得しませんしね」

「そう・・・、なら楽しみにしているわ」

それからというものの、本当に世間話だ。

元讓將軍が暴走したとか、袁紹との戦いはこーだったとか。

過去の話とかもしてましたしねえ。

「はい、戦場で会いましょう」

「ええ」

なんだかんだで会談は終わった。

なにがしたかったのだろうか。

孟徳殿の腹のうかが分からないまま俺は武威に帰るのであった。

十八戦目「問題児は仕掛けられる」(後書き)

玉君がいることで変わってしまった順序。
完結は近いです。

十九戦目「問題児は戦う」(前書き)

久々で申し訳ない。

最終回までかんばるつもりなので応援よろしくお願いします！

十九戦目「問題児は戦う」

西涼軍は一気に近隣の友好異民族や関中などの友好豪族による支援によって兵力を増やし、二十万へと兵力を伸ばしていった。

西涼連合軍と化した軍を率いるのは馬孟起。

それを補佐するのはこの俺、馬鉄こと馬仲誠だ。

兵力は確かに多い。

戦うことになる曹操軍よりも何倍も多い。

しかし、欠点は全体の錬度だ。

翡翠や翠といった強力な武将が調練をしたが、間に合っていないのだ。

せいぜい初期に率いていた兵士がもっとも優れているため、全体の錬度としては五分五分だ。

今、俺達が目指しているのは洛陽だ。しかし、その前には立ち塞がる関がある。

潼関だ。さらに守将は曹洪という孟徳殿の従妹なのだ。

戦においては昔から孟徳殿に頼られるほどの名将だ。

だが、彼女は武一辺倒の武将なのだ。

あえていうなら華雄將軍。

猪。

猪突猛進。

うん、そんな感じ。

孟徳殿も将としての自覚を持って欲しかったんだろうね。

だけど、そりゃあ間違いだ。

甘く見るなよ。西涼魂見せちよる。

side 曹洪

『出て来いよー！』

『曹洪あんた名将なら出て来い』

『そんなんだからチビって言われるんだよ』

ぴくっ

『胸無いもんな』

「殺してやらあああああああー！」

「曹洪様ああああああ！！落ち着いてくださいいいいい！！」

「ええいつ！放せつ！牛金！今からあの男共を皆殺しにしてやらあ
！」

「丞相からは潼関を守るように言われたじゃないですかっ！」

「攻撃は最大の防御なんだよおおお！！」

「援軍の伝令は出しましたから！落ち着いてくださあああああ
い！」

「しばらくお待ちください」

・・・ゴホン。

うん、今日も疲れたよ。

西涼軍が来てからずっと挑発して来ている。

やることは分かってるのよ。

関に立て籠もる相手を引きずり出して殲滅。

基本でしょ。あたしだってそんぐらい知ってるもの。

だけどね。あたしは戦場に出たい！だって武人だから！

華琳様は何考えてるわけ！？

こういうのは子考姉さんの方が得意に決まってるわ！

なんで荊州方面の守備に回すの！？

「来る日も来る日も挑発・・・」

西涼軍は数が多いから、こうやって関に立て籠もってれば勝手に自爆するけど・・・

『胸無し』

「よし！殺す！」

「落ち着いてください！」

「牛金！あたしはそういう武人なのだ！諦めろ！」

「自分で何言ってるんですか！？・・・はあ、分かりました」

ん？いいのかな？

「私が手勢を率いて人当てしに行きます。見返してやりますよ！」

「うー・・・。あたしが行きたいのだが・・・」

「部下なんですから、上司が馬鹿にされるのは許せません！」

「・・・うむ、分かった。精鋭の手勢を選んで五百を連れて行け！あの西涼の奴らに魏軍の強さを見せ付けてやれ！」

「御意っ！」

戦抱ひたたれを翻して、彼女は出撃をする。

本当はあたしが行きたいが仮にも守将なのだ。しっかりしないと。

あたしは関の上から牛金の戦いを観戦する。

もちろん、何かあった時のためにすぐに部隊を出撃する用意はしてあるぞ！

お、一騎打ちが始まった。

うーむ。

やっぱり西涼軍は数が多いな。

無論、精兵を連れた手勢五百はどんどん西涼軍の弱歩兵を殺している。

牛金の相手はあの名高い？徳か。

中々の使い手のようだ。

・・・む？

何か妙だな。兵の動きがおかしい気がする。

後方に控える馬の旗は馬超と、馬鉄か。

もつと兵士居れば本陣に突撃して、奴らの首を取ってやるのだが。

牛金を見た私だったが、あることに気が着いた。

「あのバカ！ 包囲されてるの気が着かなかったのか！」

あたしは愛用の槍を手にし、関から出るために下に降りた。

「なりません將軍！」

出撃をしようとするあたしに部下の一人が止めた。

「・・・なぜだ」

「これでは奴らの思う壺だからです！」

「だからといって牛金を見捨てるというのか！？」

「やむを得ません・・・」

「ええい！黙れ！あたしは行くぞ！」

「しょ、將軍！」

あたしは馬に乗り込み、兵に関を開けさせた。

「これより牛金將軍を救出する！あたしに続けえー！」

『おおおおおおおおおおおー！』

「うおりやあああああ！」

あたしは一気に駆けて、牛金を囲む西涼兵を薙ぎ払う。

「ぎゅーきーん！」

「しょ、將軍！」

「来ましたか……」

？徳がなんか言ってるけど、無視。

あたしは牛金との間に入るように槍を振るった。

「將軍なぜ来たのですか！？」

「お前、普段冷静沈着みたいに気取ってるけど熱くなつてると周りが見えていないんだよ！ 周りを見る！」

やっぱり包囲されてやがる……。

まずいな。このままだとあたし達は捕縛されちまう。

・・・撤退しかないか？

くそつ。潼関を守るように言われているのに……。

「はああああああ！」

「ちい！」

？徳は強い。春蘭ぐらいあるだろう。

兵の数では圧倒的にあっちが勝っている。今、あたし達が関に逃げ込んでも追いつかれるだろう。

「牛金！ 撤退する！」

「ぎよ、御意！」

「退けーっ！ 退けーっ！」

率いてきた兵士達に撤退を促し、あたしは？徳を捌きながら撤退させていく。

そして頃合いを見てあたしも馬を駆けて撤退を始める。

西涼軍の追撃が襲い掛かってくる。

追撃が止んだところに残っていたのはわずかな手勢・・・しかもみんな怪我をしている。

「くそっ！ くそーっ！ 西涼軍覚えてやがれ！ 絶対にあたしが倒してやるからなーっ！」

西涼軍がいる方向へあたしは叫んだ。

絶対に・・・次は勝ってやる！

s i d e o u t

碧玉の活躍によって潼関を制圧。

翠を制圧部隊として派遣して、内部の魏兵は捕縛し装備などを剥いで僅かな食料をあげて逃がした。

魏軍の鎧は使わせてもらうよ。

蒲公英や程銀達を追撃部隊として用意していたために曹洪率いる魏軍を削ることも成功した。

「碧玉。お疲れ様」

「いえ、これも玉様が考えた策のおかげですから」

陣を引き終わり、天幕に返ってきた碧玉に労わりの言葉をかける。

「ぎよ、玉様・・・」

思わず抱き締めてしまう。

「無事に帰ってきてよかったよ」

「玉様・・・」

おおっ。

やばいぞ、これ。

俺の理性が跳んでしますぞ。跳ねるぞ！

・・・と言いたいけど。

「ゴメン。もうちょっといちゃいちゃしたいけど、策考えなきゃ」

「そうですか・・・」

残念そうにする翡翠。シュンって感じだよ。

「この戦いが終わったらいちゃいちゃしようね！」

「ぎょ、玉様!?!」

翡翠の驚いた声を耳にしながら天幕から出る俺。

・・・自分で言うのもあれだけど、死亡フラグ立てちゃったよ・・・。

まあ、とりあえず次の策を考えないとな。

十九戦目「問題児は戦う」（後書き）

今、完結まで書いてあります。

今年には完結予定。

鉄ちゃんの次回作も製作中です。

・・・その前に、近代戦争を入れようと思ってますけどね。

曹洪ちゃんは及川の作品で使いまわされる予定です。

二十戦目「問題児は追い詰める」(前書き)

終わりは近い。

二十戦目「問題児は追い詰める」

布陣を整えた西涼軍は再び進撃を開始した。

その最中に西涼軍を支持する豪族や異民族が支援。その数をさらに十万を増やした。

渭水に向かう途中、魏軍を率いる曹操が現れたのだった。

「こうやって見ると壮大なもんだ。軍は」

「何を言っていらっしゃるのですか玉様」

・・・うん、もうすぐ舌戦っていう雰囲気なんだけど、翠はそんなことをするつもりはないだろうね。

夏侯惇と戦いたいと言っていたなあ。

「馬超よ！ 馬騰の地を荒らしたくなければ何故私に降らぬ！」

「うるさい！ 逆賊曹操！ ここは我が母上、馬騰の地！ 貴様のような逆賊が来ていい場所ではない！ 中原に帰れ！」

おおっ。

翠ちゃんかつこいい！

「とりあえず盲夏侯！ 出て来い！」

「も、盲夏候だと！？ 貴様・・・私をそのような名で呼ぶのか！」

おいおいおいおいおい。

戦う気満々じゃないか。

孟徳殿も鼻で笑っているし。

「いいわ。春蘭。貴女のその武を見せてあげなさい」

「お任せを！ 華琳様！」

「行くぞーっ！」

両者一気に駆けてのように打ち合いが始まった。

俺はすぐに指示を出せるように各部隊長に注目させてある。

だって俺軍師だもん。勝てる策を、仕事をしないとねえ。

配置は前方に槍兵や剣兵といった歩兵を置いてある。騎兵、弓兵とね。

ただ、弓兵と騎兵は矢と馬の数が全く揃わなかった。

異民族を中心とした騎馬弓兵も用意してある。

「せりゃー！」

「うおーっ！」

両者入り乱れ、槍や剣を振るっている。

・・・早すぎて俺には見えないよ。

とりあえず剣戟の音が鳴るのは分かるんだけど。

さて。

そろそろだ。

今回翠には我慢してもらうことがある。

強者と勝つまで戦い続けることである。

猪の彼女だけど、どうにかなるはずだ。

武人の前に將軍なのだから。

「また今度な夏侯惇！」

「馬超！ 逃げる気か！」

翠が馬首を返してこちらに戻ってくる。

「突撃ーっ！」

『おおおおおおおおおおおお！！』

俺の号令に続いて、槍兵が投げ槍を始める。剣兵が走る。

数では圧倒的に勝っているのだ。まるで波が魏軍を襲うように見える。

「待てーっ！ 曹操ーっ！」

翠が単騎で逃げる孟徳殿を追いかけるのが見えた。

程銀達に指示系統を任せて、親衛隊を連れて俺も翠を追いかける。

翡玉は夏侯淵の部隊とぶつかっている。

「赤い戦抱ひたたれを着ているのが曹操だーっ！」

翠がそう言つと西涼兵の視線が単騎で逃げる孟徳殿に向いた。

「死ねえ！」

「させるかあ！」

「ぐああ！」

戦場ならではの声が響く。

地面を見れば魏軍の兵士の数が多く見られた。投げ槍はかなりの損害を与えたようだ。

戦場を見渡せば蒲公英は曹仁であろう部隊とぶつかっている。

補佐しているのは成宜か。

曹仁は名将として有名なため蒲公英には荷が重いかもれないが、そこは数の暴力でなんとか持ちこたえている。

どうにか孟徳殿を討ち取れば・・・！

「曹操は髪を巻いた奴だーっ！」

翠がまたそんなことを叫んだ。

うつむ。まだ討ち取れないか。

【徐】の字は・・・徐晃か。出てきたか。

翠の主力騎兵と衝突した。

・・・うつむ。あれは殿しんがりなのだろう。

魏軍の動きを見ると徐所に下がっているように見える。

「楊秋、成公英、張横！ 部隊を率いて追撃しろ！」

『御意っ！』

「程銀は部隊を率い、馬超の援護を！」

「御意」

「残った者は兵士を纏めろ！ 布陣を一度整える！」

『御意!』

そして、俺は伝令で蒲公英と碧玉を呼び戻し軍を合流させた。

やがて程銀の奇襲を受けた徐晃部隊はもともと翠の部隊と打ち合い、疲労していたので壊滅した。

徐晃を捕らえられなかったが残念だが、これで魏軍の兵力を減らしたのは大きい。

こちらも被害は大きいが、元々多かった兵力だ。

気にするほどではない。

西涼軍を支持する豪族や異民族は兵力をどんどん送ってくる。

それも、維持さえ大変なほどに。

なんとか協力関係にあった商人に華南の、荊州の余剰食料を買い入れているとはいえかなぎりぎりだ。

というか、それが無かったら確実に飢えていただろう。多くの兵士が。

それに、寒くなっている。西涼兵は寒さには強いが、寒いものはやはり寒い。

凍死する者がちらほら報告に来ている。

「・・・防寒用の羊毛はどうなっている?」

「はつ。兵糧として使っている羊肉と共に羊毛を刈り取っています
が、足りません。現在では親衛隊や一部の精鋭、部隊長など限られ
た者しか着用していません」

部下の李甚がそう報告してくる。

やはり羊毛だけでは足りないか・・・。

分かっていたが無理だ、無理なのだ。

「最悪、玉砕か・・・」

古来より戦いは数に任せて正面から突撃するのが勝利すると決まっ
ているのだ。

兵数では圧倒的に勝っているわけだ。

「申し上げます！」

陣営を回っていると侯選が現れてた。

「張横將軍率いる追撃部隊が曹洪による奇襲で壊滅しました！」

「曹洪將軍、か。大方、汚名返上だったのだろう。・・・分かった。
それに関しては仕方がない。早急に帰還せよと伝令を送ってくれ」

「御意！」

去った侯選を見送り、俺は空を見上げる。

陽が出ているというのに肌寒い。

兵達も寒いのか焚火に集まっている。

（短期決戦が勝負だ。将の質では劣っているが数では勝っている）

俺は次の策を考えるために天幕に戻るのだった。

二十戦目「問題児は追い詰める」(後書き)

遠まわしに兵士の補充を断っているのにどんどん送ってくる西涼派の豪族。

というか、遠まわしすぎてわかってくれないのだ。

率直にこだわれば敵に内通される可能性が高くなるし……。

豪族の不服を得るのは不利だ。

二十一戦目「問題児は押される」(前書き)

勝敗は戦の常

二十一戦目「問題児は押される」

西涼軍はさらに進撃を始める。向かうのは渭水。かつての周が興ったと言われる土地だ。

魏軍はその付近に駐屯。ここを防げなければ洛陽を攻められてしまうからである。

「なんとか魏軍は減らせているな・・・」

この辺の土地は砂なので、陣営を作っても簡単に崩れやすい。

堀なども用意したいだろうが、無理だろう。崩れるし。

付近の木材はすでに西涼軍は伐採し陣営のために使ってしまったている。

陣営を中々作れない魏軍は日々西涼軍によって崩されてその兵数を徐所に減らしているのだ。

西涼軍快進撃！

・・・なんて言いたいけど、その実態には裏がある。

「おい。こっちも居るぞ」

「わかったから。・・・全く、こんなに死体があるなんてキリがない」

「今回も凍死か」

「仕方ないだろ？ 仲間がいっぱいいるからな」

そんな兵士達の声が聞こえてくる。

そうだ。凍死者が増えているのだ。

いかに寒さに慣れている西涼兵だが、マトモに腹いっぱい食べられず、不十分な衛生環境に、装備。

そういうのも仕方ない。

鼻に来るのは死体を焼いて漂う死臭。

薪の代わりに暖をとっているのだ。

「あ、玉」

「・・・おお、翠か」

陣営を視察していると、翠と出会った。

鍛錬でもしていたのか、その額には汗が光っている。

「翠か、じゃねえよ。どうしたんだ？ 辛気臭い顔して」

「そんな顔してたかあ」

「うん、してた」

「きつと翠分が足りないんだよな」

「……馬鹿野郎」

「照れるなつて」

「照れてねえよ！」

「……あーあ。なんかこうやって翠と笑いあうのも久しぶりだなあ。」

「……さて、翠。明日、大規模に軍を動かす。相手はまともに陣営が作れないんだ。砂なんだから簡単に崩せる」

「わかった。あたしに任せてくれ。絶対に曹操を倒してやる」

「その意気だ。詳しくは伝令を送る」

明日こと、決戦だ。

孟徳殿も、さすがに砂でしかない陣営は崩されるのは分かっている。

だが、伏兵も置く場所が無いはずだ。

……行けるはず。

翌日。

十万ほどの兵士を率いた翠や翡玉や蒲公英、関中軍閥の一部の将とは別に俺自身も、程銀達を連れ、数万人の兵士を連れて出撃した。

そして、俺は伝令の報告に悩ませられることになる。

「申し上げます！ 魏軍に陣営が完成しております！」

「・・・完成だと？ この地域は砂なのだが・・・」

李甚達に一旦、兵を任せ、俺は前線に出る。

そして眼に入っただのは・・・

「氷の陣営だと・・・？」

なぜ、こんなものが。と思ったがすぐに納得が言った。

どうやら孟徳殿は砂に水分を含ませ、昨日の夜の寒さで凍らしたらしい。

「玉！ どうする！」

翠の声が聞こえた時、陣営から大声が轟いた。

「我が魏の精兵達よ！ 行くぞーっ！」

『おおおおおおおおおおおっ！！！！』

陣営から飛び出してきたのは【夏侯】の旗をなびかせた魏兵だ。

元讓殿か・・・！

「あたし達西涼軍！ 中原の奴らに負けるなーっ！」

『うおおおおおおおおおおおおっ！！』

突然、出てきた魏軍にも怯まず翠もすぐさま対抗し、魏軍に負けな
い声を張り上げた。

だが。不意を突かれた兵はそうはうまくいかない。

「ぐああ！」

「ぎゃああ！」

兵士達の断末魔の声が響く。魏兵に押されている。

俺は馬首を返し、李甚のところへと急ぐ。

曹洪將軍に追われたが、翡玉がなんとか防いでくれた。

「突撃ーっ！」

兵を指揮して、どうにか優勢に持ち込みたいのだが、難しい。

兵の質で圧倒的に負けているのだ。

「も、申し上げます！」

乱戦状態の中、1人の兵士が俺に近付いてきた。

「どうした」

「別働隊として進軍していた梁興將軍が魏軍の伏兵、張コウに会い全滅！ 將軍は討ち取られました！」

「くそ・・・っ」

梁興が、やれた、か。

・・・これも戦争なのだから仕方がない。

「申し上げます！ 後方から【徐】と【朱】の旗を確認！ 魏軍の別働隊かと思われまます！」

「なんだとっ！？ どこからやってきたんだ！？」

「いつの間にか渡河したのではないかと！」

まずい・・・！

「張横將軍と程銀將軍に五万を連れて迎撃させろ！」

「御意っ！」

寒くなっているはずなのに、俺の額に汗が垂れ始める。

孟徳殿は良い軍師をお持ちのようだな・・・。

『おおおおおおおおおおおおおおおお！！』

やがて、後方から雄たけびが聞こえてきた。

なんとか西涼軍は数で持ち堪えているが、それも時間の問題だ。

翠と翡玉がなんとか前線を持ち堪えているが、魏軍の主力部隊だ。

あの元讓殿だからな・・・。

曹洪將軍もいるようだ。

後方の戦線は張横達、関中軍閥メンバーがなんとかなんとか持ち堪えている。

「敵将、張横この徐晃が討ち取ったりー！」

「敵将成公英、朱霊が討ち取ったりーっ！」

次々と名乗りを上げて行く声が聞こえてく。

・・・ちくしょう。

「盟主！ 戦線が持ち堪えられません！ 馬玩と成宜がなんとか持ち堪えています但这以上は・・・！」

「お兄様！ まずいよ！ お姉様と翡玉さんが頑張ってるけど、危ない！」

報告に来た侯選が返り血に身体を汚して来た。

・・・これ以上の戦線は継続不能か・・・。

「・・・つ。各將軍に伝令、兵を纏めて撤退してくれ。蒲公英、翡翠にしんがり殿を頼んでくれ」

『御意っ！』

「分かった！」

去って行く彼女らの後姿を見て、俺は溜め息をついた。

撤退する西涼軍に夏侯惇が追撃をしかけるものの、馬超の伏兵により追撃部隊は壊滅。

この戦いの死者の数は全部六ヶタと言われるが、その実際の数はもっと多いらしい。

その中でも西涼兵の数が多く見られたのであった。

二十一戦目「問題児は押される」(後書き)

完結は大晦日の予定です。

二十二戦目「問題児は、疑われる」(前書き)

一気に……！

駆け抜ける……！

二十二戦目「問題児は、疑われる」

side馬超

玉の考えの元、あたし達西涼軍は西に撤退し、陣営を築いて休みを得ることにした。

先の戦での被害が大きかったみたいで・・・母上が生きていた時から居た兵達もその数を減らしていた。

無事なものも少なく、ここまで撤退する最中、力尽きて倒れる者もいた。

「このままじゃ・・・」

負けてしまう。

そんな言葉があたしの頭の中に浮かんた。

軍師じゃないから難しいことはあたしにも分からないけど、不利とというのが分かる。

何十万もいた兵もかなり減っているように見える。

「どうするんだよ・・・玉・・・」

天幕の中であたしは悩んでいた。

・・・腹減ったなあ。

兵糧が足りないせいで、腹いっぱい食べれていない。

兵の多くは母上に恩を感じていたから我慢しているみたいだけど・・・。

それに最近、噂だと・・・

「翠いるかあー？」

天幕に突然玉が入ってきた。

だけどその姿はあまりにも酷かった。

「玉・・・大丈夫か？」

「大丈夫って何が？」

「お前の体調だよ。眼は隈で真っ黒だし、見た目死人になっているぞ？ 寝てるのか？」

「あー、一応大丈夫。それにちゃんと寝てるよ。・・・少し」

「・・・全く、あんまり無理しないでくれよ」

「ハハ・・・」

笑ってごまかす玉。

ここで倒れられたりしたら困るのだ。

「そういえば最近、夜に部下数十人くらい連れて時々陣営の外出て
るって兵士から報告があっただけで、なにしてんだ？」

「あー、なんというか・・・」

「言いよどむ玉。なぜ？」

「計略の準備ってだけじゃダメ？」

「まあ、計略なら仕方ないけど・・・」

「畏でも張っているんだろうか。」

「まあ、それにしか思いつかないけどさ。」

「んじゃ、俺はやることあるからさ」

「ああ、無理すんなよ」

「玉がまるで生ける屍のように、のそりのそりと天幕を出て行くと、
すれ違いに1人の兵が入ってきた。」

「馬超様・・・今の馬鉄様の様子・・・」

「ああ、いろいろと無理をしてるみたいでな・・・全くあいつは昔
から無理をするやつだからな。で、何の用だ」

「はい、先ほど捕虜にした魏兵から聞いた話なのですが」

「捕虜？ 捕らえたのか？」

「先の戦にて捕らえた魏兵でして、撤退で逃してしまいましたが、重用な情報を聞きだせました。遅れてしまいましたが、まだ古くは無い情報です」

「そういうことは玉・・・馬鉄の方に報告するべきだと思うのだが」

「それが、馬鉄様に関する情報なのです」

「玉の？」

「はい、実は・・・」

あたしは兵の話を聞いて、思わず机をひっくり返してしまった。

これがいつものようなあたしだったら信じなかっただろう。

しかし、長い戦に疲労が溜まる体。

すっかり疲れきってしまっていたあたしは判断を間違えた。

彼を疑い始めてしまった。

あたしが。

「そんなはずは・・・」

「あるのです馬超様。それがし某の推測ですと、そろそろ我らを壊滅しようと罫を張っているのではないでしょうか」

確かに、心当たりがある。

「馬鉄様は『西涼賢者』と呼ばれるほど、我らの土地である西涼では珍しい名士であります。そこまで用意周到なのもありえるのではないのでしょうか」

「・・・それだけで十分だ。出て行け」

「御意。馬超様、お氣をつけを」

「ああ」

去っていく兵士にあたしは散らかった天幕の中、座り込んだ。

（どういふことなんだよ・・・玉・・・！）

段々と怒りがこみ上げて行く。

今まで信じていたのに。

なぜ？

どうして？

何が目的なんだ？

考えることが苦手なあたしの頭の中を疑問がぐるぐると回っていく。

「・・・まだだ。あたしが直接見たわけでも聞いたわけでもないん

だ」

もしかしたら曹操の策かもしれない。

あたしはそれで自分を納得させるのだった。

そして数日後。

戦況は依然として膠着状態であり、玉が言っには小競り合いが少しあるくらいらしい。

そんな玉にまた、不思議なことが起きた。

「玉ー？ 書簡が届いたって聞いたんだけど」

「ああ、来たんだけど・・・」

玉の天幕を訪ねると、彼は座って届いたらしい書簡を首を捻りながら呼んでいた。

「どうした？」

「これを見てくれ」

玉があたしに見せたのは所々墨で読めなくされた書簡だった。

おかしい。

あたしの頭の中にそんな言葉が浮かんできた。

「これはどういうことだ」

「俺にも分からん。孟徳殿は一体何を考えているのか・・・」

曹操のことを孟徳と字で呼んでいる玉。

なぜそんなに親しげなんだ？

確かに玉は真名を知らない知り合いは字で呼んでいる。

しかし、軍議の時は「魏」とかしか呼んでいない。

おかしい。

「・・・なあ、玉」

「なんだ？」

「玉はあたしのことを裏切らないよな？」

あたしの言葉に玉は驚いたように目を見開いて、微笑む。

「当たり前だろ。俺が翠を裏切るわけないだろ」

「翡玉も、蒲公英もか？」

「何言つてんだよ。俺は翡翠さんの土地も、碧玉も、蒲公英も、民も裏切るなんてことはしない」

少しゃつれた顔だったけど玉の笑顔にあたしは嬉しくなった。

（そうだ。玉があたしを裏切るわけがないんだ）

疑ってしまったあたしが恨めしい。

疲れているだけだ。うん。

その夜、あの兵士がやってきた。

「馬超様、馬鉄様の処遇はいかがなさりますか」

「その話はもういい」

あたしの言葉に兵士は驚いたように声を荒げた。

「ど、どういうことですか！？ 馬鉄様は魏と内通しているのかもしれないんですよ！？」

「そんなはずはない。玉が、あたしを裏切るわけがない」

「落ち着いて考えてみてください。某も例の手紙を拝見させていたいただきましたが、おかしいとは思わないのですか？」

「何がだよ」

「墨で読めないようにされた書簡。絶対、裏があるはずす」

「・・・むう」

確かにおかしいと思うようなことはあつたけど・・・。

「もう一度お考えください。絶対に裏があるのですからでは、失礼します」

前回と同じように去っていく兵士に、あたしは溜め息を吐いた。

（玉が裏切るはずがない）

そう、頭の中で断言する。

そして、あたしは戦に備えて、愛槍の銀閃を磨き始めるのだった。

数日後。

あたしは出会ってはいけない場面で、この戦いの終わりの原因となつてしまふ出来事に出くわしてしまふのだった。

その時、あたしに諫言する兵士はいなくなっていた。

しかし、ただでさえ多い西涼軍にたかが1人兵士がいなくなつても気がつくことはなかったのである。

二十二戦目「問題児は、疑われる」(後書き)

完結まじかなので投稿が速くなります。

というか今年完結なわけですから四日しかないんですけども。

二十三戦目「問題児、逃げる」

「——ですから、馬超様に疑われているのですよ。このままでは殺されてしまうかもしれません」

うるさい。黙れ。

「疑われたままだと、馬鉄様もおおっぴらに行動できないんじゃないですか」

黙れよ。

「最近なんて、下手に動くなとか言われたばかりじゃないですか」

口を開くな。

「私はあくまでも馬鉄様の部下なんです。これは進言ですよ」

うるせえ。

「『西涼賢者』と呼ばれる馬鉄様なら曹操様も手厚く歓迎してくださるに違いありません」

うるさいうるさいうるさい。

「黙っている！ 一端の兵でしかない貴様がそのようなことを述べるではない！」

声を荒げるが、俺のしつこく裏切りを進めてくる兵士は態度を変え

ない。

一体どういうことなんだ？

最近、数人の兵士がある噂を持ってきたのだ。

『馬超が馬鉄を疑っている』『馬鉄を裏切ろうとしていることを知った馬超が殺そうとしている』とか。

翠がそんなことをするはずがない。

俺もまた信じているし、翠だって信頼してくれているはずだ。

……最近はかなり不味い状況だ。

渭水の戦いのように大規模な戦は起こっておらず、戦線は膠着状態長期戦になっている。

当然ただでさえ兵士が多いこの西涼連合の兵は兵糧が極限まで少なくなっている。

脱走兵も日に日に増え、一部の悪質な兵が近辺の村を略奪しているという報告まで来ている。

略奪を行ったものはもちろん死罪だ。

脱走兵も最初こそは見逃していたが、兵站を盗もうとしていた輩は死罪に処す。

一部の兵を故郷へ返したが、あまり多くは返せない。

確実に孟徳殿に狙われてしまうからな。

だから、数に物を言わせて決戦を仕掛けようとすれば奇襲または急襲され、決戦を仕掛ける前に撤退されてしまう。

少数の騎兵の散発戦ゲリラはかなり厄介だ。

通信系統が麻痺しかけているこの軍は混乱状態にさせられてしまう。瓦解することは翡翠や、残った程銀達頑張ってくれているおかげで防げているが……。

「ゴホゴホッ」

最近、身体がだるくて仕方ない。

軍医もいないので薬草を煎じて飲むしかないが、頭痛がする。

ろくに栄養も取れていないしな……。

天幕の外から気配がしたので見てみると、毎度毎度寝返りを申し出てくる俺の親衛隊の兵士だった。

「失礼します」

「……またお前らか、何のようだ」

「説得に来ただけです」

俺が考えた結果、こいつらは孟徳殿に買収された兵だということが分かった。

しかし、翔子が無いので下手に殺せば他の兵士達の不満を募らせてしまえかねないので、泳がせている。

「馬鉄様、寝返るべきです」

「だから言つたら、俺は寝返る気なんて——」

「てめえ——！！」

「なっ！？ 馬超！」

「ぐあっ！」

突然、天幕が切り裂かれると共に翠が銀閃を閃かせて兵士の1人を切り裂いた。

他の兵士が剣を抜く。

「翠っ！」

「あたしの真名を呼ぶんじゃない！」

「っ！？」

「信じていたのに……！ 玉のことを信じていたのに……！」

「翠！ 聞いてくれ！ 誤——」

「覚悟っ！」

弁明しようとする俺の言葉を留めて、兵士達が翠に向けて剣で襲い掛かった。

「はあっ！」

「うぐっ！？」

数では勝っていても翠は一騎当千の将だ。見事に蹴散らされていく。

「ば、馬鉄様！ 逃げましょう！」

1人の兵士が俺を掴んで言う。

「逃げるわけがない！ 俺は裏切るつもりなんてないんだ！」

兵士の手を振り払い、戦いを繰り広げる翠のどこに向かう。

しかし、

『おおおおおおおおおおおおおおお！！』

崩れた天幕の回りには数百人程度の兵士達が現れ。翠に襲い掛かった。

それに気がついたほかの兵士が翠を助けようとして、謀反を起こした兵士に切りかかる。

当然数の多い翠側の兵士が勝利するのだが、それは違う。

今起きているのは同士討ちだ。

同じ鎧を着ているのだから、乱戦になれば誰がどこの所属かなんて分からない。

たちまち乱戦は同士討ちへとなっていく。

頭に血が上っているのか翠は周りにいる人という人を斬っている。

「玉様！　なにがあつたのですか！？」

「詳しいことはあとで知らせる！　碧玉は蒲公英と合流して、混乱を沈めてくれ！」

「御意！」

「申し上げます——」

次々と入ってくる報告。痛む体にムチを打って俺は混乱沈めようと
するが、声が出ない。

ただでさえろくな物を食べていなかったのだ。今にも倒れそうにな
る。

そして最後に、俺は倒れそうになることになるのだった。

ヒュンヒュンと風を斬る音と共に空が明るくなった。

夜が明けたのではない。空を見上げるとそれは火矢の雨。

乾燥している冬季の時期はよく燃える。

天幕に引火した火は一気に燃えあがり、たちまち回りを火の海に変えた。

駄目押しを言わんばかりに地面を揺るがす関の声が上がるのである。

『おおおおおおおおおおおおおおおおお！！！』

「も、申し上げますっ！」

慌てた様子で返り血を浴びたのであろう赤く染まった帝銀が報告に来た。

「東と南から魏軍が現れ、陣営に侵に――」

ヒュンという音と共にドスという鈍い音が響いた。

「程銀っ！」

前のめりに倒れた彼女は俺に抱きかかえられるようになる。

「め……いしゅ……。ば、超様た……。ちを連れお逃げ……。ください……！」

最期にそれだけ言い残して彼女から力が抜けた。

「徐公明ここにありーっ！」

斧を携えた女性が名乗り上げて、魏軍の騎兵を連れて突撃をしかけてきた。

「盟主！　ここはこの楊秋が！」

「私成宜も！」

俺の後ろから二人が槍を携えて、徐晃將軍に向かっていく。

楊秋も成宜も関中軍閥の中でも実力者だっただけに、それなりに粘るかと思っていた。

しかし、それは涼州だけならば、だ。

「成宜っ！」

悲鳴に近い声で楊秋が叫んだ。

徐晃將軍はその斧で成宜を切り裂き、落馬させた。彼女が動くことはない。

「貴様あーっ！」

楊秋が徐晃將軍に切りかかるが、一閃。

彼女は徐晃將軍に通り過ぎられるようになり、落馬した。

徐晃將軍は俺を見ると、馬を駆けてきた。

「まずい……っ！」

俺は一目散に近くの馬に飛び乗り、腹を蹴って駆け出させる。

乱戦状態の西涼兵と魏兵の間を抜けて、俺はただひたすら逃げる。

俺の前にとある人物が立ち塞がった。

「馬鉄！　ここがあつたが百年目！　華琳様のためにその首いただくぞ！」

「なんでこういう時に出てくるんだよ……！」

元讓殿だった。

彼女はその大剣を煌かせ、俺に向かってくる。

馬術はいくら文官とはいえ西涼出身の俺だ。そこは勝っている。

しかし、戦闘力にすればどうなるか？

天地がひっくり帰っても勝てることはない。

勝つか負けるかの話の前に死ぬか、逃げれるかだけど。

そこに、俺に一直線に向かってくる元讓殿の横から二本の斧が振り下ろされた。

「くっ！　貴様は……？　徳か！」

「申し訳ありませんがやらせるわけにはいきません。玉様、ここは私に任せてください」

「翠はどうなった!？」

「姫もお逃げになられています！ 西涼兵は各自、撤退させています！」

「すまんが任せる！」

「くそっ！ 逃げるな！」

俺を追いかけようとする元讓殿の前に碧玉の二本の斧が阻む。

「玉様は……私が守る！」

首脳陣を失った西涼連合は瓦解し、魏軍は掃討を始める。

ここに、西涼連合の敗北が決まったのだった。

しかし、物語は、戦いはまだ終わっていない。

二十四戦目「問題児よ、永遠に」(前書き)

完結話です。

二十四戦目「問題児よ、永遠に」

いつからだろうか。

俺がこの世界の住人ではにことを思い出したのは。

昔だったか最近だったかなんてすでに覚えていない。

だけど言えることは今みたいに、『西涼賢者』とかそういう大層な異名なんてなく、『軍師』ですら『文官』とかそんな肩書きさえ無かった俺が居た。

本当に何にも覚えていない。

俺が『この』世界に慣れてしまったからなのか、『あの』世界を忘れてしまったからなのか。

……本当に分らない。

ただ言えることはただの一般人だったと言えることだ。

それも学業を学んでいる人だったし、歴史が好きな男子だったはず。

少なくとも『あの』世界は『この』世界の何十倍、何百倍、何千倍も、便利で、豊かで、平和で、みんなが笑顔で、楽しみを持って、命の危機に怯えずに居て、おいしいご飯も食べれて、友達と喋れて、どんなに遠くに離れていてもお話しできて、愛せて。

俺が覚えている『あの』世界のことなんて微妙でしかないけど、それでも『彼女』らに頼ってもらえて嬉しかった。

『あの』世界ではない『この』世界で生きる彼女が俺を頼ってくれて嬉しかった。

しょせん非力でしかない俺だけど、彼女らの苦手なところを任せて欲しかった。

だからこそ、俺は努力した。『彼女』らには無いものを補えるように。

西涼という過酷な環境の下でも笑顔で居られるように。命を救ってくれることもあったんだ。

だからこそ。

——俺は自分の命を犠牲にしても彼女を生かす。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

俺は倒れるように地面に寝転がった。

馬はすでに乗り潰してしまい、俺は走ってここまで逃げてきた。

遠くに見える赤い光はかつて西涼連合の陣営があった場所だ。

まだ魏軍の追撃舞台が追ってきているのが分かる。

速く逃げねば殺されてしまう。

（翠達は逃げ切れただろうか……）

なによりもこれが心配だ。

俺が逃げてきたこの高地は彼女らをもしもの時に『逃がす』ために長い期間をかけて作った場所なんだから。

川の流れが聞こえてくる。水は飲みたいけど居間酸素が欲しい。

その時、パキパキと木の枝を踏む音が響く。

数は一つ。

盗賊か？ それとも脱走兵か？

近付いてくる足音は不思議と恐怖は感じられなかった。

やがて足音の主は俺を見下ろすように見てきた。

その顔は普段なら見慣れた快活な笑顔が似合う顔。

特徴的なポニテールが重力にしたがって垂れている。

俺はふと頬が緩むのが分かる。

「翠」

「玉っ！」

寝転がる俺の頭を抱き締める翠。

おおっ。お胸の感触が……。

「玉ごめん……！ ごめんなさい……！」

おおっ翠よお、何を誤っている。なに泣いている。

それよりも抱き締める力緩めてくれない？

ただでさえ酸素求めているのに翠ちゃんのお胸で酸欠で死んじゃうよ？

「ごめん玉う……あたしが……あたしが玉のことを疑っちゃったから……」

俺は翠の頬に手をやる。

やっと抱き締める力が緩んだ。

「もういいんだ翠。謝ることはない。俺達が負けたんだ。ただそれだけ」

勝敗は兵法の常道。

死んでいった兵士達には悪いが、戦はそういうものなのだ。

「さて、最期の仕事だ」

「え？」

「玉様あー！ 姫えー！」

「お姉様〜！ お兄様〜！」

翡翠と蒲公英そして俺の部下達を連れて合流してきた。

よかった。これでなんとかなる。

「侯選、馬玩。例のあれは用意できたか？」

「はっ。……確かに、準備は出来ましたが、よろしいので？」

「盟主自ら行かなくてもより良い気が……」

「いいんだ。少しでも時間を稼ぐために必要だからな」

「どういうことなんだ……？」

俺と彼女らのやり取りを不振に思ったのか、翠がそんな疑問をしてくる。

……ごめん翠。

その質問の本当のことは言えないんだ。

「翠、これからの方針なんだが」

これから話そうとしている時だった。

「見つけたぞっ！ 捕まえろーっ！」

「玉様！ 魏軍の追撃部隊に見つかりました！ いかがなさいますか」

「……おちおちと説明している暇は無いな。碧玉、お前にやってもraithたいことがある」

「はっ。なんなりと」

「翠及び蒲公英と、連れていけそんな残存兵士を引き連れ西涼から南に脱出してくれ。漢中を経由して蜀に行けば劉備軍に保護してもらえるはずだ。それまで翠達を頼む」

「ぎよ、玉様は？」

「俺は馬玩達と残存部隊を率いて魏軍の追撃を防ぐ」

「そ、そんな玉様が危険です！」

「そつだ！　だったら玉も逃げよう！」

「そつだよお兄様！　危険だよ！」

……ああ、辛いよ。辛い。

「碧玉、頼む。聞いてくれ」

「玉様……。御意です」

「お、おい碧玉まで何言つてんだよ！」

声を荒げる翠に碧玉が無理矢理のように腕を掴む。

「姫……っ！　私だって辛いのです……！　玉様の覚悟を無駄にするつもりですか……！」

「碧玉……あたしは……」

「頼むよ碧玉」

「御意……！ 必ず帰ってきてください……！ さ、行きますよ姫、蒲公英」

「やだやだ！ お兄様と離れたくないよ！」

わめく蒲公英を無理矢理連れて行く碧玉。

残存兵士達が彼女らに付いて行く。

兵士達は1人1人、俺に礼をして向かっていく。

やがて彼女らが行ったあと、

「さて皆。俺らの仕事は魏軍の追撃部隊を止めることだ」

「はっ！ そのための準備は出来ております！」

「ちょうどこの付近には第一の罠が貼つてあります！」

「ありがとう。みんな世話になった。それで今からも世話になる。命を俺に、西涼にくれ」

『我ら盟主に最初から命を捧げるつもりでございます！』

「では行くぞっ！」

『応っ！――！』

すまない翠、碧玉、蒲公英。

俺はもう君たちと出会えることはない。

約束を破ってしまつて申し訳ない。

だが、俺にはやることがある。

文官を軽んじる傾向にある西涼で唯一の文官や軍師と言える立場の俺。

文官にも関わらずこの西涼は俺を暖かく出迎えてくれた。

礼を以つて礼を返す。

ならば俺は西涼の魂と思える彼女らを救うために恩返しをしよう。

『西涼賢者』なんだ。

最期くらい賢者らしく……いや、術者くらいにはなつてやる！

西涼連合軍敗残兵掃討のために多くの兵が逃げていく兵士達を追つていく。

彼らの目的は『馬超及び馬鉄等、首脳陣の捕縛』だ。

「馬鉄だ！ 捕まえろ！」

森が開けた地に馬鉄は不自然に1人で居た。伏兵がいるかは分からない。

魏軍の追撃部隊は次々と合流しその数を増やし、将も『夏侯』徐』『朱』『曹』とその数をどんどん増やしていく。

馬鉄はそんな大軍の魏軍を目の前にして全く恐れていないように見える。

「我が名は姓を馬、名を鉄、字を仲誠。西涼の賢者なり！ 自然の力を操る我の前に平伏すが良い！」

剣を振った瞬間、地面が揺れた。

「な、なんなんだ！？」

不振に思った魏兵の1人が声を荒げると将達も不振に思い、進撃を止めた。

これは一体なんなのだ？ なにが起ころうとしているのだ？

ゴゴゴという地面から鳴り響く音は段々と大きくなってきている。そこに、

「火、火だあ！」

森が開けた場所にいる彼らは両端から火の手が上がることに驚く。だが、あくまでも森の部分であり、開けた道に展開していることで被害はない。だから将達も無視をした。

まるで儀式かのように剣舞を踊りだす馬鉄。

そしてとうとう地鳴りの正体が現れた。

「あ、あれは……！」

「み、水だ！」

「こつちに来るぞっ！」

水流は馬鉄を追うようにして勢いよく流れ込もうとしている。見方によつては馬鉄が水流を率いているように見えていた。

馬鉄を飲み込んだ水流は魏軍に流れ込んでくる。

森に逃げ込もうとすれば火によってそれを塞がれ水に飲まれた。

「う、うわあー！」

「西涼賢者の怒りだあー！」

「ぎゃああああ！」

この時代に人間は術や占いなどそういう類に信じやすい傾向にある。

そのせいでこの出来事は西涼賢者の呪いとして魏軍の恐れられることであつた。

その後魏軍の追撃部隊が再び追撃しようとするがそのたびに火計、水計、土砂、落石などの出来事により魏軍は追撃を諦めた。

次々と襲い掛かるのは死兵と化した馬鉄の部下達に恐れをなしたというのも一つ。

その実態はこの数々の出来事により魏軍の中で『今、涼州に行く』と西涼賢者の怒りを受ける』という噂が出回り、魏兵が進もうとしなかつたかからである。

「流石、馬鉄ね……死んでもなお、私の軍を恐れさせるとは……」

曹操は馬鉄の遺体を捜させたが、見つかることはなかつた。

唯一見つかったのは彼が最期に持っていたと思われる剣のみ。服など身に着けるものも見つかることはなかつたのである。

『死せる馬鉄、曹操をも恐れさせる』そんなことわざが出来た瞬間である。

「……落ち着いたら次は呉と蜀ね……。西涼が落ち着いたら彼の遺品を確認することにしましょう……」

見事、さすがの王佐の才ね。と曹操は言葉を漏らすと次に来る蜀と呉の戦いに向けて頭を切り替えるのであつた。

荒れた大地からは新たな芽が顔を出し、焼けた木々からは新芽が出ている。

過去に戦場だったということを感じさせられるその地に1人の女性が無馬を連れ、歩いてきた。

その女性は茶色い一本に束ねた髪をたなびかせる。

（あれから六年が経ったんだなあ……）

女性は懐かしそうに周りに光景を見ていると彼女の背中からひよつこりと1人の少女が顔を出した。

「ははうえー、どうしたのですかー？」

「ちよつと懐かしくてね」

女性をそのまま小さくしたような少女だった。女性はその娘の頭を撫でると娘を気持ち良さそうに顔をほころばせる。

六年前こそ彼女はまだまだ少女だったかもしれないが、彼女は『母親』になっていたのだ。

「ははうえ、なんでここに来たのー？」

「それはな、あたしが昔ここで戦ってたからなんだ」

「そうなの？ ははうえすごい！」

後ろに娘を乗せた彼女は馬をゆっくりと進めさせる。あまりにも懐かしすぎる光景に彼女は微笑みを浮かべていた。娘はきょとんとしていたのだが。

この地は昔を感じさせられないほどの自然に溢れていた。戦場であったと分かるのはところどころに散らばった陣営の木々や武器の破片。しかし、そこから新芽が芽吹いているせいで確認がしにくかったが、彼女には強く思い出させられるきっかけにはなっていた。

（あたしの心はずっとここに置き忘れていたけど……）

六年前、脱出した彼女らは漢中へと逃げ込んだ。その途中に部下を、大切な家族が捕まってしまったのだが。

従妹と気がつけば数十人となっていた兵士を連れて蜀に保護してもらうことになった。

そしてそれか数ヶ月。

曹操は西涼の土着勢力の平定を断念。あまりにも抵抗が強く異民族の襲来を考え、融和同盟を行うしかなかった。そして彼女は、南下政策をとることになる。

だが、それも蜀呉連合軍により彼女の霸道は終焉を迎えることになったのだ。

三国同盟という形で終わった中華大陸は復興に乗り出す。

彼女は本当はすぐにも愛している彼を探し出したいのだが、あくまでも彼女は蜀の武官。劉備も本当なら許可を出してあげたかったが国としての体面を保つために彼女は必死に働いていたのだ。

他にも理由はある。

蜀呉連合軍が魏に勝利し、三国同盟のきっかけにもなった『赤壁の戦い』のあと彼女は妊娠が発覚したのだ。

同時期に劉備や関羽も発覚したことで蜀は大変なことになり、諸葛亮達は涙目だったのは言うまでもない。

子供がある程度大きくなったあと彼女は再びこの地へと戻ったのだ。

「ははうえ？　なんで泣いてるの？」

「え……？」

頬に触れるとしつとりとした湿りが感じられた。娘に指摘されるとポロポロと涙が零れ落ちてくる。

—— ああ、まだあたしは忘れられないんだ。

彼女は思わず意図しの彼との間に出来た娘を強く抱き締める。

「玉う……玉う……会いたいよあ……！　約束したじゃないかあたしのこと一日好きにするって……！」

思わず出てくる言葉だが娘は意味が分からない。だが母の悲しみを悟ったかのように娘は母を撫でる。

「だいじょうぶだよ、ははうえ。あたしがいるよ」

まるで彼のような暖かい手。ひ弱だったけどそれでもいつでも優しく、武だけだった自分を補ってくれて愛してくれて。西涼の民のことが大好きで。

（会いたい……！ また会いたいよ玉う……！）

その瞬間、世界が動いた。

外史とは強く望めば生まれるもの。

外史とは無限に広がるもの。

もしかしたら一つの物語は億千万、無量大数に匹敵する数ほどになるかもしれない。

望め。再刊を望むなら望め。

さすれば外史として、新たな物語を生む。

「姫！ やつと追いつきましたよ」

「まったくお姉様は。ここまで遠乗りするんだったら承ちゃんを蒲公英に任せればいいのに」

彼女——性を馬、名を超、字は孟起、真名は翠——は娘の馬承を抱き締めながら、目に溜まる涙を袖で乱暴に拭き取って振り返った。
「いいじゃんかよ。承だつて色んなところ行きたいよな！」

「うん！」

「まったく……」

「承ちゃんも駄目なところでお姉様に似ちゃったね」

六年という時間が経ち、少女だった彼女らも大人へとなっていた。蒲公英も背丈は翠と変わらなくなり、胸もそれなりの大きさを誇っている。髪形は変わらないが髪は伸ばしていた。

「碧玉ももう姫なんてやめてくよ。あたしはもうそんな年じゃねえよ」

「では……女王様？」

「アホかつ！……あと蒲公英、帰ったら鍛錬な」

「えゝ！？ そんなゝ！？」

そんな蒲公英をほつといて翡玉は翠に近付く。彼女もまた、思い出していた。

「……玉様のことを思い出していらつしやったのですか？」

「……ああ」

「六年前、私は魏軍の将に捕らわれたの覚えていますか？」

「ああ、あの時は殺されたと思ったよ。それで、お前と戦うことになつて……驚いたよ」

「私は戦いたくなかったのですが……生きるため、それと魏の勢力に入れば西涼の調査をさせてもらえるお思っていたんで」

「でも、魏の軍師の諫言で駄目だったんだろ？ 独立してしまうとかそんな理由つけられて。滑稽な話だよなあ」

「……まあ、私も未熟でしたからね」

「だが、ま。こうして居られるんだから……」

「お姉様も翡玉さんも何はなしてるのゝ？ ……あー。そつかあ」

蒲公英も思い出したかのように言葉を止めた。

「懐かしいなあ……、ねえ。お姉様」

「ああ……。翡玉もだろう？」

「もちろんですよ。私だって……いつそ死んであの方のところに行こうと思つたくらいですから」

翠の娘である承を加え四人で付近を廻る。

場所によつては思い出話をしたり、懐かしさに涙を流し、笑い話に笑う。

気がつけば空は暗くなってきた。

「承？ 眠いか？」

「ね、ねむいよははうえゝ」

こつくりこつくりという動作に加え、目がうつろになつてきている。

「さて……そろそろ帰らないとな」

「長居しすぎましたし、近くにある村で宿を取りましょう」

「そうしょ」蒲公英もう疲れた」

三人は馬を駆ける。すぐにでも寝てしまいそんな承を落とさないように。

彼女らの戦いは終わった。

これから来る戦いは異民族の問題だ。

この大陸が本当の平和になるのはまだまだ先の話である……。

（玉……あたしはまた会いたい……会いたい……っ！）

（玉様……私はとても寂しいのです……なぜあの時逝かれたのですか？……こんなにもお慕いしていますのに……）

（お兄様……蒲公英だって大人になったんだよ？　なんで一緒に居てくれないの？　蒲公英は……とっても寂しいよ……）

外史は望まれれば生まれるもの。

彼女らの思いは外史を動かすのかもしれない。

— 完 —

『西涼の鉄ちゃん！』

「ん？ なに？ いや、いろいろ説明はぶくけど、なにこれ？ どうなってるの？ あれ俺死んだんじゃ……とかは無いけどさ」

『つまらないなあ』

「いやいやいや。俺の気持ち分かってよ。状況読めないよ。翠達とにやんにやんする予定なのに」

『ま、次は頑張つてよ。かつこよかったし。やっぱいいねえ。最初はギャグと思わせて、最後はシリアスつて』

「待て待て待て待て待て。どういふことなの？ 説明頼むよ。ねえ！ 説明！」

『次はいろいろマシにしてあげるよ。ま、次も頑張つてね？ 応援してるよ？』

「次ってなんだよ……！？」

その男は死なない。

西涼の鉄ちゃん。

次があるかもしれない。

二十四戦目「問題児よ、永遠に」(後書き)

たくさんのお応援ありがとうございました。

【西涼の鉄ちゃん】はこの話にて完結です。

まあ、補足なのを更新しますが。

兎も角、無事こうして完結してよかったです。

今年は多くの出来事があったせいで忙しく、一時期全く更新することができないことがありましたが、本当によかった。

元々この作品のコンセプトは【翠可愛い】で始まりました。

それでたどり着いたのが「そういえば西涼に文官みたいな人居ないよな」です。実際に史実の三国志では見つかっていませんし、気づかないだけかもしれませんが。

内容としては私個人の感想だと正直いまいちです。

内容薄すぎます。

残念すぎます。

軍師っぽくないし。

次回作はリアリティを入れた三国志に近いような近くないような作品のつもりです。

コンセプトとしては【三国志】ですけどね。

参謀とか政治家とかいろいろやらされる予定です。

次回作予告をお楽しみに。

それではみなさん七ヶ月間ありがとうございました！

良いお年を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9370s/>

西涼の鉄ちゃん

2011年12月31日20時49分発行